

大畠家ノ上遺跡

—国道279号二枚橋バイパス道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2011年3月

青森県教育委員会



調査区と大畠市街を望む 北→



調査区全景 上→



大烟家ノ上遺跡 出土土器（縄文時代後期前葉）



大烟家ノ上遺跡 出土石器（打製石斧、磨製石斧、礫器）

序

青森県埋蔵文化財調査センターは、平成21年度に国道279号二枚橋バイパス道路改築事業予定地内に所在する大畠家ノ上遺跡の発掘調査を実施しました。

調査の結果、縄文時代後期前葉の住居跡、土坑、中期末葉のフラスコ状土坑などの遺構や、同時期の土器、石器、ベンガラの付着した土器などの遺物が発見されました。特に、下北地域における縄文時代後期前葉の集落跡の発見は珍しく、当該地域の当時の集落構造を知る資料のひとつとなります。

本報告書は、平成21年度大畠家ノ上遺跡発掘調査事業の調査成果をまとめたものです。この成果が今後、埋蔵文化財の保護と研究等に広く活用され、また、地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護と活用に対してご理解をいただいている青森県県土整備部道路課にお礼申し上げるとともに、発掘調査の実施と報告書の作成にあたりご指導、ご協力をいただきました関係各位に対し、心より感謝いたします。

平成23年3月

青森県埋蔵文化財調査センター
所長 新岡嗣浩

例　言

- 1 本書は、青森県県土整備部道路課による国道279号二枚橋バイパス道路改築事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成21年度に発掘調査を実施した大畑家ノ上遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査面積は2,060m²である。
- 2 大畑家ノ上遺跡の所在地は、青森県むつ市大畑町大字二枚橋字釣屋浜、字家ノ上地内、青森県遺跡番号は、208152である。
- 3 大畑家ノ上遺跡の発掘調査報告書は青森県教育委員会が刊行する初めての報告書である。
- 4 発掘調査及び整理・報告書作成の経費は、発掘調査を委託した青森県県土整備部道路課が負担した。
- 5 発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下のとおりである。

発掘調査期間	平成21年4月27日～7月7日
整理・報告書作成期間	平成22年4月1日～平成23年3月30日
- 6 本書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆と編集は、青森県埋蔵文化財調査センター岩田安之文化財保護主事、最上法聖文化財保護主事が担当し、文末に執筆者名を記した。依頼原稿については、文頭に執筆者名を記した。第2章の第1節・第2節は、青森県立郷土館島口天が執筆し、第3節は、岩田・最上が執筆した。
- 7 発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。

航空写真撮影	株式会社シン技術コンサル
石器の石質鑑定	青森県立郷土館　島口　天
出土火山灰の同定・分析	弘前大学　柴　正敏
炭化種実の同定	株式会社パレオ・ラボ
赤色顔料の同定	株式会社パレオ・ラボ
炭化物の放射性炭素年代測定	株式会社加速器分析研究所
- 8 発掘調査成果の一部は、「むつ市文化財調査報告 第38集」等において公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、正式報告として刊行する本書がこれらに優先する。
- 9 発掘調査及び整理・報告書作成における出土品、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。
- 10 発掘調査及び整理・報告書作成に際して、下記の方々と機関からご協力・ご指導を得た（敬称略、順不同）。

むつ市教育委員会 岩館寛 小山卓臣 坂本朋子 関根達人 奈良正義 山口吾一郎
- 11 本書に掲載した地形図は（遺跡位置図等）は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「大畑」及び青森県県土整備事務所発行の500分の1用地平面図を複写して使用した。
- 12 測量原点の座標値は、日本測地系に基づく平面直角座標第10系による。
- 13 採図中の方位は、すべて日本測地系の座標北を示している。
- 14 全体図等の縮尺は、それぞれにスケールを付してある。

- 15 遺構については、確認順にその種類を示す略号と通し番号を付した。遺構に使用した略号は、以下のとおりである。
SI - 住居跡 SK - 土坑 SN - 焼土遺構 SX - 性格不明遺構
- 16 遺構実測図の土層断面図等には、水準点を基にした海拔標高を付した。
- 17 遺構実測図の縮尺は、原則として住居跡の炉跡等は1／30、住居跡、ピット等は1／60、土坑は1／40に統一し、各挿図ごとにスケール等を示した。
- 18 遺構実測図に使用した網掛けの指示は、以下のとおりである。

 硬化範囲・粘土  烧土  炭化物

- 19 遺跡の基本土層にはローマ数字、遺構内堆積土層には算用数字を使用した。
- 20 基本土層・遺構内堆積土層の色調表記等には、『新版標準土色帖 2003年度版』(小山正忠・竹原秀雄)を使用した。
- 21 遺物については、取り上げ順にその種類を示す略号と通し番号を付した。遺物に使用した略号は、以下のとおりである。
P - 土器 S - 石器 C - 炭化物
- 22 遺物実測図には、挿図ごとに1から通しの図番号を付した。同一個体と考えられる土器等には、図番号に小文字アルファベットを組み合わせて表記した。
- 23 遺物実測図の縮尺は、原則として繩文土器は1／3、土製品は1／2、剥片石器は1／2、礫石器は1／3、1／6、石製品1／2に統一し、各挿図ごとにスケール等を示した。
- 24 遺物実測図に使用した網掛けの指示は、以下のとおりである。

 赤色顔料  タタキ・クボミ  スリ

- 25 土製品、石製品等の計測値は、長さ×幅×厚さ(cm)・重さ(g)の順に表記したが、()内の数値は現存値である。
- 26 遺物写真には、遺物実測図と共に図番号を付した。
- 27 遺物写真の縮尺は不同である。

目 次

序

例言

目次

第1章 調査の概要.....	1
第1節 調査に至る経過.....	1
第2節 調査の方法.....	1
第3節 調査の経過.....	3
第2章 遺跡周辺の環境.....	7
第1節 周辺の地形・地質.....	7
第2節 遺跡内の地質.....	8
第3節 周辺の遺跡.....	11
第3章 調査結果.....	13
第1節 縄文時代の遺構と出土遺物.....	13
第2節 遺構外出土遺物等.....	40
第4章 自然科学分析.....	54
第1節 大畑家ノ上遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）.....	54
第2節 大畑家ノ上遺跡出土の火山灰について.....	61
第3節 大畑家ノ上遺跡出土の炭化穀実.....	64
第4節 大畑家ノ上遺跡出土土器付着赤色顔料の蛍光X線分析.....	67
第5章 考察.....	71
第1節 下北地域における縄文時代後期初頭から前葉の土器の特徴.....	71
第2節 大畑家ノ上遺跡出土礫器の特徴.....	77
第3節 土器埋設遺構について.....	79
第6章 まとめ.....	84
遺物観察表.....	87
写真図版.....	91
報告書抄録.....	113

挿 図 目 次

図1 調査区域図	6	図31 遺構外出土遺物（5）	47
図2 むつ縄岳火山噴出物の分布と 段丘面の分布	9	図32 遺構外出土遺物（6）	48
図3 基本層序	10	図33 遺構外出土遺物（7）	49
図4 周辺の遺跡	12	図34 遺構外出土遺物（8）	50
図5 遺構配置図	14	図35 遺構外出土遺物（9）	51
図6 第1号住居跡	15	図36 遺構外出土遺物（10）	53
図7 第1号住居跡出土遺物	16	図37 火山灰サンプル採取地点	62
図8 第1号住居跡床下土器埋設遺構 出土遺物	17	図38 調査区北部基本層序	62
図9 第2号住居跡	18	図39 関連遺跡位置図	72
図10 第2号住居跡出土遺物（1）	18	図40 下北地域出土土器（1）	73
図11 第2号住居跡出土遺物（2）	19	図41 下北地域出土土器（2）	74
図12 第3号住居跡	21	図42 下北地域出土土器（3）	75
図13 第3号住居跡出土遺物	21	図43 下北地域出土土器の器形・ 文様模式図	76
図14 第4号住居跡	22	図44 碠器（1）（再掲）	78
図15 第4号住居跡出土遺物	22	図45 碠器（2）（再掲）	79
図16 第6号住居跡	24	図46 関連遺跡位置図	80
図17 第6号住居跡出土遺物（1）	25	図47 第1号住居跡床下土器埋設遺構 (再掲)	81
図18 第6号住居跡出土遺物（2）	26	図48 青森県における住居内埋設土器	83
図19 土坑（1）	32		
図20 土坑（2）	33		
図21 土坑出土遺物	34		
図22 第2号焼土遺構	34		
図23 ピット配置図	35		
図24 ピット断面図	36		
図25 剥片集中1	39		
図26 剥片集中1出土遺物	39		
図27 遺構外出土遺物（1）	43		
図28 遺構外出土遺物（2）	44		
図29 遺構外出土遺物（3）	45		
図30 遺構外出土遺物（4）	46		

写 真 図 版

写真図版 1 調査区全景	92
写真図版 2 巨礫部分・第 6 号住居跡 炉跡	93
写真図版 3 住居跡（1）	94
写真図版 4 住居跡（2）	95
写真図版 5 住居跡（3）	96
写真図版 6 住居跡（4）	97
写真図版 7 住居跡（5）	98
写真図版 8 住居跡（6）・土坑（1）	99
写真図版 9 土坑（2）	100
写真図版 10 土坑（3）	101
写真図版 11 土坑（4）・焼土遺構（1）	102
写真図版 12 焼土遺構（2）・ピット・基本層序等	103
写真図版 13 ピット	104
写真図版 14 防空壕？・作業風景等	105
写真図版 15 住居跡出土遺物（1）	106
写真図版 16 住居跡出土遺物（2）	107
写真図版 17 住居跡出土遺物（3）・土坑出土遺物	108
写真図版 18 遺構外出土遺物（1）	109
写真図版 19 遺構外出土遺物（2）	110
写真図版 20 遺構外出土遺物（3）	111
写真図版 21 遺構外出土遺物（4）	112

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経過

国道279号二枚橋バイパス道路改築事業予定地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについての協議は、青森県県土整備部道路課から工事予定地内の埋蔵文化財包蔵地の有無について青森県教育庁文化財保護課に照会がなされたことに始まった。事業予定地内の遺跡を確認した結果、大畑家ノ上遺跡・二枚橋（1）遺跡・涌館遺跡の所在が明らかになり、発掘調査の条件の整った遺跡から順次調査することとなった。

大畑家ノ上遺跡については遺跡隣接地であったが、現地踏査を行ったところ遺物の散布が認められたことから、平成19年5月に新規登録を行った。平成19年8月に県教育庁文化財保護課が試掘調査を実施し、本発掘調査区域を確定した。

その後、平成21年4月に青森県県土整備部道路課、県教育庁文化財保護課及び埋蔵文化財調査センターの三者で発掘調査前の事前協議を行い、平成21年4月27日から発掘調査を行った。

なお、今回の大畑家ノ上遺跡の土木工事等のための発掘調査に関する通知書は、下北地域県民局長から平成21年3月13日付けで提出され、平成21年3月23日付けで青森県教育委員会教育長から当該発掘前における埋蔵文化財の記録を作成するための発掘調査の実施が指示された。
(成田)

第2節 調査の方法

（1）発掘作業の方法

平成19年度に青森県教育庁文化財保護課が実施した確認調査により、縄文時代後期前葉の遺物が発見されているため、縄文時代の遺構調査に重点をおいて、集落の時期・構造を把握できるような調査方法を採用した。

〔測量基準点・水準点の設置〕

道路改築工事のために設定した座標を有する基準点から標準の座標を備えた20m間隔の実測基準点（方位に合わせた一辺20mの方眼点）をトータルステーションを用いて設置し、これを基準として $4\text{ m} \times 4\text{ m}$ のグリッドを設定した。各グリッドの名称は、南から北に英語のアルファベット、東から西に算用数字を付けて、その南東隅の組み合わせで呼称した。実測基準点となったグリッドの国土地標は、D-9グリッドが $X=157060 \cdot Y=27040$ 、I-4グリッドが $X=157080 \cdot Y=27060$ 等である。測量原点には、既存成果（平成9年度 国道279号道路改良用地測量業務委託）を利用し、No.11等を基準点として使用した。レベル原点も、既存成果（前出）のKBM 3を原点として、50cm間隔で切りのよい標高をもったベンチマークを数ヶ所設置した。

〔基本土層〕

遺跡の基本土層については表土から順にローマ数字を付して呼称した。同じ層の中でさらに層が分かれる場合は I - 5 のように枝番を付した。

〔表土等の調査〕

平成19年度の確認調査により、表土付近は熊笹に覆われ、また遺物の包含の少ないことが分かったため、準備が整いしだい、重機を併用して掘削の省力化を図った。出土した遺物は、適宜地区単位で層位ごとに取り上げた。

〔遺構の調査〕

遺構として認定したものには、原則として確認順に種類別の番号を付けて精査した。堆積土層觀察用のセクションベルトは、遺構の形態、大きさ等に応じて、基本的には4分割または2分割で設定したが、遺構の重複や付属施設の有無等により必要に応じて追加した。遺構内の堆積土層には、算用数字を付けて、ローマ数字を付けた基本土層と区別した。遺構の平面図は、主に（株）CUBIC 製「遺構実測支援システム」を用いてトータルステーションによる測量で作成した。遺構の堆積土層断面図や住居跡に伴う炉等の平面図、埋設遺構、出土遺物の形状実測図は、簡易遣り方測量等で縮尺1/20・1/10の実測図を作成した。遺構内の出土遺物については、遺構単位・遺構内地区単位で層位ごとに、または堆積土一括で取り上げたが、床面（底面）や炉の出土遺物、特異な遺物、復元可能な遺物などについては、トータルステーションや簡易遣り方測量により、必要に応じて縮尺1/20・1/10のドットマップ図・形状実測図等を作成した。

〔写真撮影〕

写真撮影には、原則として35mmモノクローム、35mmカラーリバーサルの各フィルム及び1,220万画素のデジタルカメラを併用し、発掘作業状況、土層の堆積状態、遺物の出土状態、遺構の確認状況・精査状況・完掘後の全景について記録した。また、業者に委託して、ラジコンヘリによる遺跡及び調査区域全体の空中写真撮影を行った。

（2）整理・報告書作成作業の方法

調査の結果、大畠家ノ上遺跡では、縄文時代の住居跡5軒、土坑11基、ビット60基、焼土遺構2基、剥片集中1ヶ所が確認され、土壤サンプルなどを除く縄文時代の土器、石器等の遺物が31箱出土した（発見届では46箱になっているが、二枚橋（1）遺跡分も含まれているためである）。縄文時代の集落の時期・構造等を解明するため、住居跡をはじめとする各遺構の構築時期の検討に重点をおいて整理・報告書作成作業を進めた。

〔図面類の整理〕

遺構の平面図は主にトータルステーションと簡易遣り方による測量で作成したため、整理作業ではこれを原則として、簡易遣り方測量で作成した堆積土層断面図や炉等の付属施設との図面調整を行った。また、遺構台帳・遺構一覧表等を作成して、発掘作業時の所見等を整理した。

〔写真類の整理〕

35mmモノクロームフィルムは撮影順に整理してネガアルバムに収納し、35mmカラーリバーサルフィルムは発掘作業状況、包含層遺物の出土状態、遺構ごとの確認・精査状況等に整理してスライドファイルに収納した。また、デジタルカメラのデータは35mmカラーリバーサルフィルムと同様に整理してタイトルを付けた。

〔遺物の洗浄・注記と接合・復元〕

縄文時代の遺構出土遺物及び包含層出土遺物を優先的に洗浄し、接合・復元作業を早期に進めるようにした。遺物の注記は、調査年度、遺跡名、出土区・遺構名、層位、取り上げ番号等を略記したが、剥片石器等、直接注記できないものは、収納したポリ袋に注記した。接合・復元にあたっては、同一個体の出土地点・出土層等の整理を怠らないようにした。

〔報告書掲載遺物の選別〕

遺物全体の分類を適切に行った上で、遺構に伴って使用・廃棄（放置）された資料、遺構の構築、廃絶時期等を示す資料、遺存状態が良く同類の中で代表的な資料、所属時代（時期）・型式・器種等の分かる資料等を主として選別したが、類例が少ないものも積極的に選別し、掲載するようにした。

〔遺物の観察・図化〕

十分観察した上で、遺物の特徴を適切に分かりやすく表現するように図化した。特に、縄文時代の復元個体については、極力拓本を使用せず、すべて実測図を作成するようにした。また、遺物台帳・観察表・計測表等を作成した。

〔遺物の写真撮影〕

業者に委託して行ったが、実測図等では表現しがたい質感・雰囲気・製作技法・文様表現等を伝えられるように留意した。

〔自然科学分析〕

放射性炭素年代測定による住居跡とフ拉斯コ状土坑の機能・廃棄時期の推定、住居跡内で発見された炭化種実の同定、土器に付着した赤色顔料の分析を業者に委託して行い、火山灰の同定は弘前大学理工学部柴正敏教授に依頼して行った。石器の石材の鑑定は青森県立郷土館島口天主任学芸主査に依頼して行った。

〔遺構・遺物のトレース・版下作成〕

遺構・遺物の実測図やその他の挿図のトレースは、Adobe社製 Creative Suite、（株）CUBIC 製「トレースくん」を用いたデジタルトレースを併用した。実測図版・写真図版等の版下作成は、基本的に Adobe 社製 Creative Suite を用いて行った。遺構内出土遺物のうち、床面（底面）出土遺物や住居跡の炉出土遺物等については、原則として遺構の平面図にそのドットマップ図・形状実測図等を掲載した。

〔遺構の検討・分類・整理〕

各遺構ごとに種類・構造的特徴・出土遺物・他の遺構との新旧関係等に関するデータを整理し、構築時期や同時性・性格等について検討を加えた。

〔遺物の検討・分類・整理〕

遺物を時代・時期・種類ごとに整理し、出土遺物全体の分類・器種構成・個体数等について検討した。

〔調査成果の検討〕

遺構・遺物の検討結果を踏まえて、当遺跡と関連遺跡との比較等を通じて、当遺跡の時期・構造・変遷等について検討・整理した。

第3節 調査の経過

(1) 発掘作業の経過

平成21年度の大畠家ノ上遺跡発掘調査は、調査委託者の要望に応えて、調査対象面積1,700m²を対象として（図1）、4月27日から7月7日までの発掘調査期間で実施することになった。平成19年度に青森県教育庁文化財保護課の確認調査で、縄文時代の遺物が確認されていたため、表土から順次掘り下げて、縄文時代の遺構確認・調査の順に発掘作業を進めることにした。

発掘調査体制は、以下のとおりである。

調査主体	青森県埋蔵文化財調査センター
所長	新岡嗣浩
次長	工藤 大（平成22年3月退職）
調査第一GM	成田滋彦
総務GM	木村繁博
文化財保護主事	岩田安之（発掘担当者）
文化財保護主事	最上法聖（発掘担当者）
調査補助員	工藤敬大 古川紗緒里 工藤あすか 平野華奈

専門的事項に関する指導・助言

調査指導員 村越 潤 国立大学法人 弘前大学名誉教授（考古学）

調査員 藤沼邦彦 前国立大学法人 弘前大学人文学部教授（考古学）

島口 天 青森県立郷土館主任学芸主査（地質学）

発掘作業の経過、業務委託状況等は、以下のとおりである。

〔平成20年度〕

10月3日 青森県教育庁文化財保護課と発掘調査にかかる事前の現地協議を行った。大烟家ノ上遺跡、二枚橋（1）遺跡、涌館遺跡の各調査区域の現状確認と二枚橋（1）遺跡の未買収地箇所の確認を行った。また、調査事務所・駐車場設置箇所候補の土地所有者、幅杭の復元、熊糞の撤去、現場内の廃車撤去について事業者への照会事項を確認した上で、文化財保護課から事業者への照会を依頼した。

3月31日 10月の照会事項が実行されているかどうか現地で確認した。

〔平成21年度〕

4月3日 事業者と現地協議を行う。

4月中旬 調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所や仮設トイレの設置、駐車場の整備等、事前の準備作業を行った。

4月30日 排土置場を確保するため調査区を縦長の半分に区切り、半分ずつ掘削を開始する。縄文時代後期前葉に属する遺物が出土し始める。

5月上旬～ 住居跡、土坑などの遺構が確認され、随時遺構の精査を行う。

6月18日 調査員島口天氏に現地指導をしていただく。

6月25日 ラジコンヘリによる空中写真撮影を行う。

7月7日 大烟家ノ上遺跡調査終了。二枚橋（1）遺跡へ調査器材などを移設する。

7月8日 二枚橋（1）遺跡調査開始。調査区の西側から掘削を行う。

7月14日 大烟家ノ上遺跡において、むつ市ボランティア養成講座の見学会が行われた。

7月16日 調査員藤沼邦彦氏に現地指導をしていただく。

7月24日 二枚橋（1）遺跡調査区西部580m²を調査終了した。すべての発掘作業を終了し、発掘器材・出土品等を搬出した後、現地から撤収した。

（2）整理・報告書作成作業の経過

平成21年度の大烟家ノ上遺跡発掘調査では、縄文時代の住居跡5軒、土坑11基、ピット60基、焼土

遺構2基、調査集中1ヶ所が確認され、遺物等が31箱（段ボール箱）出土した。報告書刊行事業は平成22年度に実施することになったが、写真類の整理作業等は発掘作業終了後の平成21年11月に終了している。この他の整理・報告書作成作業は平成22年4月1日から平成23年3月30日までの期間で行った。大畠家ノ上遺跡は主に縄文時代の遺跡であり、縄文時代中期末葉～後期前葉の土器・石器が多い点を考慮して、これに応じた整理作業の工程を計画した。報告書の約1/2を縄文時代の遺構・遺物の記載にあてることにした。

整理・報告書作成体制は、発掘調査体制から調査補助員を2名減らし、整理作業員2名を加えたものである。

整理主体 青森県埋蔵文化財調査センター

文化財保護主事 岩田安之（報告書作成担当者）

文化財保護主事 最上法聖（報告書作成担当者）

調査補助員 古川紗緒里 工藤あすか

整理作業員 根川恵 山下真理子

整理・報告書作成作業の経過、業務委託状況等は、以下のとおりである。

〔平成21年度〕

11月下旬 写真類の整理作業と図面類の整理作業の一部を行った。写真類の整理作業は終了した。

12月 炭化物のサンプル等を整理して放射性炭素年代測定を委託した。

12月～3月 遺物の洗浄、注記を行う。

〔平成22年度〕

4月上旬～ 遺物は洗浄・注記が終わった後、順次接合・復元作業を進めた。併せて遺構の検討・整理作業を開始した。

石器類の選別作業を行い、石器の実測作業を開始する。

5月中旬 土器類の接合・復元作業が終了したため、報告書掲載遺物の選別作業を行った。

5月下旬～ 選別した報告書掲載遺物の実測・拓本等の図化作業を進めた。併せて遺物台帳等を作成した。また、遺構実測図や遺構配置図・調査区域図等のトレースを行った。

7月下旬 火山灰の鑑定分析を依頼した。土器に付着した赤色顔料の同定を依頼した。

8月上旬 炭化物のサンプル等を整理して放射性炭素年代測定を委託した。

10月上旬 水洗選別した土壤サンプルから出土した炭化種実（第2号住居跡出土）の同定を依頼した。

11月上旬～ 遺物実測図等のトレースを行った。この間に、シルバーフォト、スタジオエイトに委託して報告書掲載遺物の写真撮影を行い、写真図版を作成した。また、調査成果を総合的に検討して、報告書の原稿作成を開始した。

1月下旬 原稿・版下等が揃ったため、報告書の割付・編集を行い、印刷業者を入れ・選定して入稿した。

3回の校正を経て、報告書を刊行した。

最後に、記録類・出土品を整理して収納した。

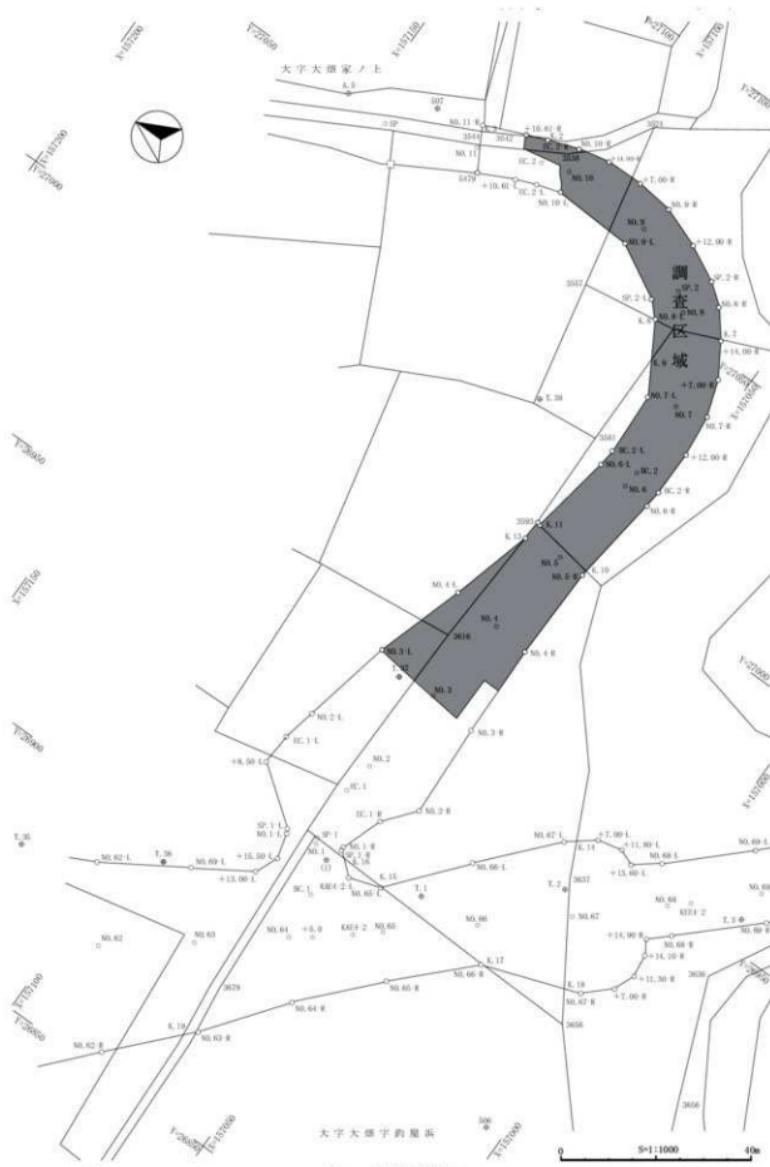


図 1 調査区域図

第2章 遺跡周辺の環境

第1節 周辺の地形・地質

青森県立郷土館 烏 口 天

大畑家ノ上遺跡は、むつ市大畑町の北西に、海岸線に沿って分布する平坦面上に立地し、標高は29～33mである。遺跡の西北西には、燧岳（781.3m）をピークとする比較的小規模な成層火山「むつ燧岳火山」がある。本地域の地形・地質について、梅田（1992）を引用して述べる。また、本地域に分布するむつ燧岳火山の噴出物と段丘面を図2に示した。

むつ燧岳火山は浸食状況が異なる旧期火山体と新期火山体の2つに分けられる。旧期火山体は矢筈山（628.8m）を頂部とし、主に北側斜面を形成する。旧期火山体は著しい浸食を受けており、放射谷が発達している。また、海岸線付近の旧期火山体上には平坦な海成段丘地形が認められる。新期火山体はほとんど浸食を受けず、火砕流堆積物の平坦な台地地形をよく残している。特に燧岳山頂付近から南斜面にかけては佐藤ヶ平と呼ばれる広い台地をつくる。台地の末端部は大畑川による下刻作用により急崖をなす。新期火山体上において海成段丘は認められない。また、燧岳山頂北東側には馬蹄形のカルデラが認められ、大赤川、小赤川の2本の河川によって深く刻まれる。

むつ燧岳火山の北部～南東部の海岸に沿う段丘は、高位のものから順に第Ⅰ、第Ⅱおよび第Ⅲ段丘に大別されている（上村・齊藤、1957）。第Ⅰ段丘は、管ノ尻沢、下風呂および赤川付近の標高50～60mの基盤岩上にわずかに分布しているにすぎない。第Ⅱ段丘は、木野部から海岸に平行に下風呂まで、3kmにわたって断続する標高30～40mの平坦面である。第Ⅲ段丘は大畑から易国間にかけて局所的に分布し、標高20m程度の台地を形成する。これらの段丘は、新戸部（1969）が区分した大間崎付近の3段の段丘と標高がほぼ一致すること、第Ⅲ段丘の上には洞爺火山灰が認められないことから、大間崎のそれとは同時期に形成され、第Ⅰ段丘は12万年前に、第Ⅱ段丘は10万年前に、第Ⅲ段丘は8万年前に形成されたと考えられる。

大畑家ノ上遺跡が立地する場所の周辺には、新期火山噴出物の第1期噴出物に含まれる大畑火砕流堆積物および湯坂火砕流堆積物が分布する。第1期噴出物は珪長質な降下火山灰や火砕流の活動によるもので、南東部および東部に分布する。発泡のよい本質岩片と同質の火山灰によって構成される。また、第1期活動にともなって旧期山体南東側の崩壊が生じたと考えられる。

大畑火砕流堆積物は淡黄色～灰色で発泡のよい軽石と細粒の火山灰および大量の石質岩片によって構成される。軽石は径2～40cmで全体的に丸みを帯びている。しかし、大型の石質岩片のブロックの周囲に散在する軽石は扁平しているものが多く認められる。石質岩片は溶岩および降下火砕岩のブロックで、まれに径7mほどの大型のものも存在する。軽石の岩質はディサイト、石質岩片の岩質は安山岩である。大畑火砕流堆積物は、海岸付近において第Ⅲ段丘の堆積物を覆っている。

湯坂火砕流堆積物は灰色の火山灰中に径5～10cmの発泡のよい軽石が散在する。軽石の岩質はディサイトである。最下部には層厚20cm程度の細粒火山灰層が認められ、上位に漸移することから本火砕流の基底層であると考えられる。下位の大畑火砕流堆積物を覆う。

上述の内容を総合すると、大畑家ノ上遺跡が立地する平坦面は、むつ燧岳火山の旧期火山体の上に

形成された海成段丘面を、新期火山噴出物が覆ってできたと解釈できる。その場合、海成段丘面が新期火山噴出物に覆われていることで段丘面が判別しにくくなっていることや、旧汀線がわかりにくくなっていることが考えられる。

第2節 遺跡内の地質

調査区では、基本層序を調べるために2箇所にトレーナーを設けた。トレーナーで調査した地層を、色や締まり具合、含有物等で上位から順にI～V層に区分した（図3）。

I層：主に黒色土からなる表土であるが、下位層の盛土も含まれる。

II層：上位のI層と下位のIII層が混じる漸移層で、縄文時代の遺物を含む。

III層：径0.2～0.5cmの軽石を含み、粘性が高いローム層。

IV層：径25cm以下の角礫を含む火碎流堆積物。礫は灰色や緑灰色、赤紫灰色、赤褐色など様々な色を呈するが、すべて安山岩である。また、長径1.5mを超える溶結凝灰岩の巨礫も含まれる。

V層：礫や軽石などを含まない砂質ローム層。

IV層は、安山岩の角礫を多く含み、溶結凝灰岩の巨礫も含むことから大煙火碎流堆積物に対比できると考えられる。ただし、層厚が30～50cmと薄いことや、軽石をほとんど含まない粘性の高い基質であることから、火碎流末端部または再堆積部であることが考えられる。IV層を大煙火碎流堆積物と考える場合、III層は湯坂火碎流堆積物と考えられる。III層も層厚がIV層と同じくらい薄く、含まれる軽石も小さく少ないことから火碎流末端部または再堆積部であることが考えられる。V層は、層厚や下位層まで確認できていないが、均質な砂質ローム層であることから段丘構成層からローム層への漸移部に相当する可能性が高い。

これらのことから、本遺跡が立地する平坦面を覆う新期火山第1期噴出物は薄いため、地表の標高をそのまま海成段丘面の標高と考えてよいと思われる。よって、この平坦面を標高30m前後の海成段丘面と考え、標高からは木野部から下風呂まで続く第II段丘に相当する可能性もある。第II段丘の形成年代は10万年前で、第III段丘となると8万年前だが、小池・町田（2001）はこの地域の段丘を酸素同位体ステージ5e（12万年前）の形成としている。酸素同位体ステージ5e（12万年前）とする根拠は段丘構成層の上に洞爺火山灰をのせることだが、本遺跡内のトレーナーではその層準まで掘り下げていなかったため洞爺火山灰の有無を確認できておらず、段丘面の形成年代は明らかにできない。

引用文献

- 小池一之・町田洋（2001）1／5万段丘分布図「大煙」、日本の海成段丘アトラス 日本Ⅰ〔北海道・東北〕、東京大学出版会、CD-ROM.
- 新戸部芳（1968）大間崎付近の海岸段丘、東北地理、21、p.23-29.
- 上村不二雄・齊藤正次（1957）5万分の1地質図幅説明書「大煙」、地質調査所、pp.31.
- 梅田浩司（1992）下北半島、むつ燧岳火山の地質と岩石記載、岩鉱、87、p.420-429.

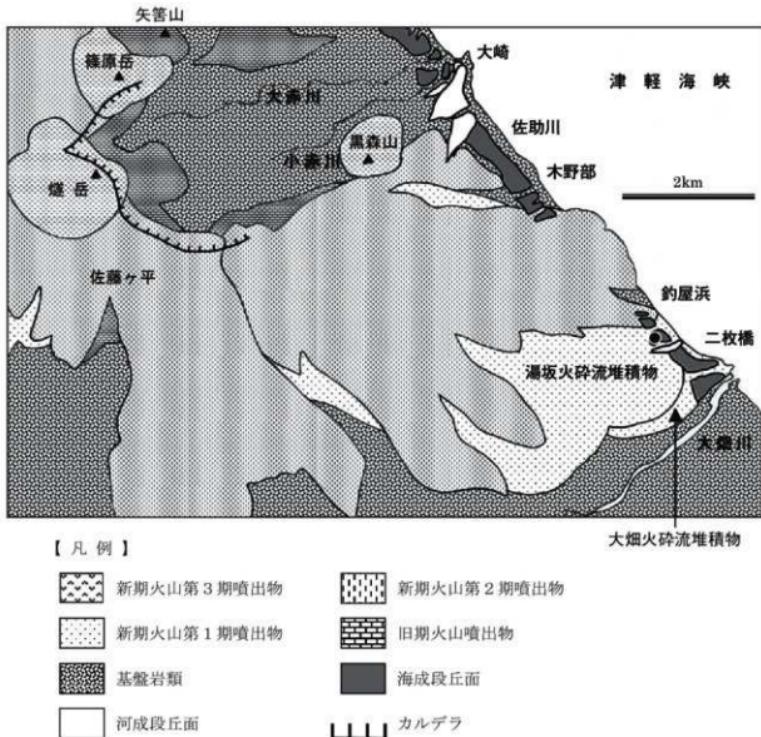


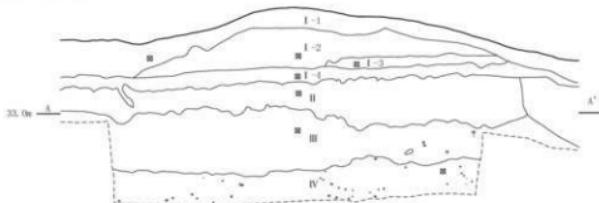
図2 むつ様岳火山噴出物の分布と段丘面の分布 (●: 大畑家ノ上遺跡)

[梅田（1992）および小池・町田（2001）を元に作成]

※ 梅田（1992）の原図では、鈎屋浜と大畠川の間に新期火山噴出物が分布するため、それに覆われている海成段丘面は描かれていない。しかし、大畠家ノ上遺跡が立地する平坦面は地形図上でも認識でき、同遺跡での新期火山噴出物の層厚は1mに満たなかったことから、この図では小池・町田（2001）に示されている海成段丘面を元に平坦面を海成段丘面として表現した。その結果、新期火山噴出物上に海成段丘面が形成されているように見える矛盾が生じていることを断つておく。

調査区西部基本層序

■ 土壌サンプル採取位置

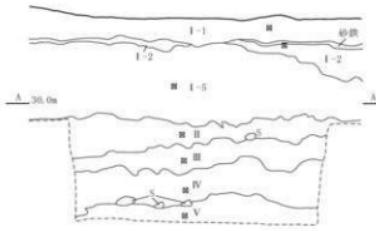


調査区西部基本層序

- I-1層 黒褐色土(10VR2/3)、褐色土(10VR1/6) φ2~5mm25%、炭化物粒φ1~2mm25%
 I-2層 褐色砂質土(7.SYR4/6) 線毛オーリーブ褐色(2.BY3/3)と黄褐色(10VR5/6)の混合砂20%(しまり無)、暗褐色砂(7.SYR3/4)7mm(しまり無)φ1mm以下の炭化物粒が7%混入。
 明褐色土(7.SYR6/8)7%、炭化物粒φ1mm以下5% →ローム主体の盛土(砂粒混入)
 I-3層 明褐色土上(7.SYR6/8) 黄褐色土(10VR3/2)7%、炭化物粒φ1mm以下25%、暗褐色土(10VR2/2)1%、φ5~10mmの浮石混入 →ローム主体の盛土(砂粒未混入)
 I-4層 明褐色土上(7.SYR6/8) 黄褐色土(10VR3/2)7%、炭化物粒φ1mm以下10%、明褐色土上(7.SYR6/8)1%、炭化物粒φ1~2mm35%、褐色粘土上(7.SYR4/6)25%
 明褐色粘土上(7.SYR6/8) 黄褐色粘土上(10VR3/4)1%、暗褐色粘土上(10VR2/3)1%、炭化物粒φ1mm以下1% →鰐文包含
 明褐色粘土上(7.SYR6/8) 浮石φ2~5mm25%、炭化物粒φ2~5mm1%、赤褐色土(2.BYR4/8)φ1mm以下1% →地山口 →ム
 II層 明褐色土上(7.SYR5/8) 黄褐色粘土上(10VR5/6)1%、明褐色粘土上(10VR5/6)2%、炭化物粒φ1mm以下1%、φ10~30mmの石がまばらに混入 →鰐流じりローム
 IV層 明褐色粘土上(7.SYR5/8) 黄褐色粘土上(10VR5/6)1%、明褐色粘土上(10VR5/6)2%、炭化物粒φ1mm以下1%、φ10~30mmの石がまばらに混入 →鰐流じりローム

調査区北部基本層序

■ 土壌サンプル採取位置



調査区北部基本層序

- I-1層 黒褐色土上(10VR3/2)、褐色ローム(10VR4/6)φ1~8mm25%、土かなりもろく木や草の根が多い
 I-2層 黃褐色(10VR1/6) 砂質(7SYR2/3)層上部に混入、黒褐色土(10VR3/2)10%、白色浮石φ1~2mm25%、炭化物粒φ1~5mm25%
 I-3層 黑褐色土上(10VR2/3) 黃褐色ローム(10VR1/6)20%まだらに混入、炭化物粒φ1~5mm25%
 →層上部と下部付近に青灰色がかった薄緑色に鉄分を含む土層が重複することから海辺性の自然堆積層と考えられる
 II層 黄褐色ローム(10VR1/6)と黒褐色土(10VR3/2)の底付土 黑褐色土(10VR2/3)7%、炭化物粒φ1~2mm25%、白浮石φ1~2mm25%
 III層 黄褐色ローム(10VR1/6) 黑褐色土(10VR2/3)1%、炭化物粒φ1~2mm1%
 IV層 黄褐色ローム(10VR1/6) 小角礫φ10~30mm、角礫φ100~250mm層全体に混入、炭化物(φ1~10mm)1%
 V層 黄褐色ローム(10VR5/8) 炭化物φ1mm以下1%以下 →鰐や赤色の土層がほとんど混じらない砂質に近いローム

0 S=1:60 2m

図3 基本層序

第3節 周辺の遺跡（図4）

むつ市大畠地区には、現在181ヶ所の遺跡が確認され、青森県遺跡地図に登録されている。本節では、大畠家ノ上遺跡周辺の遺跡について概観してみたい。

縄文時代の遺跡は、早期から晩期まで確認されている。水木沢遺跡は青森県教育委員会によって昭和51年に調査が行われ、主な成果として縄文時代後期後葉に属する堅穴住居跡の形態的特徴や集落の配置パターンが把握されている。大畠家ノ上遺跡が後期前葉の集落跡であることから、住居跡や集落跡の時期的変遷を考察するうえで重要である。涌館遺跡は、古く江戸時代からその存在が知られている遺跡である。昭和51年には旧大畠町教育委員会によって試掘調査が行われており、縄文時代前期末葉～中期初頭、晩期前半の遺物が多く出土している。昭和54年の調査では石器をつくるための工房跡とされる遺構が発見されている。平成19年には青森県教育文化財保護課によって確認調査が行われており、縄文時代前期後半の土器が多量に発見されている。平成22年には青森県教育文化財保護課によって発掘調査が行われている。二枚橋（2）遺跡は、平成9年に旧大畠町教育委員会によって調査が行われ、縄文時代中期の堅穴住居跡3軒、晩期の集石遺構・土坑・埋設土器遺構などが発見されている。遺物は縄文時代早期、中期、後期、晩期の土器のほか、縄文時代晩期の土偶、土版、岩版、土製仮面、石刀などの祭祀に関連が深いと推測される遺物も多数出土している。集石遺構が東西軸上に2ヶ所位置する状況や上記の遺物の存在から、縄文時代晩期における祭祀の具体的な様相を知る上で非常に重要な遺跡であると思われる。

弥生時代の遺跡でも、上記の二枚橋（2）遺跡が著名である。東北大大学考古学研究室によって昭和41年に調査されている。弥生時代前期後葉に位置づけられる「二枚橋式」と命名された土器が出土し、変形工字文、波状工字文、波状文と呼ばれる文様を施した壺、鉢、壺類に特徴づけられる。他には土偶、石偶などが見つかっている。

中世では、上述した縄文時代の遺跡である涌館遺跡の東端部が涌館（涌館遺跡の場合と館の表記が異なる）という中世城館跡として確認されている。舌状台地の先端部に郭がつくられており、縄文土器に混じって土師器が出土している。北側は津軽海峡、南東は大畠川に面しており天然の要害である。俗称「蝦夷館の跡」ともいわれている。

近世では大安寺遺跡があり、大安寺所有の急傾斜地から発見された経塚がある。経石を中心に觀音石像や寛永通宝、陶磁器などが出土している。
（岩田・最上）

文献

青森県教育委員会1976「水木沢遺跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財調査報告書第34集

青森県教育委員会1983「青森県の中世城館」青森県文化財調査報告書

青森県教育委員会2009「青森県遺跡地図」

大畠町教育委員会1977「涌館遺跡試掘調査報告書」大畠町埋蔵文化財調査報告第1集

大畠町教育委員会1994「大安寺遺跡（経塚）発掘調査報告書」大畠町文化財調査報告書第7集

大畠町教育委員会1996「大畠町の文化財マップ」大畠町文化財調査報告書第10集

大畠町教育委員会2001「二枚橋（2）遺跡発掘調査報告書」大畠町文化財報告書第12集

藤沼邦彦・萩坂幸忠2004「青森県大畠町二枚橋（2）遺跡」「亀ヶ岡文化遺物実測図集」弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告1:3-117

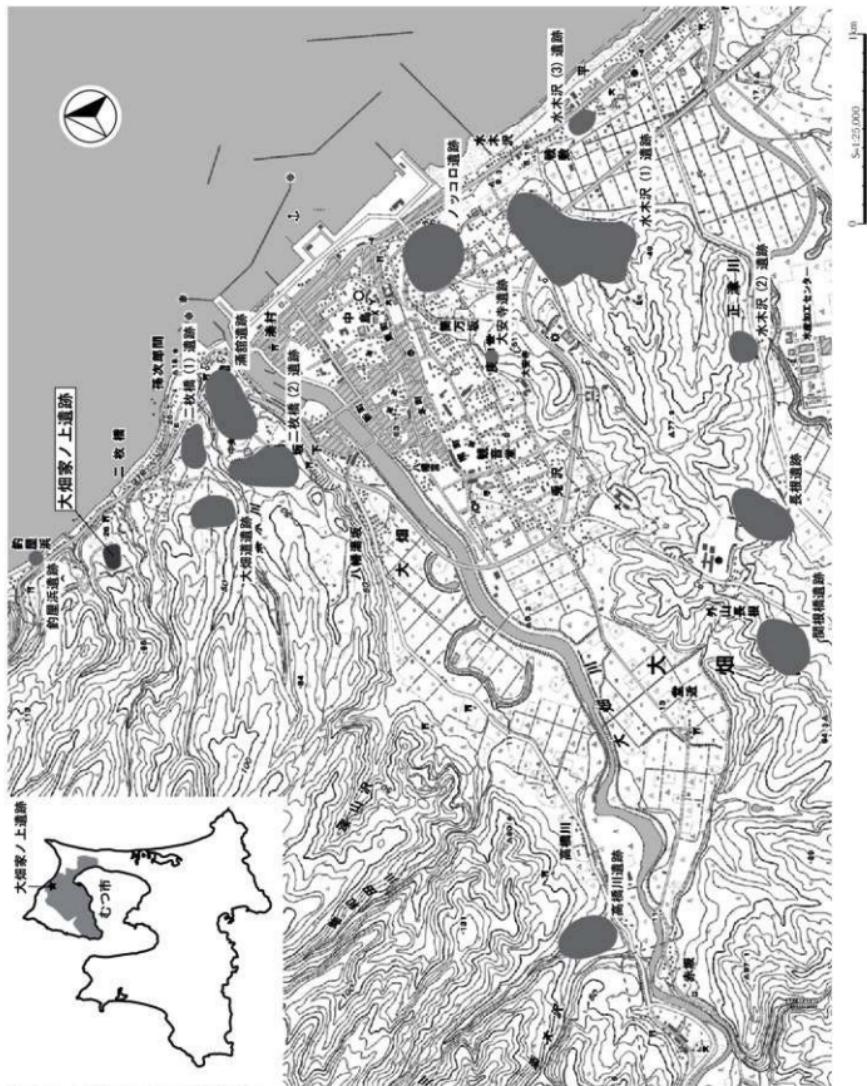


図4 周辺の遺跡 (S=1/25,000)

第3章 調査結果

第1節 繩文時代の遺構と出土遺物（図5）

平成21年度の大畑家ノ上遺跡の調査では、縄文時代中期末葉～後期前葉に属すると推測される遺構と遺物が確認された。住居跡5軒、土坑11基、ピット60基、焼土遺構2基、剥片集中1ヶ所が発見された。

1. 住居跡

第1号住居跡（SI-01）（図6～8・表1）

【位置・確認】D-12,13,E-12グリッドに位置する。第II層上面で確認された。遺構上部は堆積土が攢乱を受けていたため、近代以降の削平によって壊されていたと推測される。

【形態・規模】長径510cm、短径498cmの三角形状の不整円形を呈する。確認面からの深さは20cmである。

【新旧関係】なし。

【壁・床面】壁は近代以降に行われた削平のためか、その立ち上がりは浅くはっきりしない部分があつた。住居跡内の中心部北寄りに硬化面が楕円形状に確認され、その規模は長径320cm、短径250cmである。硬化した箇所の土は褐色ローム類似土に炭化物粒が混在する状態であった。硬化面上には、縄文時代後期前葉に属する単軸絡条体5類格子目文をモチーフにするほぼ完形の土器深鉢（図7-2、P-3）や石器が、北側寄りにやや集中して発見された。

【堆積土】8層に分層した。遺構内に堆積した土が非常に分かりにくく、現場では土の微妙な違いで分層を行うことしかできなかったため、整理時の検討によって、一部現場でのデータの層位を解釈しやすいように改変した部分がある。

【柱穴・土坑など】柱穴と思われるピットは30基確認されたが、遺構周辺は木の切株が多かったことから、一部木根痕が混在している可能性がある。当初、遺構内堆積土が薄く、住居跡の認定が遅れたためピットは住居跡としてのピットではなく、単独のものとして扱った。よって、ピット番号はSI-01Pit01のようではなく、単にPit43などと通し番号がつけられていた。そのためピット番号がとんだ



第1号住居跡 遺物出土状況

S-4 下から土器埋設遺構が発見された。

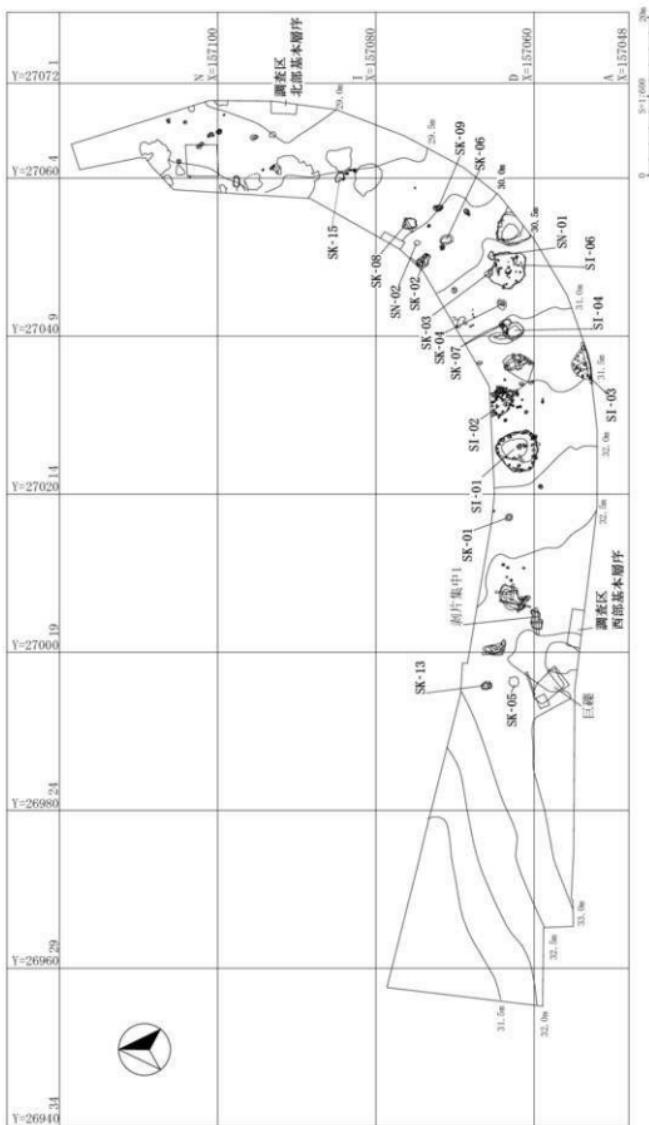


図5 遺構配置図

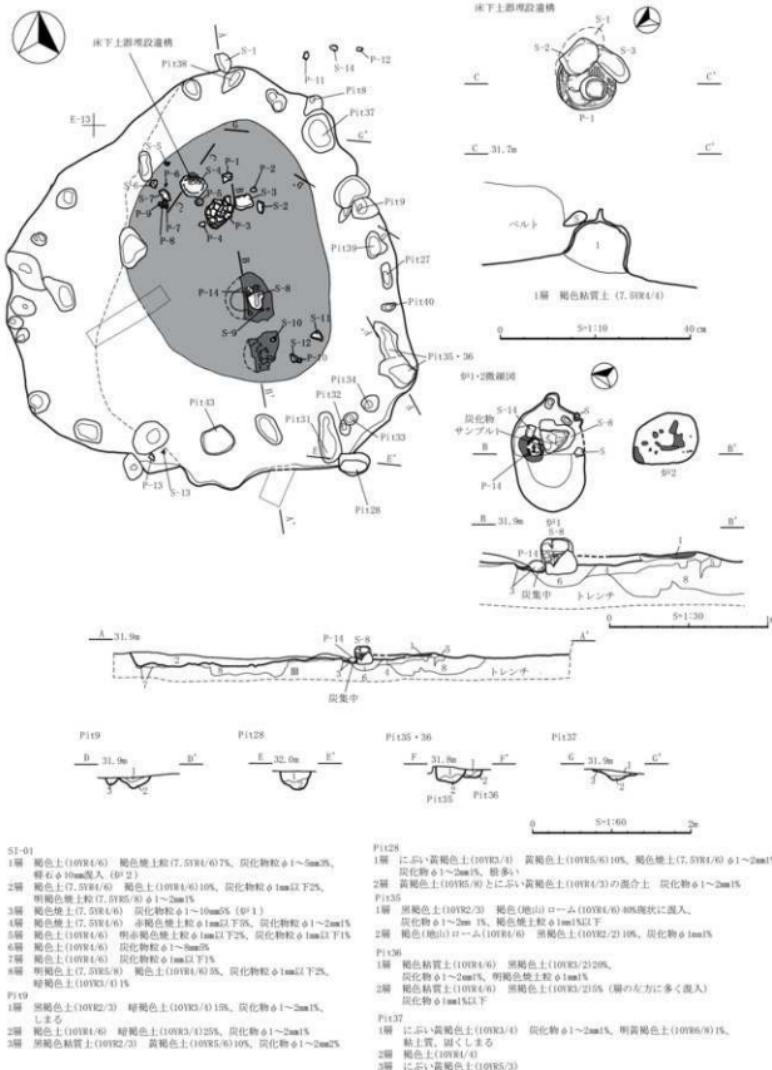


図6 第1号住居跡

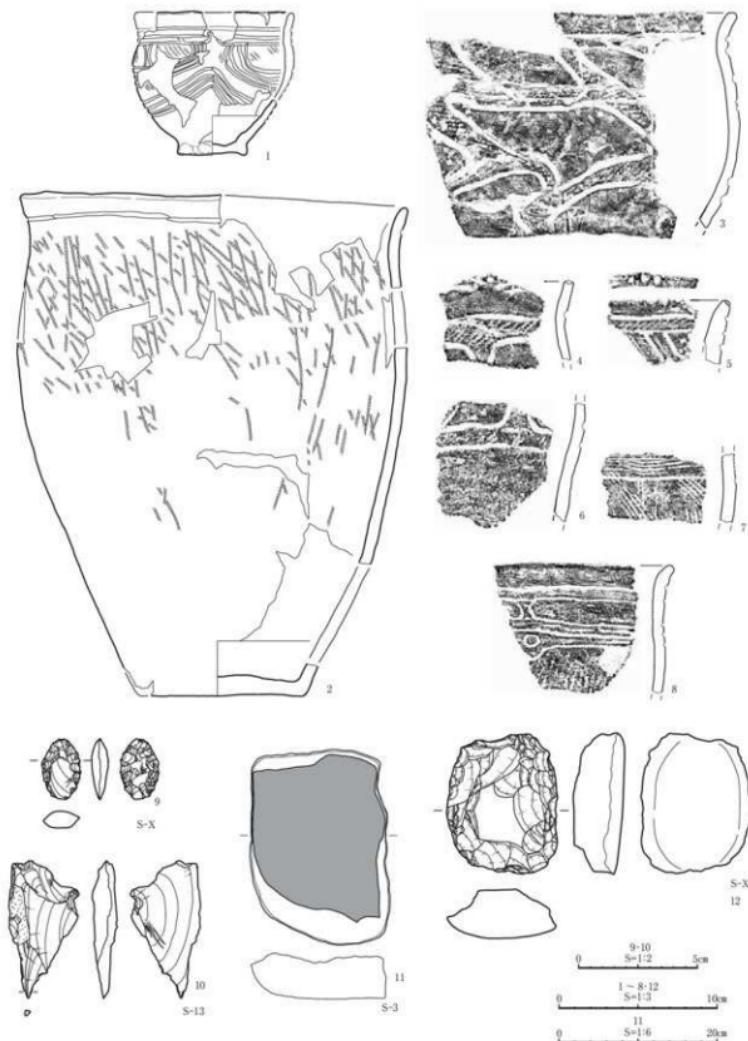


図7 第1号住居跡 出土遺物

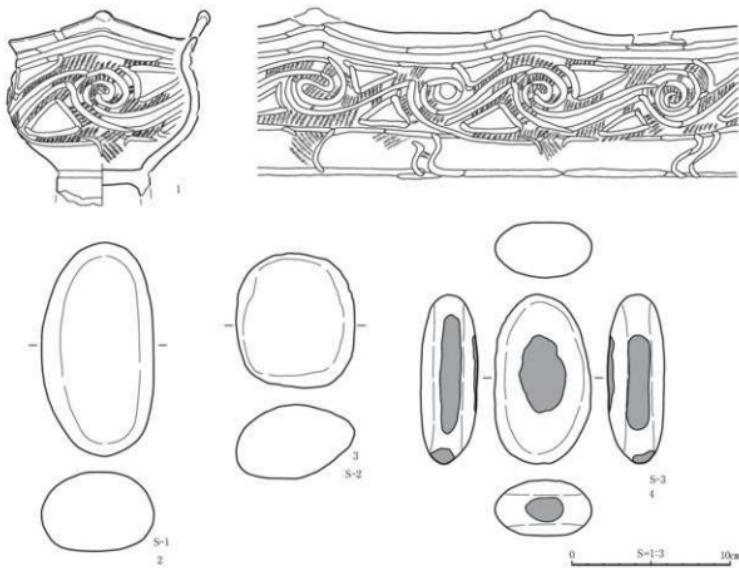


図8 第1号住居跡床下土器埋設遺構 出土遺物

りしている。データを記録したピットは表1に示した。ピットは壁際を巡るように配置されており南東部では長細いピットが対になる出入口遺構状を呈しているため、この部分が出入口であった可能性が考えられる。ピットの床面からの掘り込み部分は浅く、深さ10~20cmである。

【炉】 硬化面南部に2基南北に並んで確認された。北から炉1、2とし、層位的に炉2が炉1より新しい。炉1は立石炉であり、立石の西部分には、焼土や炭化物が多く確認された。同じ場所から焼土

P(1)番号	規格(cm) 長径×短径×深さ	上層注記	中層注記	
			下層注記	底層注記
8	20×18×13	未注記		
9	62×30×14	回6 頂面		
27	34×12×10	1層 黒褐色土(10YR3/2), 褐色土(10YR4/6)1%, 腐化物細粒混在		
28	39×30×20	1層 ぶら-黒褐色土(10YR4/4), 黑褐色土(10YR5/6)1%, 黑色土(7.5YR4/6)φ1~2mm15%, 腐化物φ1~2mm15%, 稼多5% 2層 黑褐色土(10YR5.3/0)とぶら-黒褐色土(10YR4/3)の混合土, 腐化物φ1~2mm15%		
31	61×28×9	1層 黑褐色土(10YR2/3), 褐色土(10YR4/4)1%		
32	(20)×14×(-)	1層 黑褐色土(10YR2/3), 褐色土(10YR4/6)30%		
33	19×15×(-)	1層 黑褐色土(10YR2/3), ぶら-黒褐色土(10YR5/4)1%, 稼あり, 腐化物細粒混在		
34	23×21×9	1層 黑褐色土(10YR2/3), ぶら-黒褐色土(10YR5/4)1%, 稼准在		
35	47×30×21	回6 頂面		
36	(60)×22×12	回6 頂面		
37	50×30×12	回6 頂面		
38	39×29×8	1層 黑褐色土(10YR3/3)と黒褐色土(10YR5/6)の混合土, 褐色土粒(7.5YR4/6)φ1~2mm15%以下		
39	34×26×13	1層 黑褐色土(10YR3/2)と黒褐色土(10YR5/6)の混合土, 腐化物φ1~1mm15%		
40	20×10×9	1層 黑褐色土(10YR5/6), 黑褐色土(10YR3/4)上部に多くもらい, 腐化物φ1mm15%以下		
43	32×34×11	未注記		

表1 第1号住居跡ピット

に埋まるように焼けた土器も確認されている。炉2は地床炉であり、部分的な焼土が集中して確認された。

【付属施設】硬化面北西部下からは、硬化面を掘り下げた後に土器埋設遺構といえるものが確認された。長径30cm、短径25cmの掘り込みに台付鉢が逆位に設置され、鉢の東側には、土器に沿わせるように自然縫と敲磨器が2個置かれており、土器の下にはさらにもう1個の自然縫が置かれた状態が確認された（第5章第3節参照）。

【出土遺物】土器は後期前葉の十腰内I式に属するものが出土している。石器は覆土から石磚、石錐、礫器、台石が出土している。

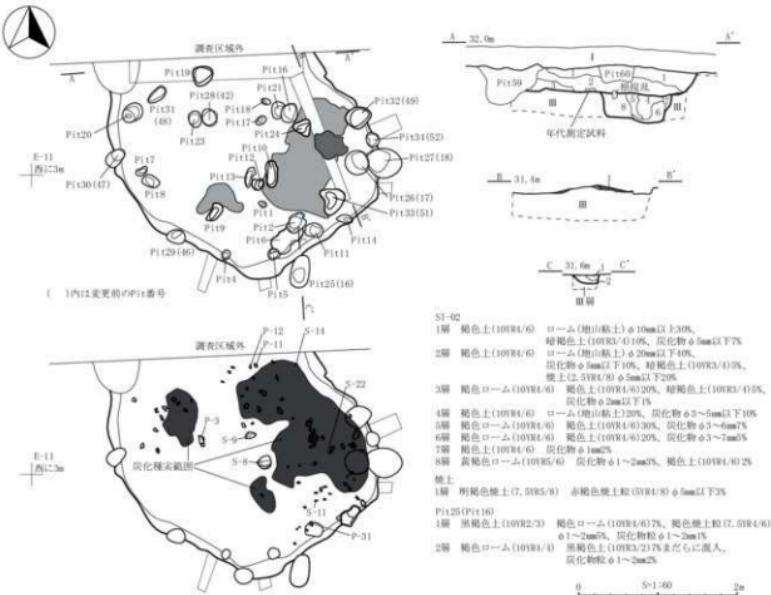


図9 第2号住居跡



図10 第2号住居跡 出土遺物 (1)

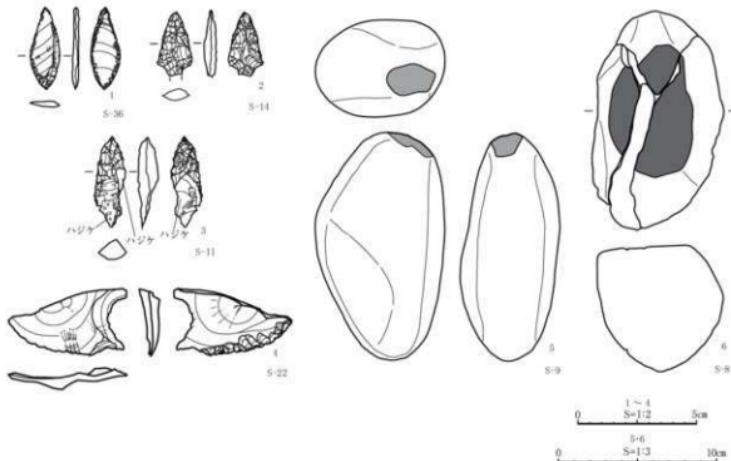


図11 第2号住居跡 出土遺物（2）

Pt番号	規格(cm) 長径×短径×深さ	土層記述	発見前の Pt番号
1	11×7×9	1層 褐色土(10YR 4/6), ローム(地山粘土)φ5mm以下10%, 硬化物φ5mm以下1%	-
2	25×15×21	1層 褐色土(10YR 4/6), 褐色土(10YR 3/4)10%, ローム(地山粘土)10mm以下7%, 硬化物φ3mm以下25, 地上(土褐色土)φ1mm以下1%	-
4	13×10×7	1層 褐色土(10YR 4/6), 褐色土(10YR 3/4)20%, ローム(地山粘土)φ5mm以下10%	-
5	15×13×4	1層 褐色土(10YR 4/6), ロームプロック(地山粘土)φ1mm以下1%	-
6	42×21×6	1層 褐色土(10YR 4/6), ローム(地山粘土)φ5mm以下5%, 硬化物φ1~2mm5%	-
7	16×9×14	1層 褐色土(10YR 4/6), ローム(地山粘土)φ5mm以下10%	-
8	24×15×12	1層 褐色土(10YR 4/6), ローム(地山粘土)5mm以下15%, 黑褐色土(10YR 2/3)3%	-
9	27×14×8	1層 褐色土(10YR 4/6), ローム(地山粘土)φ5mm以下30%, 硬化物φ3mm以下3%	-
10	35×14×11	1層 ローム(地山粘土), 褐色土(10YR 4/6)20%, 硬化物φ3mm以下7%	-
11	23×15×11	1層 ローム(地山粘土), 褐色土(10YR 4/6)15%, 硬化物φ3mm以下2%	-
12	15×12×22	1層 褐色土(10YR 4/6), ローム(地山粘土)φ10mm以下30%, 褐色土(10YR 3/4)5%	-
13	28×9×7	1層 ローム(地山粘土), 硬化物(10YR 6/3)30%, 硬化物φ2mm以下2%	-
14	21×10×14	1層 ローム(地山粘土), 褐色土(10YR 6/3)20%, 始化色土(10YR 3/4)10%, 地上(土褐色土)φ8mm以下1%, 硬化物φ3mm以下1%	-
16	24×20×10	1層 褐色土(10YR 4/6), ローム(地山粘土)20%	-
17	15×11×9	1層 褐色土(10YR 3/4), ローム(地山粘土)φ30mm以下20%, 硬化物φ1mm以下15%	-
18	15×9×17	1層 褐色土(10YR 4/6), ローム(地山粘土)φ10mm以下40%, 硬化物φ1~2mm1%	-
19	27×24×7	1層 ローム(地山粘土), 硬化物(10YR 2/3)15%, 硬化物φ1mm以下2%	-
20	28×23×8	1層 ローム(地山粘土), 褐色土(10YR 6/3)10%, 反化物φ1~2mm2, 7%	-
21	23×13×19	1層 褐色土(10YR 3/4), ローム(地山粘土)φ30mm以下20%, 硬化物φ3mm以下7.5%	-
25	21×15×7	2層 褐色土(10YR 4/6), ローム(地山粘土)φ20mm以下20%, 始化色土(10YR 3/4)15%	-
24	22×21×13	東北記述	-
25	42×21×12	2層 黒褐色土(10YR 2/2), 褐色土(10YR 6/3), 褐色土粒φ7, 5mmφ6/φ1~2mm5%, 硬化物粒φ1~2mm5%	16
26	30×20×19	1層 黑褐色土(10YR 2/2), 黄褐色土(10YR 5/8)20%, 明褐色地上粒φ7, 5mmφ5/φ1~2mm5%	17
27	(12)×33×20	1層 黑褐色土(10YR 2/2)と黄褐色土(10YR 5/8)の混合土, 明褐色地上粒φ7, 5mmφ5/φ1~2mm5%, 硬化物φ1~2mm1%	18
28	22×18×10	1層 黄褐色土(10YR 4/2)と黄褐色土(10YR 5/6)の混合土, 硬化物φ1mm以下	42
29	24×18×15	1層 黑褐色土(10YR 2/2), 褐色土(10YR 6/3), 硬化物φ1~2mm5%	46
30	27×18×7	1層 褐色土(10YR 4/6), 硬化物φ1~2mm5%	47
31	27×11×17	1層 褐色土(10YR 4/6), 黄褐色土φ1~2mm(10YR 5/8)φ1~15mm5%, 硬化物φ1~8mm5%	48
32	30×20×11	1層 褐色土(10YR 4/6), 褐色土粒φ7, 5mmφ5/φ1~2mm5%, 硬化物φ1~8mm5%	49
33	31×23×23	1層 褐色土(10YR 3/3), 褐色土(10YR 6/1)5%まざりに混入, 褐色土粒φ7, 5mmφ4/φ1~3mm, 硬化物φ3mm5%, 上部φ1~石頭土	51
34	18×15×23	1層 褐色土(10YR 4/6), 黑褐色土(10YR 2/3)10%, 硬化物φ1~2mm5%以下, 土源岸出土	52

表2 第2号住居跡ピット

【小結】放射性炭素年代測定を、炉1、2の焼土中の炭化物と土器埋設遺構の覆土内から出土した炭化物で行った結果、炉1が $3,620 \pm 20$ 年BP、炉2が $3,620 \pm 20$ 年BP、土器埋設遺構が $3,660 \pm 20$ 年BPとなり、炉よりも土器埋設遺構のほうが古い年代値を示しており、層位的事実と整合性のある結果となった（第4章1節参照）。出土土器の年代観とも矛盾なく、住居跡の機能していた年代は縄文時代後期前葉と推定できる。

（岩田）

第2号住居跡（SI-02）（図9～11・表2）

【位置・確認】D-10.11,E-10.11グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で確認された。

【形態・規模】遺構の北側の一部は調査区域外に範囲が広がっており、全容は不明であるが、長径（370）cm、短径28cmの不整椭円形を呈する。確認面からの深さは40cmである。

【新旧関係】調査区壁際でPit59、Pit60と重複しており、本住居跡が古い。

【壁・床面】壁は多少上方に開きながら垂直に近い状態で立ち上がる。床面は黄褐色ロームに小さな炭化物粒が少量混じっており、南東壁寄りの一部が硬化している。硬化面は長径150cm、短径72cmの不整椭円形状の範囲と長径60cm、短径30cmの不整形形状の範囲の2ヶ所が確認されている。

【堆積土】8層に分層した。2層、3層中には炭化種実が混在している。炭化種実は住居跡の東側と北西側の一部から検出されており、同層中の遺物の出土範囲と概ね重なっている。4～8層は柱穴内の堆積土である。

【柱穴・土坑など】柱穴と思われるビットは32基確認された。遺構周辺は木の切株が多かったことから、一部木根痕が混在している可能性がある。ビットは壁際を中心に配置されているようである。

【炉】南東壁寄りに地床炉と思われる焼土が確認されている。掘り込みは不明瞭で、焼土は薄く被熱の度合いが弱い。

【出土遺物】土器は覆土から後期前葉の十腰内I式に属するものが出土している。石器は、床面から不定形石器、覆土から石鏃、敲磨器類が出土している。

【小結】覆土中から採取した炭化種実を分析した結果、クリの同定結果が得られている（第4章3節参照）。また、放射性炭素年代測定では、覆土中の炭化物を計測した結果、 $3,620 \pm 20$ 年BPの年代値が得られている（第4章1節参照）。出土土器、年代測定結果から、住居跡は縄文時代後期前葉に近い時期に機能していたと推測される。

（最上）

第3号住居跡（SI-03）（図12・13）

【位置・確認】B-9.10グリッドに位置する。第Ⅱb層上面で確認された。

【形態・規模】長径（330）cm、短径（240）cmの規模であり、調査区域外に遺構の範囲が広がっているため、全容は不明である。確認面からの深さは10cmである。

【新旧関係】なし。

【壁・床面】壁は立ち上がりが小さく、住居跡は皿状を呈する。確認面からの深さは10cmである。床面はⅢ層より汚れており、多少硬くなっていた程度である。

【堆積土】3層に分層した。

【柱穴・土坑など】柱穴と推測されるビットは壁際に配置されている。



SI-03
1層 鮎色土(10YR4/6) 磷鉄色粘質土(10YR1/4)35、炭化物粒φ1mm以下25
2層 鮎色粘質土(10YR4/6) 磷鉄色粘質土(10YR3/4)25、炭化物粒φ1mm以下1% (硬化層)
3層 鮎色粘質土(10YR4/0) 炭化物粒φ1mm以下1%

図12 第3号住居跡

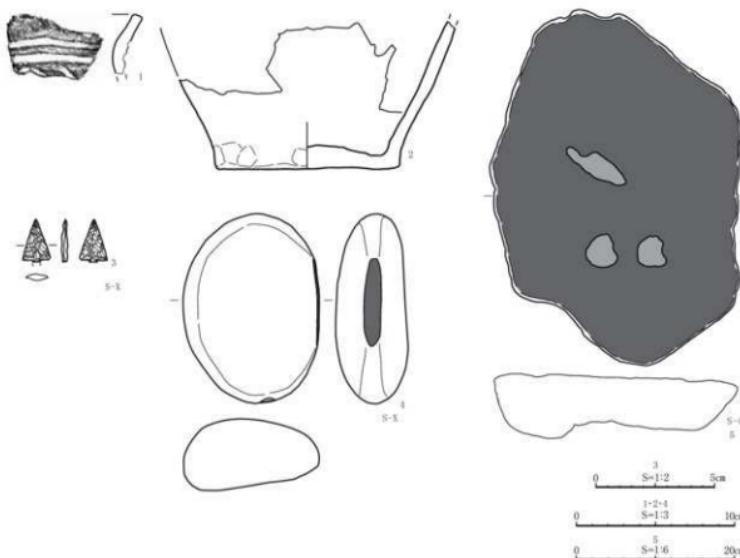


図13 第3号住居跡 出土遺物

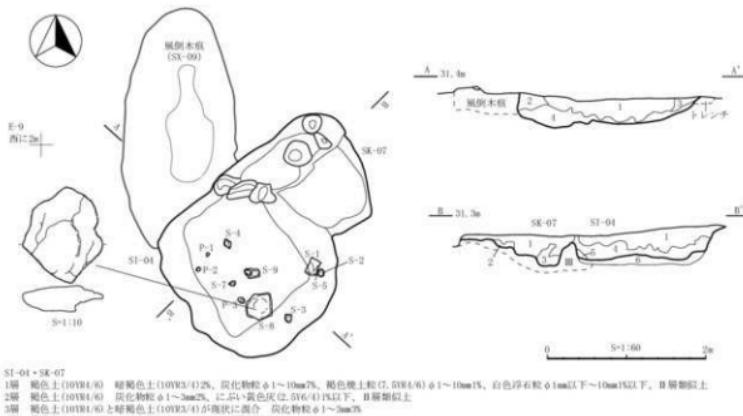


図14 第4号住居跡



図15 第4号住居跡 出土遺物

【炉】 2個の平たい川原石を対に向かい合わせて配置する構造の炉である。石に挟まれた間に焼土が広がり、焼土側（内側）の石の表面も被熱している部分が確認された。

【出土遺物】 土器は覆土から後期前葉の十腰内I式に属すると思われる深鉢形土器の口縁部片と、無文の底部資料が出土している。石器は、土器内（図13-2）の堆積土中から石鏃が出土している（図13-3）。メノウ製の有茎石鏃で茎部は折れている。基部から茎部にはアスファルトが付着している。覆土から敲磨器類（スリ）、石皿・台石類が出土している。

【小結】 放射性炭素年代測定では、床面に混在していた炭化物を計測した結果、 $2,380 \pm 20$ 年BPの年代値が得られており、繩文時代晩期末～弥生時代に移行する時期の年代である（第4章第1節参照）。しかし、床面の炭化物が住居跡の機能年代を直接示すわけではない。

(岩田)

第4号住居跡（SI-04）（図14・15）

【位置・確認】D-8.9グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で確認された。

【形態・規模】長径245cm、短径200cmの不整方形を呈している。確認面からの深さは45cmである。

【新旧関係】第7号土坑と重複し、層位的に第7号土坑が新しいが、同時期に埋没した可能性も高い。

【壁・床面】壁は緩やかに立ち上がる部分と垂直に近い状態で立ち上がる部分がある。床面は第Ⅲ層類似土の黄褐色ロームで1mm以下の小さな炭化物が少量混じっている。

【堆積土】6層に分層した。

【柱穴・土坑など】柱穴と推測されるピットは確認されなかった。

【か】発見されなかった。

【付属施設】北東辺に第7号土坑（SK-07）とした張出部分が確認されている。住居跡に伴うものであるかは層位的には判然としなかったが、軸方向が同じであるため第4号住居跡に伴う可能性が高い。北東-南西沿いにはピットのようなくぼみが6ヶ所程度確認されている。ピットのある部分は出入口として使用されていた可能性がある。



第4号住居跡 遺物出土状況

床面に大きな川原石が出土している

【出土遺物】土器は覆土から小型深鉢が出土している。縄文時代後期前葉に位置づけられる。石器は床面から平たい大きな川原石が確認されており、台石のようであるが、使用痕は確認されていない。図14にS=1:10の実測図を掲載した。

【小結】覆土から出土した小型深鉢は十腰内I式に相当し、縄文時代後期前葉に位置づけられる。よって住居跡の機能年代は不明であるが、縄文時代後期前葉時には埋没過程にあったものと推測される。

(岩田)

第5号住居跡

欠番。

第6号住居跡（SI-06）（図16～18）

【位置・確認】D-6.7,E-6.7グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で確認された。

【形態・規模】長径510cm、短径480cmの不整五角形を呈している。確認面からの深さは12cmである。

【新旧関係】第3号土坑（SK-03）と重複しているが、新旧関係は不明である。

【壁・床面】壁は緩やかに立ち上がり、全体は皿状を呈する。床面は第Ⅲ層類似土の明褐色ロームで

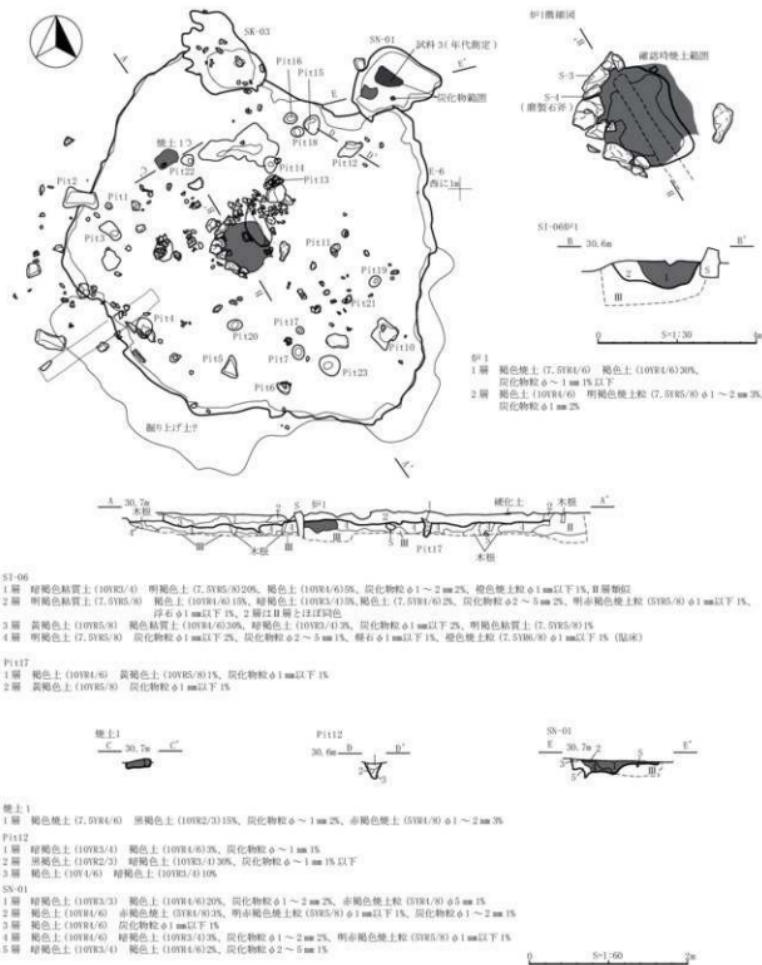


図16 第6号住居跡

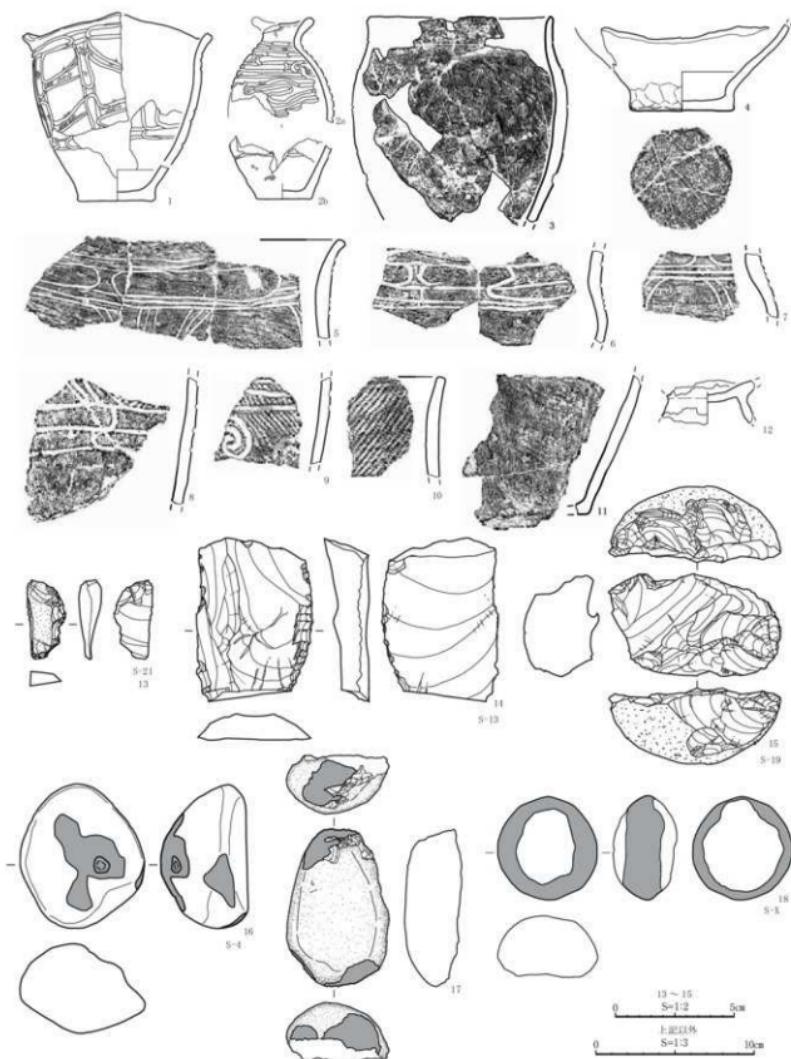


図17 第6号住居跡 出土遺物（1）

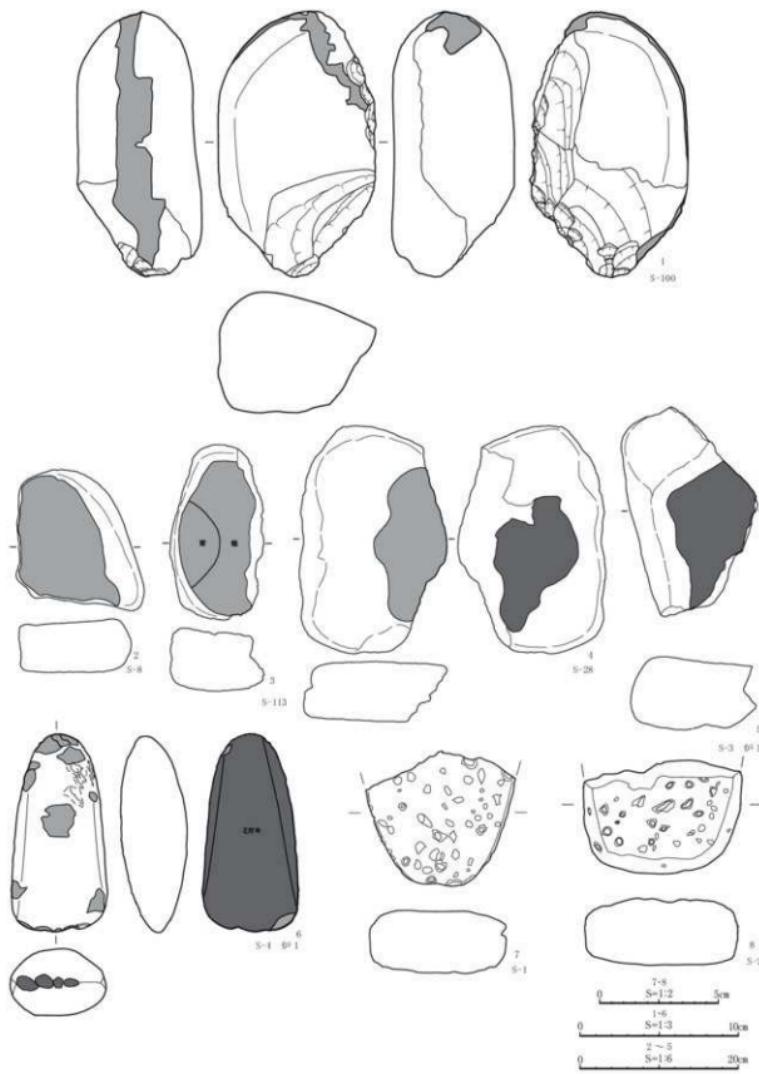


図18 第6号住居跡 出土遺物（2）

汚れており、小さな炭化物や焼土粒が少量混じっていた。

【堆積土】4層に分層した。

【柱穴・土坑など】柱穴と推測されるピットは壁際を中心に配されているようである。

【炉】住居跡ほぼ中央に石圓炉が確認された。石で囲われている部分は西側半分のみであった。焼土は石で囲われた内部に66×58cmの範囲で確認され、石圓炉北東部には小礫、中礫が集中して発見された。また炉東側では、長さ60cm程度の大きな礫が炉に被さるように発見された。層位的に炉より上から出土したため、直接炉に伴うものであるかどうかは不明である。



第6号住居跡 炉

炉石部分に磨製石斧がみられる



第6号住居跡 遺物出土状況

手前に赤色顔料が付着していた壺形土器が
出土している

【出土遺物】土器は、床面から十腰内Ⅰ式に属する小型の壺形土器（図17-2）、覆土から縄文時代後期初頭から前葉に位置づけられる土器が出土している。図17-2には赤色顔料が付着しており、分析の結果、パイプ状ベンガラの同定結果が得られている（第4章第4節参照）。石器は、覆土から石核や不定形石器、敲磨器（タタキ・クボミ）、石皿・台石類が出土している。石圓炉に使用されたものには石皿・台石類があり、また磨製石斧の被熱状態のものは、石圓炉の炉石とともに出土している（図18-6）。この磨製石斧は敲石としても使用されている。

【小結】出土土器から縄文時代後期前葉に近い時期に住居跡は機能していたと推測される。 （岩田）

2. 土坑

第1号土坑（SK-01）（図19・21）

【位置・確認】D-14グリッドに位置する。

【重複】なし。

【形態・規模】 $100 \times 85\text{cm}$ の不整円形を呈する。確認面からの深さは18cmである。

【堆積土】断面観察のためのベルトを残さず完掘してしまったため、堆積土の状態は不明である。

【壁・底面】壁は多少上方に開きながら垂直に立ち上がり、底面はおおむね平坦である。

【出土遺物】土器は覆土から縄文時代後期前葉の十腰内I式に属するとと思われる無文の口縁部片が出土している。石器は石刃のような縦長剥片が出土している。また使用痕はないが、底面から約20cm大的礫が出土した。
(岩田)

第2号土坑（SK-02）（図19）

【位置・確認】G-6グリッドに位置する。

【重複】なし。

【形態・規模】調査区域外に造構の範囲が広がっているため、全容は不明である。確認できた造構の規模は $208 \times 132\text{cm}$ で、平面形は不整梢円形を呈するものと思われる。確認面からの深さは48cmである。

【堆積土】6層に分層した。1～4層は褐色土が主体、5層、6層は暗褐色土が主体である。2層中には灰白色の火山灰がブロック状に混入する。

【壁・底面】底面は凹凸が激しく、壁の立ち上がりは一様ではない。

【出土遺物】図示していないが、覆土から縄文時代後期前葉の十腰内I式に属する土器小破片が出土している。

【小結】底面に小穴が多く観察される状況から木根痕の可能性が高い。
(最上)

第3号土坑（SK-03）（図16・21）

【位置・確認】E-6.7グリッドに位置する。

【重複】第6号住居跡（SI-06）と重複しているが、新旧関係は不明である。

【形態・規模】 $132 \times 78\text{cm}$ の不整梢円形を呈する。確認面からの深さは91cmである。

【堆積土】土層断面の観察用のベルトを残さず完掘してしまったため、堆積土の状況は不明である。

【壁・底面】底面は凹凸が激しく、壁の立ち上がりは一様ではない。

【出土遺物】土器は覆土から縄文時代後期前葉の小破片が出土している。石器は覆土から石鏃、敲磨器類（スリ・タタキ）が出土している。

【小結】底面に小穴が多く観察される状況から木根痕の可能性が高い。
(最上)

第4号土坑（SK-04）（図19・21）

【位置・確認】D-7.8-E-7.8グリッドに位置する。

【重複】なし。

【形態・規模】 $144 \times 104\text{cm}$ の不整円形を呈する。確認面からの深さは50cmである。

【堆積土】6層に分層した。

【壁・底面】壁は上方に開きながら立ち上がり、底面は凹凸が激しい。

【出土遺物】覆土から縄文時代後期前葉の十腰内I式に属する土器片が出土している。石器は石鏃と磨製石斧が出土している。磨製石斧は小型のもので緑色凝灰岩製であり、表面はきめが細かく滑らかである。刃部には細かな欠けが観察できるため使用された可能性が高い。

【小結】出土遺物のうち、特に石鏃、小型磨製石斧が出土していることから、墓坑の可能性もある。

(最上)

第5号土坑（SK-05）（図19-21）

【位置・確認】D-19.20グリッドに位置する。第Ⅲ層で確認された。

【重複】なし。

【形態・規模】開口部が128×124cm、底面が160×154cmの不整円形を呈するフラスコ状土坑である。確認面からの深さは108cmである。

【堆積土】4層に分層した。1層、2層は暗褐色土、3層は黒褐色土が主体である。4層はローム主体で壁面の崩落土である。

【壁・底面】底面は平坦で、壁はオーバーハングして立ち上がる。



第5号土坑 遺物出土状況

底面付近に柱状節理の石が出土している

【出土遺物】3層中の土坑中央部付近から縄文時代中期末葉に属する粗製の深鉢形土器が出土している。図21-9は深鉢形土器の口縁部片で、内外面に赤色顔料が付着しており、補修孔と思われる穿孔が認められる。赤色顔料は分析の結果、パイプ状ベンガラの同定結果が得られている（第4章第4節参照）。底面の東壁際からは、柱状節理の礫が出土しているが、使用痕は確認されなかった（図21-12）。

【小結】覆土中から採取した炭化物の放射性炭素年代測定の結果、 $3,800 \pm 20$ 年BPの年代値が得られている（第4章第1節参照）。出土土器から、本土坑は縄文時代中期末葉頃に機能していたと推測される。また、年代測定結果から、本土坑は縄文時代後期前葉頃には埋没過程にあったものと思われる。

(最上)

第6号土坑（SK-06）（図20）

【位置・確認】F-5,6グリッドに位置する。

【重複】なし。

【形態・規模】168×118cmの不整楕円形を呈する。確認面からの深さは22cmである。

【堆積土】2層に分層した。2層はローム混じりの土が主体で、1層は暗褐色土主体である。

【壁・底面】壁はゆるやかに立ち上がり、底面はほぼ平坦で、全体的に皿状を呈する。

【出土遺物】なし。

(岩田)

第7号土坑（SK-07）（図14）

【位置・確認】D-8.E-8グリッドに位置する。

【重複】第4号住居跡と重複し、層位的に第7号土坑が新しいが、同時期に埋没した可能性も高い。

【形態・規模】不整形を呈する。

【堆積土】3層に分層した。

【壁・底面】壁は上方に開きながら立ち上がる。北西辺付近には柱穴のようなピットがみられる。その部分はほかよりも深い。

【出土遺物】なし。

【小結】第4号住居跡の項参照。

(岩田)

第8号土坑（SK-08）（図20）

【位置・確認】G-5.H-5グリッドに位置する。

【重複】なし。

【形態・規模】180×132cmの不整楕円形を呈する。確認面からの深さは25cmである。

【堆積土】3層に分層した。

【壁・底面】底面は凹凸が激しく、壁は緩やかに立ち上がる。

【出土遺物】図示していないが、覆土から無文の縄文土器の小破片が1点出土している。

【小結】底面に小穴が多く観察される状況から木根痕の可能性が高い。

(最上)

第9号土坑（SK-09）（図20・21）

【位置・確認】F-4,G-4グリッドに位置する。

【重複】なし。

【形態・規模】126×80cmの不整楕円形を呈する。確認面からの深さは38cmである。

【堆積土】5層に分層した。

【壁・底面】底面は凹凸が激しく、壁は緩やかに立ち上がる。

【出土遺物】覆土から縄文時代後期前葉の土器片が出土している。

【小結】底面に小穴が多く観察される状況から木根痕の可能性が高い。

(最上)

第10号土坑（SK-10）

欠番。

第11号土坑（SK-11）

欠番。

第12号土坑（SK-12）

欠番。

第13号土坑（SK-13）（図20）

【位置・確認】 E-19.20グリッドに位置する。第Ⅲ層で確認された。

【重複】 なし。

【形態・規模】 142×96cmの不整規円形を呈する。確認面からの深さは28cmである。

【堆積土】 2層に分層した。各層ともに褐色土が主体で、1層中には灰白色の火山灰がブロック状に混入している。

【壁・底面】 底面は凹凸が激しく、壁は緩やかに立ち上がる。

【出土遺物】 なし。

【小結】 底面に小穴が多く観察される状況から木根痕の可能性が高い。

(最上)

第14号土坑（SK-14）

欠番。

第15号土坑（SK-15）（図20）

【位置・確認】 I-3.4J-3.4グリッドに位置する。第Ⅲ層で確認された。

【重複】 なし。

【形態・規模】 146×92cmの不整規円形を呈する。確認面からの深さは34cmである。

【堆積土】 3層に分層した。

【壁・底面】 底面はほぼ平坦で、壁は多少上方に開きながら垂直に近い状態で立ち上がる。

【出土遺物】 なし。

(最上)

3. 焼土遺構

第1号焼土遺構（SN-01）（図16）

【位置・確認】 E-6グリッドに位置する。第6号住居跡北西部に位置する。

【重複】 なし。

【形態・規模】 20×15cmの範囲で焼土が確認され、周辺には炭化物が散らばっていた。

【堆積土】 5層に分層した。表層の1.2層は焼土層で下層には炭化物粒の混ざる層が確認された。

【壁・底面】 底面には凹凸が確認される。

【出土遺物】 なし。

【小結】 放射性炭素年代測定を2層出土の炭化物に対して行った結果、 960 ± 20 年 BP の値が得られ、古代に相当する（第4章第1節参照）。この年代結果から、第6号住居跡に直接伴うものではない可能性が高い。

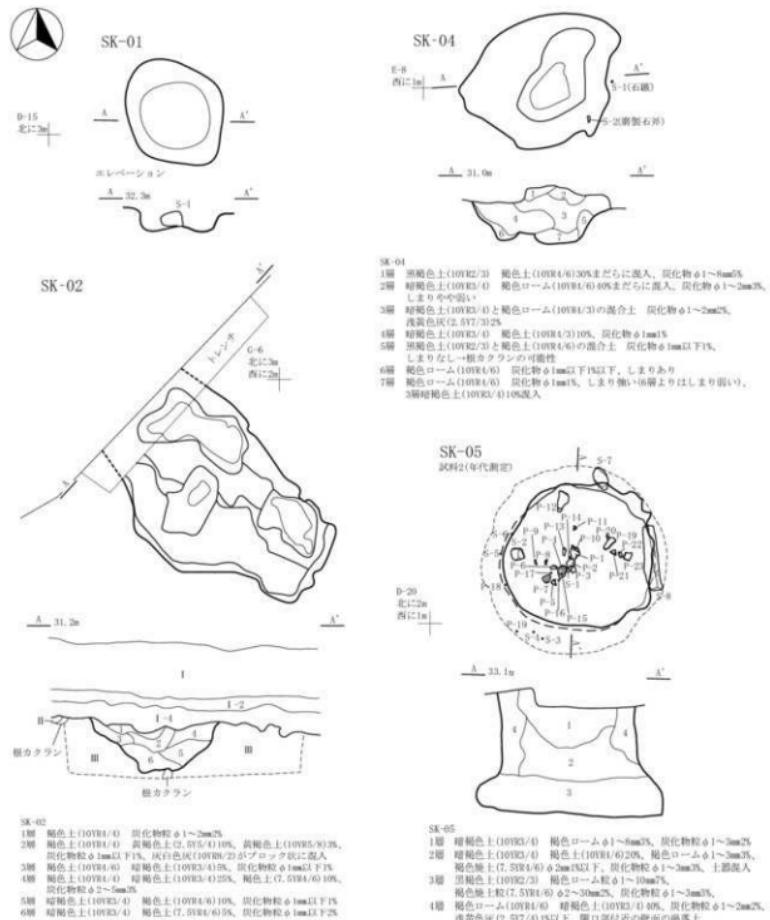


図19 土坑 (1)

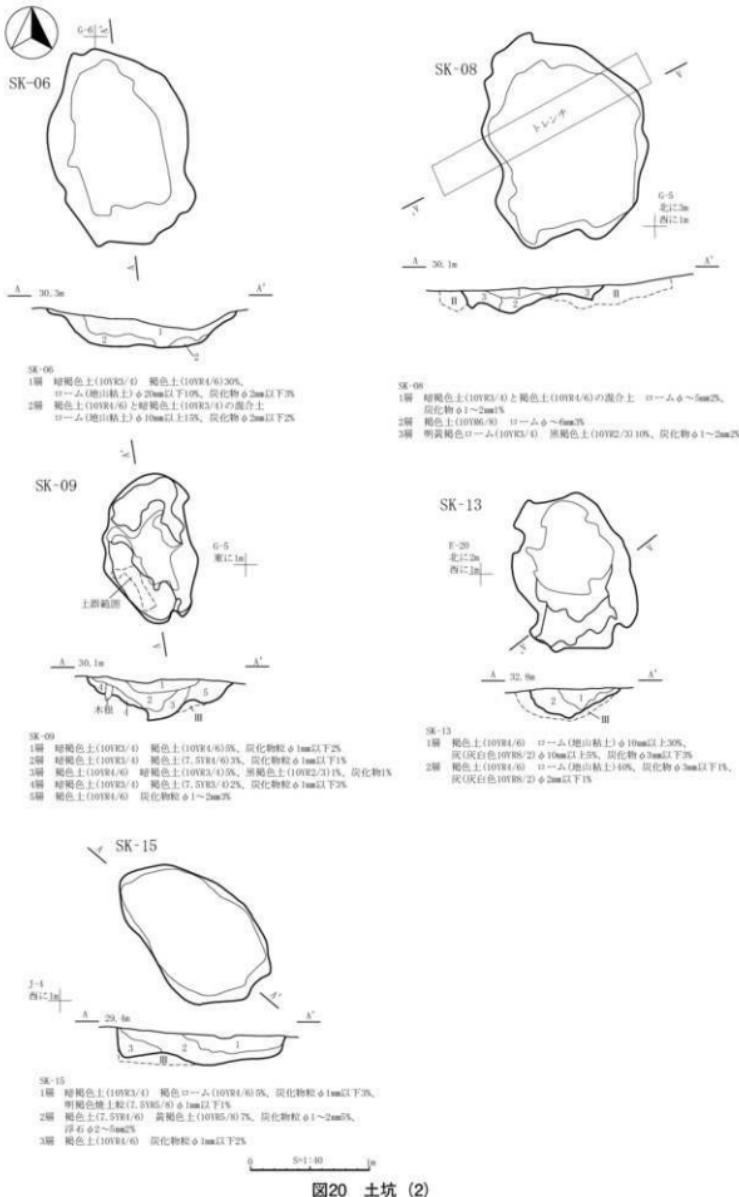


図20 土坑 (2)

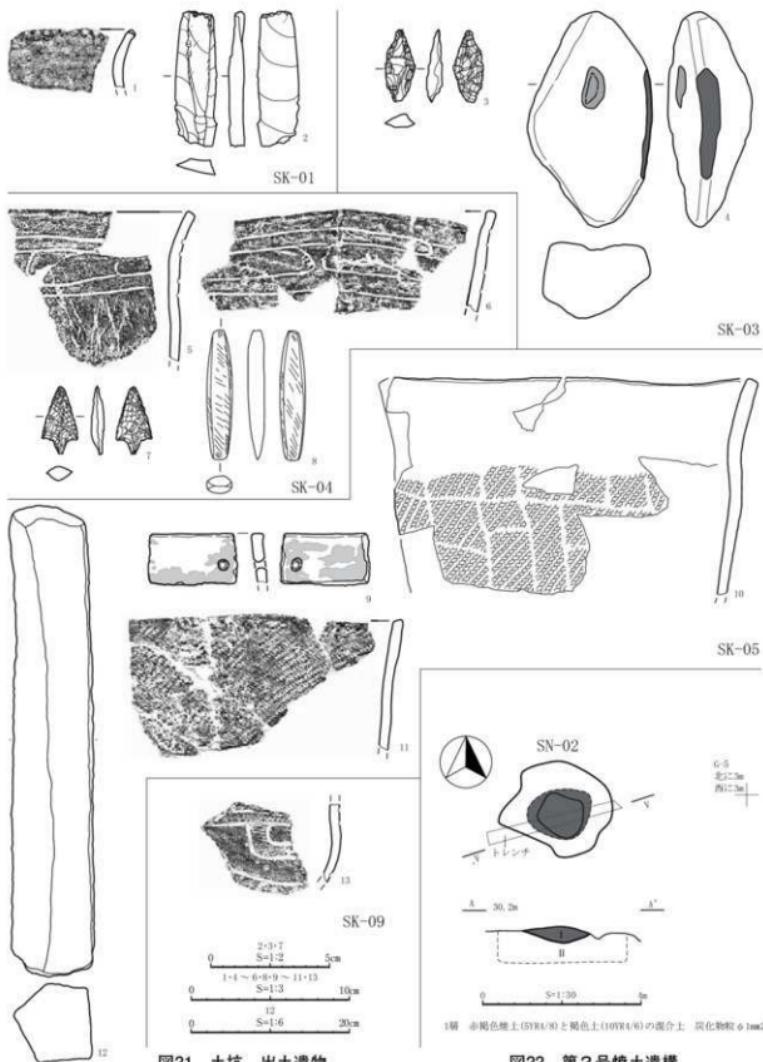


図21 土坑 出土遺物

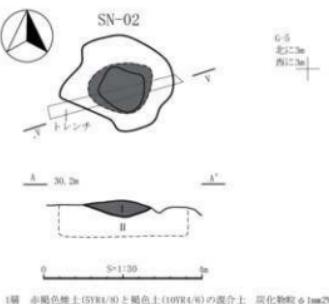


図22 第2号焼土遺構

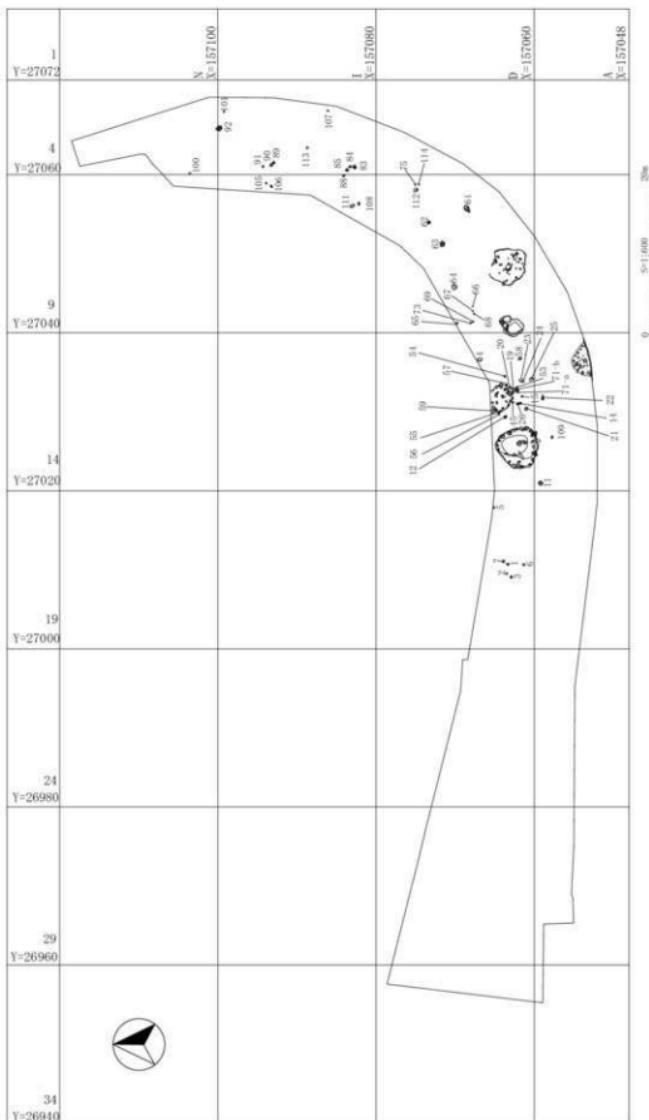


図23 ピット配置図



Pit 111

- 1層 姫褐色土(10YR3/4) 黒褐色上40%ブロック状に混入。炭化物 $\phi 3\sim5\text{mm}$ 以下25%
- 2層 姫褐色土(10YR3/4) 黒褐色30%
- 3層 黒褐色土(10YR2/3)
- 4層 黒褐色土(10YR4/6) 黒褐色土10%



Pit 112

- 1層 姫褐色土(10YR3/4) 黒褐色土20%
- 2層 黒褐色土(10YR4/6) 姫褐色土30%, 炭化物 $\phi 10\text{mm}$ 以下1%
- 3層 姫褐色土(10YR3/3)
- 4層 黃褐色土(10YR5/8) 黒褐色土20%



Pit 119

- 1層 姫褐色土(10YR4/6) 姫褐色土(10YR3/3)40%, 炭化物粒 $\phi 1\text{mm}$ 以下15%, 明褐色土粒(7.5Y5/9) $\phi 1\text{mm}$ 15%
- 2層 黑褐色土(10YR1/4) 黑褐色土(10YR5/6)10%, 明褐色土粒(7.5Y5/9) $\phi 1\text{mm}$ 以下25%

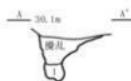


Pit 123

- 1層 姫褐色土(10YR3/4) 黃褐色土(10YR5/9)10%
- 2層 黃褐色土(10YR5/6) 黑褐色土(10YR2/2)30%

Pit 124

- 1層 黑褐色土(10YR2/3) 黄褐色土(10YR5/9)20%, 炭化物粒 $\phi 1\text{mm}$ 以上



Pit 161

- 1層 姫褐色土(10YR2/4) ローム(地山粘土) $\phi 20\text{mm}$ 以上20%, 黑褐色土(10YR2/3)8%, じまい弱。水分を多く含む



Pit 162

- 1層 姫褐色土(10YR2/4) 黑褐色土(10YR4/6)7%, 炭化物粒 $\phi 1\text{mm}$ 以下1%, ローム $\phi 10\sim30\text{mm}$ 7%
- 2層 黑褐色土(10YR4/6) 姫褐色土(10YR3/4)5%
- 3層 姫褐色土(10YR3/4) 黄褐色ローム(10YR5/9) $\phi 1\sim10\text{mm}$ 30%, 炭化物粒 $\phi 1\text{mm}$ 以下1%



Pit 164

- 1層 姫褐色土(10YR3/4) ローム(地山粘土) $\phi 15\text{mm}$ 以下15%, 黑褐色土(10YR2/3)8%, 炭化物 $\phi 2\text{mm}$ 以下3%
- 2層 姫褐色土(10YR3/4) ローム(地山粘土) $\phi 20\text{mm}$ 以上20%
- 3層 黑褐色土(10YR1/4) 姫褐色土(10YR3/4)7%
- 4層 黑褐色土(10YR1/4) 姫褐色土(10YR3/4)7%, 黑褐色土(10YR2/3)20%, 炭化物 $\phi 0.5\text{mm}$ 以下2%
- 5層 黑褐色土(10YR1/4) ローム(地山粘土) $\phi 10\text{mm}$ 以下30%, 姫褐色土(10YR3/4)10%
- 6層 黑褐色土(10YR1/4) 姫褐色土(10YR3/4)・ローム(地山粘土) $\phi 20\text{mm}$ 以上30%
- 7層 ローム(地山粘土) 黑褐色土(10YR1/4)20%, 炭化物 $\phi 1\text{mm}$ 以下1%



Pit 113

- 1層 黑褐色土(10YR4/6) 姫褐色土(10YR3/4)0%, 炭化物粒 $\phi 1\text{mm}$ 以下25%
- 2層 姫褐色土(10YR3/4) 黄褐色土(10YR5/8)15%, 炭化物粒 $\phi 5\text{mm}$ 15%
- 3層 黑褐色土(7.5Y6/6) 黄褐色土(10YR5/9)7%, 黑褐色土(10YR4/6)7%

0 5~1.00 2m

図24 ピット断面図

PIT番号	規格(cm) 長径×短径×深さ	グリッド	土層注記
1	36×27×17	B-16	1層 黒色土(10YR2/2), ロームブロックφ10~30mm30%, 廃化物無量
2	21×20×17	B-16	1層 黒色土(10YR2/2), ロームブロックφ20~50mm5%, 土面小碎片出土
3	33×21×18	B-16	1層 黒色シルト(10YR2/3), ロームφ1~10mm20%, 廃化物無量
4	53×41×17	F-9	1層 細粒褐色シルト, ロームφ1~10mm5%, 廃化物φ1mm無量
5	227×27×15	E-14	1層 黑褐色シルト(10YR2/3), ロームφ1~20mm10%, 廃化物φ1~2mm1%
6	34×21×11	B-16	1層 黑褐色シルト(10YR2/2), ロームφ10mm10%, 廃化物φ1mm2%
7	81×34×13	B-16	1層 黑褐色シルト(10YR2/2), ロームφ10mm10%, 土面小碎片出土
11	96×47×42	C-13	1層 細粒褐色土上(10YR2/4), 黑色土40%ブロック状に混入, 廃化物φ3~5mm以下25% 2層 黑褐色土上(10YR2/4), 黑色土30% 3層 黑褐色土上(10YR2/3) 4層 黑褐色土上(10YR2/6), 明顯褐色土上10%, 土面小碎片出土
12	83×36×39.	B-11	1層 細粒褐色土上(10YR2/4), 黑色土20% 2層 黑褐色土上(10YR2/4), 明顯褐色土上10%, 廉化物φ1mm以下1% 3層 細粒褐色土上(10YR2/3), 黑色土20% 4層 黑褐色土上(10YR2/6), 明顯褐色土上10%, 土面小碎片出土
14	31×21×22	B-11	1層 黑褐色シルト(10YR2/2), ロームφ1~15mm5%
15	24×23×23	B-11	1層 黑褐色シルト(10YR2/2), ロームφ6~15mm25%, 廃化物φ1mm無量
19	49×43×26	B-10	1層 地面土上(10YR2/6), 明顯褐色土上(10YR2/3)40%, 廃化物無量φ1mm以下1%, 明顯褐色土上(7.5YR5/6)φ1mm15% 2層 地面土上(10YR2/6), 明顯褐色土上(7.5YR5/6)φ1mm15%
20	38×32×128	B-10	1層 黑褐色土上(10YR2/2)と黒褐色土上(10YR2/3)の混合土, 廃化物φ1~3mm1%, 明顯褐色土上(7.5YR5/6)φ1~3mm2%
21	46×29×15	B-11	1層 黑褐色土上(10YR2/3), 1~2mm褐色土上(10YR2/2)φ1mm, 廃化物φ1mm無量, 但原生
22	59×29×18	C-11	1層 黑褐色土上(10YR2/2), 明顯褐色土上(10YR2/6)40%20%
23	47×41×21	B-10	1層 黑褐色土上(10YR2/6), 明顯褐色土上(10YR2/3)10% 2層 黑褐色土上(10YR2/6), 明顯褐色土上(10YR2/3)90%
24	200×23×13	B-10	1層 黑褐色土上(10YR2/3), 明顯褐色土上(10YR2/6)80~90%, 廃化物φ1mm無量
25	55×36×13	B-10	1層 黑褐色土上(10YR2/3), 明顯褐色土上(10YR2/6)45%
26	41×25×22	B-11	1層 黑褐色土上(10YR2/4), 黑色土1粒(7.5YR6/3)φ1~2mm2%, 廃化物φ1~5mm5%
45	35×27×15	B-11	1層 黑褐色土上(10YR2/4), 黑色ローム土(10YR4/6)φ1~2mm2%, 廃化物φ1~2mm2%
53	26×22×9	B-10	1層 黑褐色土上(10YR2/4), 黑色ローム(10YR4/6)10%などに混入, 廃化物φ1~1mm5% 明顯褐色土上(7.5YR5/6)φ1~1mm2%, 廃化物φ1~2mm1%
54	29×23×16	B-10	1層 黑褐色土上(10YR2/4), 土上黒褐色土上(10YR1/6)の混合土, 廃化物φ1mm15%, 黑褐色土上(10YR4/6)φ1~2mm13.3%
55	16×12×6	E-11	1層 黑褐色土上(10YR2/4), 土上黒褐色土上(10YR1/6)の混合土, 廃化物φ1mm15%
56	32×18×16	E-11	1層 黑褐色土上(10YR2/4), 上二段黒褐色土(10YR2/2)φ1mm35%, 廃化物φ2mm13.3%
87	27×20×14	E-10	1層 黑褐色土上(10YR2/4), 黑色ローム土(10YR4/6)φ1~3mm3%, 廃化物φ1~5mm25%
58	50×31×11	B-9	1層 黑褐色土上(10YR2/4)と黒褐色土上(10YR1/6)の混合土, 明顯褐色土粒(7.5YR5/6)φ1mm15.13.3%, 廃化物φ1~3mm5%
59	(44)×57×48	E-11	1層 黑褐色土上(10YR2/4), 黑色土(10YR1/6)などに混入, 廃化物φ1~10mm3%, 明顯褐色土上(7.5YR5/6)φ1~1mm2%, 土面小碎片出土
60	不明	E-11	1層 黑褐色土上(10YR2/4), 1~5mm(地山粘土)φ30mm以上20%, 廃化物φ5mm以T3% 2層 黑褐色土上(10YR2/4), 黑色土(10YR2/4)20%, ロームφ1mm以下7%, 廉化物φ1mm以下F3%
61	102×57×73	F-5	1層 黑褐色土上(10YR2/4), 土上(10YR1/6)の混合土, 黑褐色土(10YR2/3)15%, しまり弱, 水分を多く含む
62	42×36×41	G-5	1層 黑褐色土上(10YR2/4), 明顯褐色土上(10YR1/6)15%, 廉化物φ1mm以下T1%
63	71×60×40	F-6	未記
64	68×62×32	F-7	1層 細粒褐色土上(10YR2/4), ローム(地山粘土)φ15mm以下10%, 黑褐色土(10YR2/3)5%, 廉化物φ3mm以下3% 2層 細粒褐色土上(10YR2/4), ローム(地山粘土)φ20mm以上20% 3層 黑褐色土上(10YR2/4), 明顯褐色土(10YR2/3)47% 4層 ローム(地山粘土), 黑色土(10YR4/6)30%, 明顯褐色土(10YR2/4)20%, 廉化物φ1mm以下T3% 5層 黑褐色土上(10YR2/4), 明顯褐色土(10YR2/4)20%, ローム(地山粘土)φ1mm以下1.5% 7層 ローム(地山粘土), 黑色土(10YR4/6)20%, 廉化物φ1mm以下T1%
65	34×25×28	F-6	1層 ローム(地山粘土), 黑色土(10YR4/6)30%, 廉化物φ2mm32.7%
66	16×8×15	E-6	1層 黑褐色土上(10YR2/4), 黑色土(10YR2/3)10%
67	19×16×13	E-6	1層 ローム(地山粘土), 黑色土(10YR4/6)72%, 明顯褐色土(10YR2/4)15%, 廉化物φ2mm以下T1%
68	16×7×12	E-6	1層 ローム(地山粘土), 黑褐色土(10YR2/3)60%, 明顯褐色土(10YR2/4)30%
69	22×15×23	E-6	1層 黑褐色土上(10YR2/3), 土上(10YR2/3)30%, ローム(地山粘土)φ1mm以下T7%
71-n	33×21×9	B-10	1層 黑褐色土上(10YR2/3), 土上(10YR2/3)30%, 明顯褐色土上(10YR2/4)20%
71-n	36×25×16	B-10	1層 地面土上(10YR2/3), ローム(地山粘土)φ10mm以上T9%, 明顯褐色土上(10YR2/4)10%
73	20×16×13	E-6	1層 黑褐色土上(10YR2/4), ローム(地山粘土)φ10mm以上15%, 黑褐色土(10YR2/3)20%
75	23×15×7	E-4	1層 黑褐色土上(10YR2/3), 土上(10YR2/3)5mm以上1.0%
83	66×39×42	I-2	1~2層 細粒褐色土上(10YR2/4), 明顯褐色土φ1~5mm5%, 廉化物φ1~5mm2%
84	80×24×30	I-2	1~2層 細粒褐色土上(10YR2/4), 明顯褐色土φ1~5mm5%, 廉化物φ1~5mm2%
85	38×33×48	I-2	1~2層 細粒褐色土上(10YR2/4), 明顯褐色土φ1~5mm5%, 廉化物φ1~5mm2%
88	28×27×47	J-4	1~2層 細粒褐色土上(10YR2/4), ローム(地山粘土)30%, 廉化物φ5mm以下3%
89	32×30×35	L-3	1~2層 地面記
90	53×26×30	L-3	1~2層 ローム(地山粘土), 黑色土(10YR4/6)30%, 明顯褐色土上(10YR2/4)20%
91	28×24×16	I-3	未記
92	75×62×33	W-2	1層 ローム(地山粘土)と黒褐色土(10YR4/6)の混合土, 明顯褐色土上(10YR2/4)20%, 廉化物φ5mm以下3%, 土面小碎片出土
100	32×24×不明	N-3	1層 黑褐色土上(10YR2/4), ローム(地山粘土)φ50mm10%
101	23×17×12	W-2	1層 黑褐色土上(10YR2/4), ローム(地山粘土)φ50mm1.3%
105	22×21×26	L-1	未記
106	37×18×29	L-1	未記
107	27×24×13	J-1	未記
108	30×27×32	J-1	未記
109	38×25×11	C-12	未記
111	56×35×35	I-1	1層 黑褐色土上(10YR4/6), 明顯褐色土上(10YR2/4)15%, 廉化物φ1mm以下1%
112	60×49×49	G-1	1層 黑褐色土上(10YR4/6), 明顯褐色土上(10YR2/4)5%, 廉化物φ1mm以下2%
113	25×23×25	K-3	未記
114	26×17×7	G-4	未記

表3 ピット

第2号焼土遺構（SN-02）（図22）

【位置・確認】G-5,6グリッドに位置する。

【重複】なし。

【形態・規模】72×58cmの範囲で、深さ10cmまで焼土が及ぶ。

【堆積土】単層で焼土に炭化物が混じる。

【壁・底面】皿状に焼土が確認される。

【出土遺物】なし。

4. ピット（図23・図24・表3）

今回の調査では、住居跡に伴う柱穴と推測されるピット以外に、ピットが60基発見された。一部木根痕と誤認している可能性もある。ピットのデータを表3にまとめた。

5. 剥片集中1（図25・26）

今回の調査では、剥片の集中箇所が1ヶ所発見された。剥片には使用痕と思われる微細な剥離痕の確認されるものが多い。また石材はすべて同一母岩と思われ、接合する剥片もある。この場所で母岩から剥離した剥片を用いて獲物の解体などの作業を行ったか、あるいは別の場所で石器を使用した作業を行った後、この場に廃棄したのか、さまざまな可能性が考えられる。



剥片集中1 遺物出土状況

【位置・確認】C-17,18,D-17,18グリッドに位置する。第III層で確認された。

【重複】なし。

【形態・規模】222×144cm、深さ20cmの規模で珪質頁岩の剥片石器類が集中して出土した。

【堆積土】皿状にくぼんでいる箇所に堆積した褐色ロームに類似した土を混合物の種類で2層に分層した。遺物は1層から出土している。

【壁・底面】底面はほぼ平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。

【出土遺物】石錐1点、微小剥離痕のある剥片32点、剥片13点の合計46点がまとめて出土している。接合資料も2点確認された。すべて同一母岩で微小剥離痕のある剥片が多いため、母岩（原石）から剥片を得た後、この場で剥片を使用した作業を行っていたか、他の場所でこれらの石器を使用してから一括してこの場に廃棄したなどの可能性が考えられる。

（岩田）

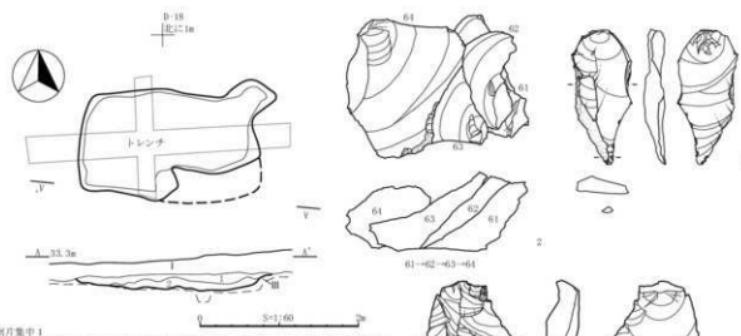


図25 剥片集中 1

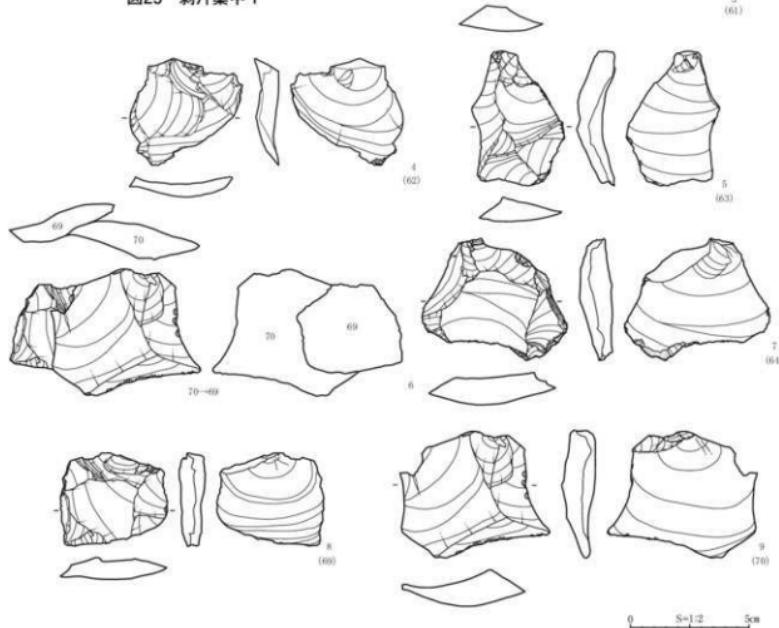


図26 剥片集中 1 出土遺物

第2節 遺構外出土遺物等

1. 土器・土製品類（図27・28）

土器・土製品は総重量46,945gが出土している。いずれも縄文時代中期末葉から後期前葉に位置づけられる。

縄文時代中期末葉の土器（図27-6）

大木10式併行に相当する土器である。図27-6は、深鉢形土器の胴部破片で、地文縄文に波頭状の沈線文が施文されている。

縄文時代後期初頭の土器（図27-7～10）

董沢式、沖附(2)式、弥栄平(2)式、馬立式などに相当する土器である。器種は深鉢形土器で、器形は復元個体が少なく全体像が把握できないものが多いが、頸部が屈曲し、口縁部が内湾気味に開いているものが認められる。文様は、縄文と沈線により三角形文、方形文、曲線文、蛇行文などの文様が特徴的に認められる。沈線は幅が3mm～5mmと広く、断面形が弧状のものが多い。口縁部には刺突が認められるもの（図27-10）もある。

縄文時代後期前葉の土器（図27-1～5・11～23・図28-1～8）

沈線による施文が主体的な十腰内I式に相当する土器である。当該時期に属する土器は、本遺跡において最も多く出土している。器種は深鉢形土器、壺形土器などが認められる。その他、第1号住居跡の床下土器埋設遺構からは、台付鉢が出土している。文様は沈線文、櫛歯状の条線文により楕円状、弧状、S字状、入組波状、格子状などの文様が施文されているもの（図27-1～5・11～23・図28-1・2）と、網目状撚糸文が施文されているもの（図28-3～8）などがある。沈線文は2・3条単位の平行沈線によるものが主体的である。沈線は後期初頭の土器と比較して幅が狭く、断面形が台形状のものが多い。網目状撚糸文には無節R原体が用いられているものが多い。口縁部は折り返しや粘土の貼り付けによって肥厚しているもの（図27-11・13・18・図28-4・7）がある。また、口唇部には浅い刻みが認められるもの（図27-17・19）もある。

粗製土器および底部破片（図28-9～16）

無文あるいは縄文のみで文様要素が乏しく、器形、器面調整、底部のあり方などから縄文時代中期末葉から後期前葉に位置づけられると考えられる土器である。口唇部には刻みや刺突が認められるもの（図28-10・11）や、平坦に整形されているもの（図28-15）などがある。図28-9は口縁部に3条の縄文原体の側面押圧文が認められるもので、縄文時代後期初頭の牛ヶ沢式に相当するものである可能性がある。底部破片には、網代痕（図28-13・16）や木葉痕（図27-2・図17-4）が認められるものが出土している。また、第5号土坑からは口縁部が無文で緩やかに外反しているものと、口縁部が直線的で口唇部付近まで地文縄文が施されるものとが出土している（図21-10・11）。図21-9は深鉢形土器の口縁部破片で、補修孔と思われる穿孔が認められ、内外面にはベンガラが付着している。第5号土坑出土土器は、器形、器面調整、文様構成のあり方などから、縄文時代中期末葉に位置づけられる可能性が高い。

土製品（図28-17・18）

遺構外から円板状土製品が2点出土しており、十腰内I式土器の胴部破片が用いられている。土器片の周縁には打ち欠きの痕跡が認められ、円板状に整形されている。
(最上)

2. 石器（遺構外出土石器 図29～35）

ここでは遺構内・遺構外から出土した石器を一括して記述する。

出土した石器は、剥片石器106点、礫石器95点である。

第Ⅰ群 剥片石器類

1類 石鏃

遺構内から7点、遺構外から2点出土している。円基、尖基、有茎の石鏃が確認される。

2類 石槍

遺構外から1点出土している。図29-3は基部が欠損している。

3類 石匙

遺構外から3点出土している。縦型2点、横型1点である。

4類 石錐

断定はできないが形状から石錐の可能性があるものとしては、遺構内から2点、遺構外から1点出土している。第1号住居跡から出土したS-13（図7-10）は不定形剥片の尖端部を使用している。尖端部周辺の刃部には小剥離痕が観察される。

5類 石鎧

遺構外から1点出土している。S-6（図29-7）は第1号住居跡周辺の第Ⅱ層から出土したものであるが、両面加工が施されたバチ状の石鎧である。

6類 不定形石器

縁辺に連続剥離を施し刃部を作り出しているが、上記の1～4類のように定形的な形態にならないものを含めた。遺構内から3点、遺構外から24点出土している。刃部が急角度調整のものとそうでないものがある。

7類 微小剥離痕のある剥片

明確な刃部をつくりだすための調整痕は認められないが、使用などによって微小剥離痕が認められるものである。遺構内から33点、遺構外から23点出土している。剥片集中1から多く出土した。

8類 両極剥離痕のある剥片

向かい合った複数の辺に、加撃痕や階段状の剥離が認められるものである。遺構外から2点出土している。

9類 剥片・石核

石核は、遺構内から1点、遺構外から2点出土している。第6号住居跡の1層から出土したS-19（図17-15）は、半球形の平たい面が複剥離面打面になり、そこから剥片剥離を行っている。

第Ⅱ群 磕石器類

10類 石斧類

図31-4は打製石斧であると思われるが、磨製石斧にする途中の整形段階のものである可能性もある。打製石斧といえるものはこの1点である。磨製石斧は遺構内から2点、遺構外から7点出土している。遺構外から出土した1点（図31-1）は、擦切痕、切断痕が右側面に残されており、擦切技法による製作であると推測される。

11類 磨器類

磨器類は、本遺跡で一定量確認された。遺構内から1点、遺構外から7点出土している。ディサイト製の1点を除いた他は、花崗閃緑岩を用いている。円形の川原石の一端、または両端にのみ調整を施し刃部とするものや、綫長の原石素材の自然面を残しながら調整を施し刃部を作出するものなどがある。片面磨器や両面磨器として分類することができる。

12類 敲磨器類

A：砾表面にタタキ、凹み、スリなどの使用痕が観察されるものと、B：大型砾をスリ台、タタキ台に使用した石皿・台石類がある。Aは遺構内から11点、遺構外から42点出土している。Bは遺構内から7点、遺構外から7点出土している。Aはタタキの痕跡を残すものが最も多い。石皿・台石類は他の石器と比較して、住居跡内からの出土比率が高い。

3. 石製品類

石製品は6点出土している。

軽石製品は3点確認され、そのうち2点は第6号住居跡から出土している（図18-7・8）。いずれも扁平な板状に整形され、上部は欠損している。小島氏によれば、この種の軽石製品は、北海道の渡島半島部と青森県内で多数の出土が確認されており、特に八戸市周辺の遺跡から多く出土するもので、後期前葉の遺構に伴うものが多いということである（小島 2005:398）。

石棒と思われるものは、遺構外のB-19グリッドから出土している（図35-8）。石材は安山岩である。寸詰まりな円柱状で、全体を磨いて滑らかに整形している。表面の上部には、沈線が水平に施され、下部にもくびれを創出するかのように沈線が認められる。下端にも一部打ち欠き痕がみられる。

他に石製品と思われるものは、遺構外のE-7グリッドから出土しており、凝灰岩の扁平な平行四辺形の砾を加工し、中央部を太いバンド状に磨ったものである（図35-9）。また、図35-10は緻密な凝灰岩を磨き、図のように陶磁器における高台部分の破片のような形態に整形しているが、何を意図して製作されたものか不明である。

（岩田）

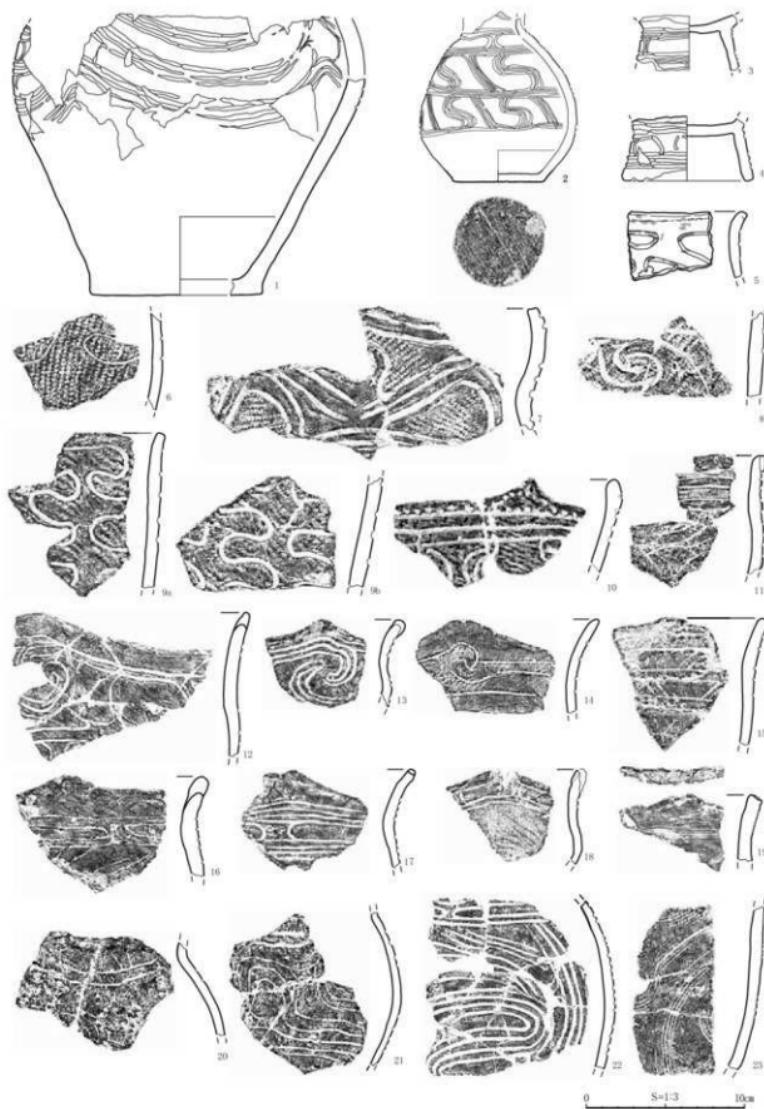


図27 遺構外出土遺物（1）

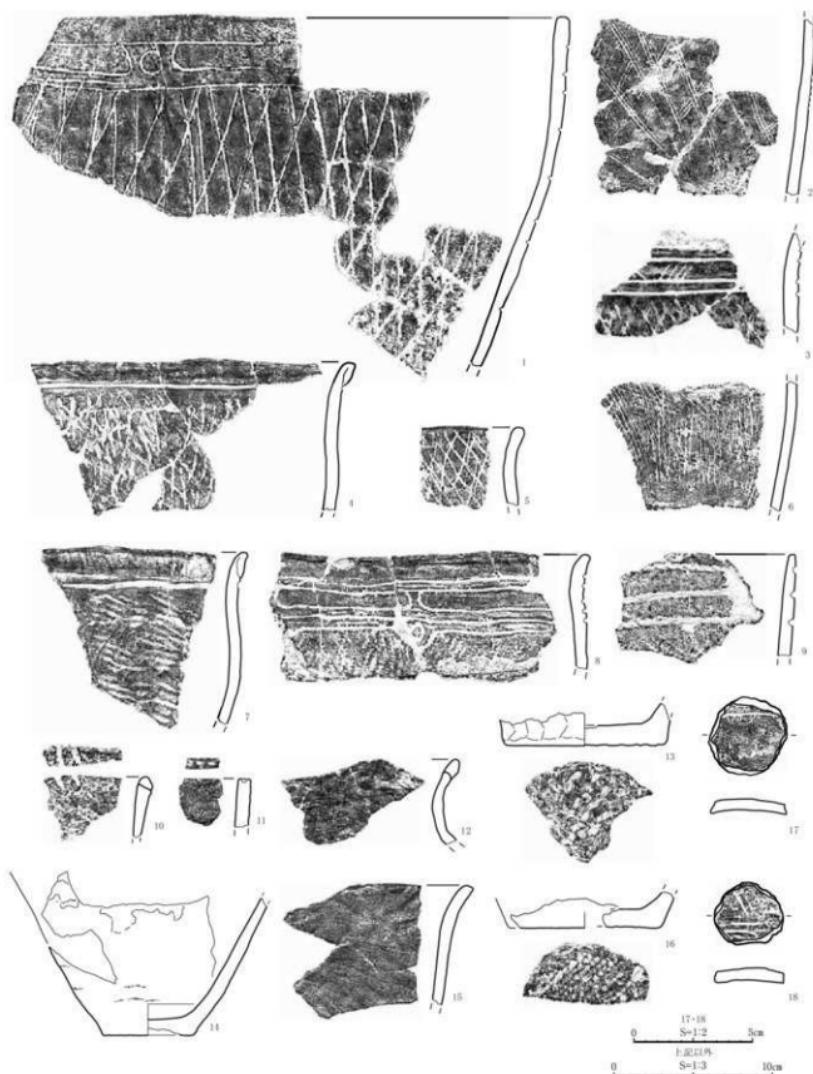


図28 遺構外出土遺物（2）

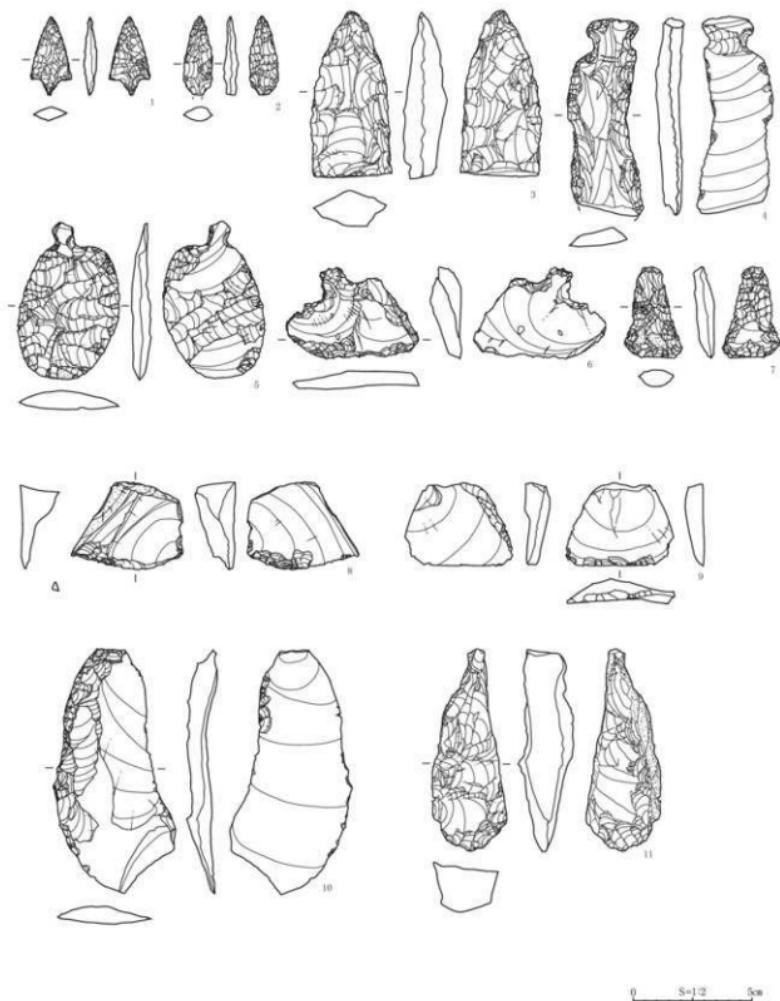


図29 遺構外出土遺物（3）



図30 遺構外出土遺物（4）

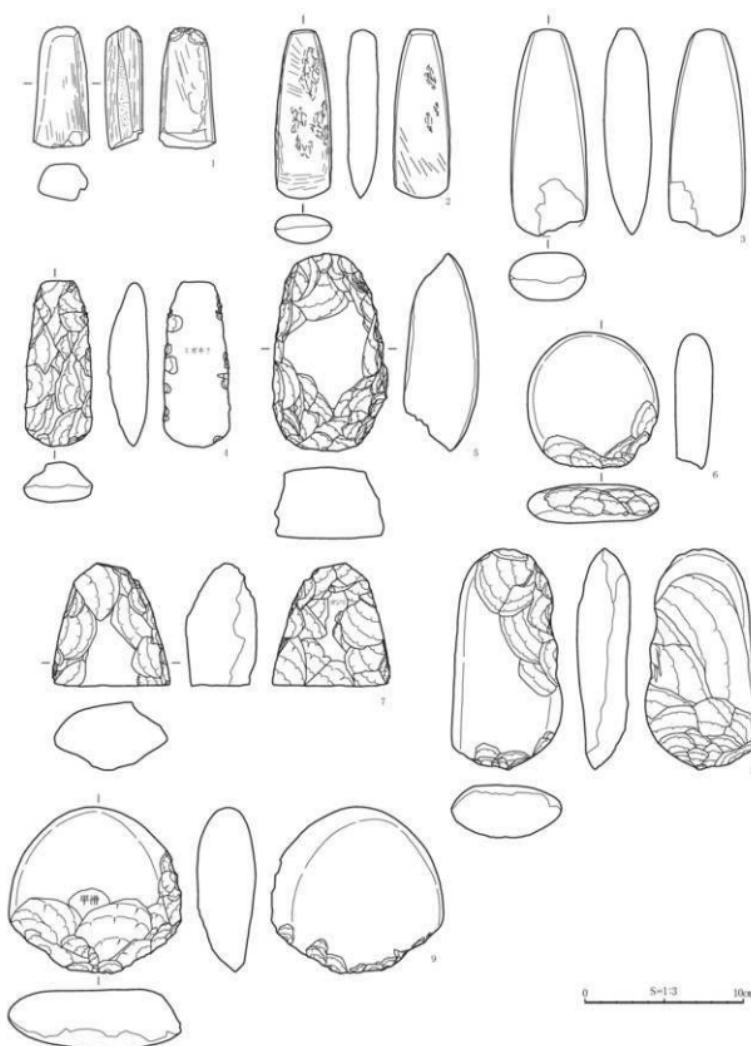


図31 遺構外出土遺物（5）

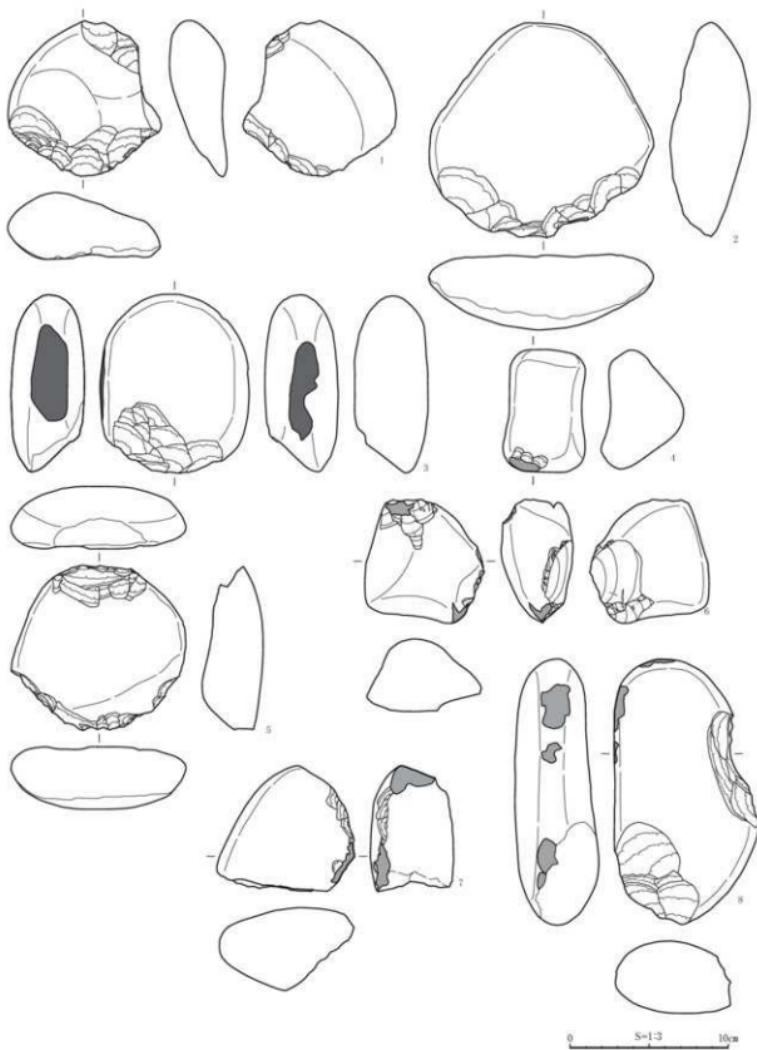


図32 遺構外出土遺物（6）

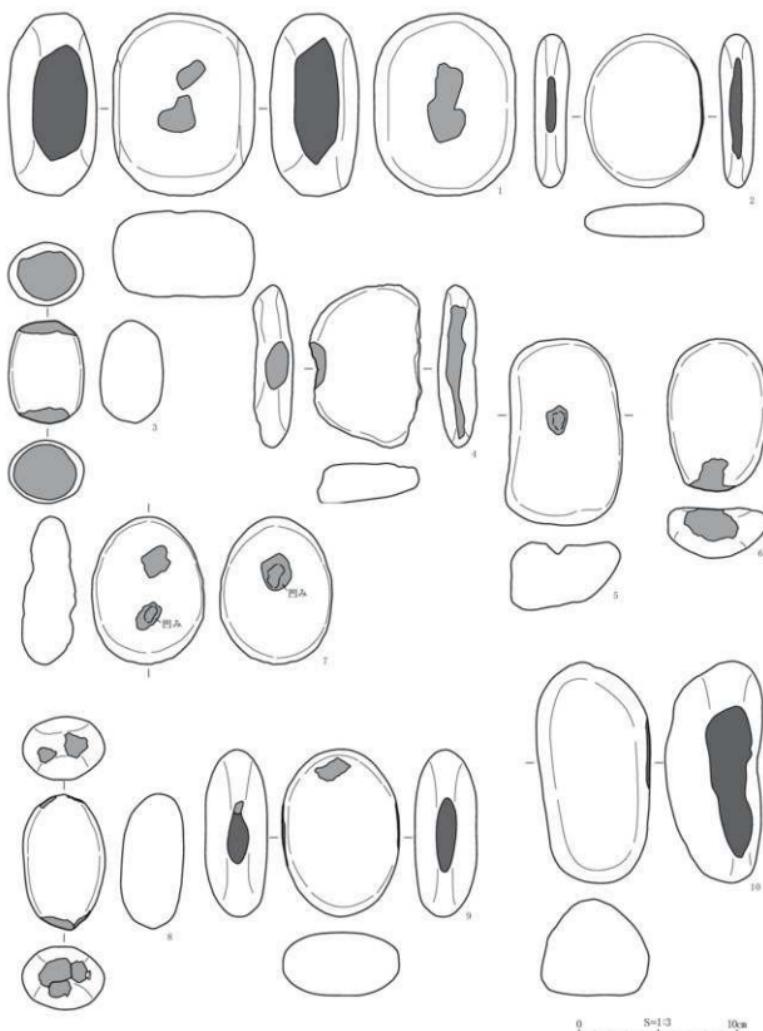


図33 遺構外出土遺物（7）



図34 遺構外出土遺物（8）

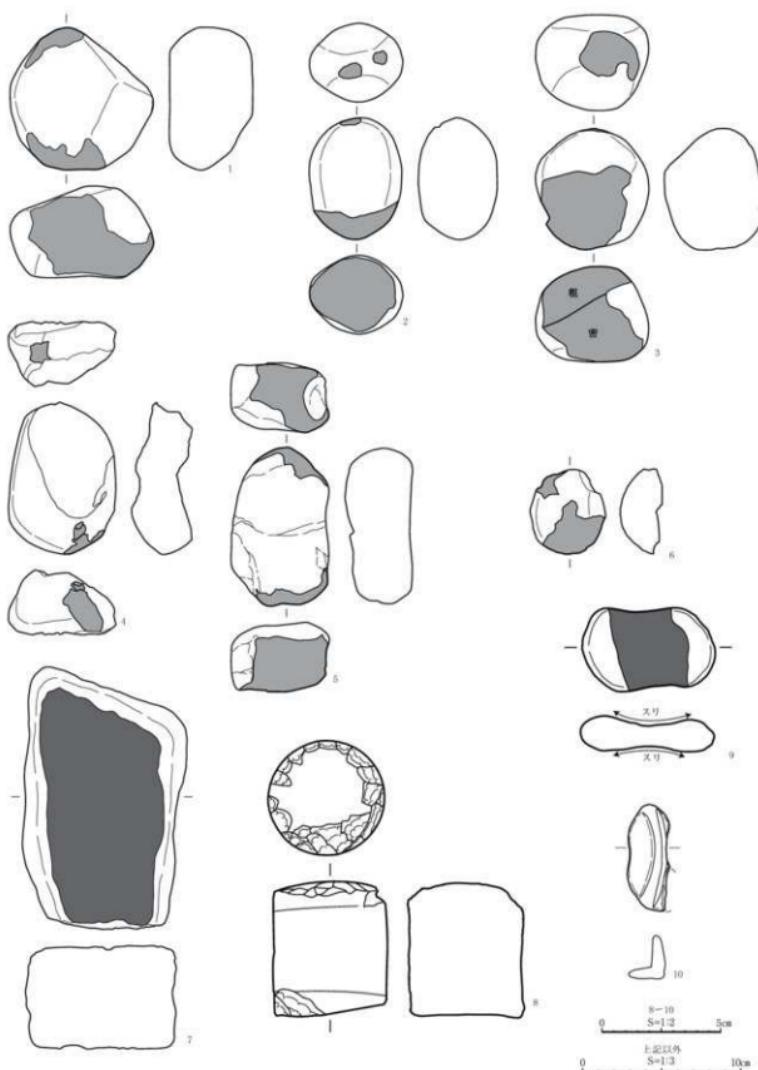


図35 遺構外出土遺物（9）

4. 江戸時代以降の出土遺物（図36）

ここでは、遺構外から出土した江戸時代以降の出土遺物をまとめて報告する。

江戸時代以降の出土遺物は、大きく分けて3時期確認される。江戸時代、明治時代、戦中～現代の3時期である。

江戸時代の遺物は図36-1～3、明治時代は図36-4、戦中～現代は図36-5～13である。

図36-1・2はいずれも染付鉢であり、肥前系と推測される。18世紀後半ぐらいに位置づけられると推測される。図36-3は白磁の紅皿で口縁部は水平に平たく、外面は高台とその周辺が露胎している。

図36-4は型紙刷りの染付皿で明治時代に属すると思われる。内面中央には松竹梅文様が配され、それを中心にして放射状に区画が設けられ、草花と日の丸が配置される。口縁部は輪花である。外面には花唐草文様が2個施される。蛇の目四形高台である。

図36-5・6は太平洋戦争時に製作された戦時統制品である。図36-5は輪花皿で高台内に「岐386」とクロム印で統制番号が押されている。内面は中心部が染付で様式化された放射状花文様が描かれ、剥がれてしまっているが枝葉の上絵が施されている。口縁部の輪花に合わせるように浮き彫りで花弁が表現されている。胎土はクリーム色で透明釉がかけられる。図36-6は染付小壺で、高台裏に染付で「岐203」と書かれている。それ以外に文様はなく、全体に青みがかっており、貫入が認められる。いずれも戦時中に岐阜で生産されたものと思われる。

図36-12はガラス製ビール瓶で、「登録商標」「SAKURA BEER サクラビール」と浮き彫りが施されている。櫻麦酒は、1913年に設立された帝国麦酒が1939年に社名変更したものである。櫻麦酒は1943年に大日本麦酒に合併されている。

図36-11はガラス製目薬点眼器で、ロート製薬株式会社製である。目薬の容器と点眼器が一体となつた画期的な発明品であり、1931年（昭和6年）4月に全国一斉に発売されたものである（ロート製薬株式会社より）。上部の穴にゴムキャップをはめ、このゴムキャップを押すと目薬が下の穴から出る構造になっている。正面の六角形部分にはロート製薬の商標が書かれたシールが貼られていた。

図36-8は急須、図36-7は褐釉の徳利、図36-9・10はガラス製おはじき、図36-13は染付蓋である。

このように大烟家ノ上遺跡では、太平洋戦争前から戦中にかけての遺物がまとまって出土している。調査区西部基本層序付近には大きな竪穴が存在していた。もしこれが防空壕のようなものであったなら、戦前から戦後にかけての遺物はこれに関係の深いものである可能性が高い。

（岩田）

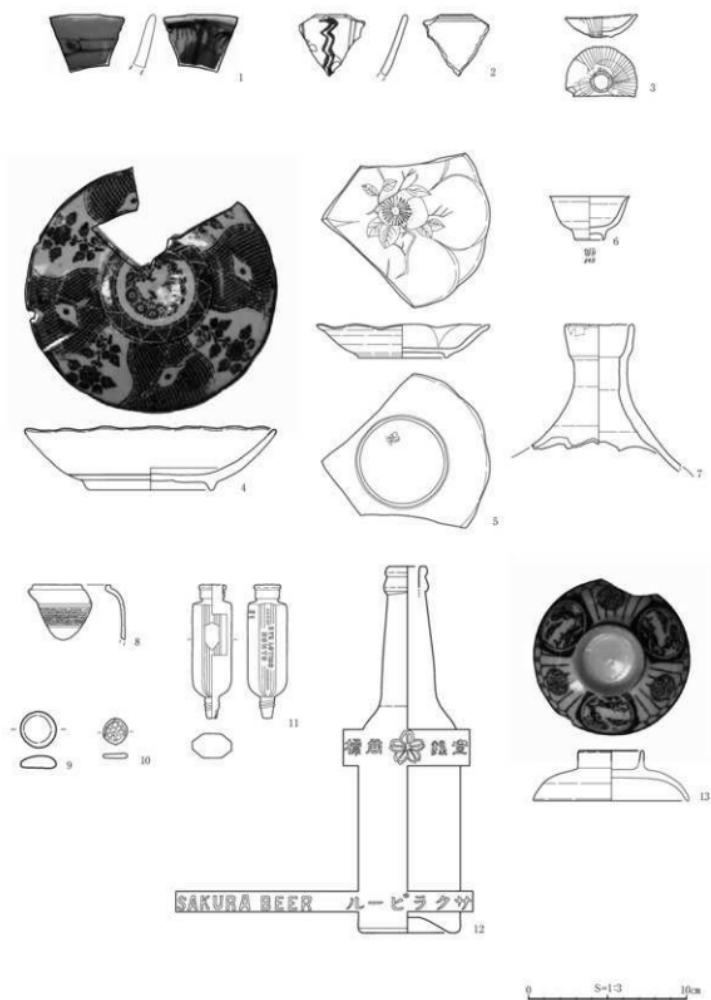


図36 遺構外出土遺物 (10)

第4章 自然科学分析

第1節 大烟家ノ上遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

1 測定対象試料

大烟家ノ上遺跡は、青森県むつ市大烟町大字二枚橋字釣屋浜、字家ノ上（北緯41° 25' 1"、東経141° 9' 12"）に所在する。測定対象試料は、SI-01炉1出土炭化物（OIE 炭化物 -01 : IAAA-92239）、SI-01床下土器埋設遺構出土炭化物（OIE 炭化物 -02 : IAAA-92240）、SI-02覆土出土炭化物（OIE 炭化物 -03 : IAAA-92241）、SI-03 2層（貼床）出土炭化物（OIE 炭化物 -04 : IAAA-92242）、SI-04 覆土出土炭化物（OIE 炭化物 -05 : IAAA-92243）、合計5点である。

2 測定の意義

住居跡出土試料の測定では、各試料の出土状況に応じて住居の製作時、機能時、廃棄時の年代を検討する。SI-01床下土器埋設遺構出土試料の測定では、埋められていた土器の年代を明らかにする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除き、必要量の試料を採取、秤量する（付表「処理前試料量」）。
- (2) 酸処理、アルカリ処理、酸処理（AAA:Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80°C）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80°C）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80°C）を用いて数時間処理した後、遠心分離機を使用して超純水で中性になるまで希釈する。希釈後の試料を90°Cで乾燥し、秤量する（付表「処理後試料量」）。
- (3) 必要量を採取、秤量（付表「燃焼量」）した試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500°Cで30分、850°Cで2時間加熱する。
- (4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO₂）を精製する。この二酸化炭素中の炭素相当量を算出する（付表「精製炭素量」）。
- (5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

4 測定方法

測定機器は、加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を使用する。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) 年代値の算出には、Libby の半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。
- (2) ^{14}C 年代（Libby Age : yrBP）は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として測る年代である。この値は、 $\delta^{13}\text{C}$ によって補正された値である。 ^{14}C 年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定した場合には表中に（AMS）と注記する。
- (4) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。
- (5) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。历年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal04データベース（Reimer et al. 2004）を用い、OxCal4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 1995; Bronk Ramsey 2001; Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

6 測定結果

大畑家ノ上遺跡出土試料の ^{14}C 年代は、SI-01炉1出土炭化物 OIE 炭化物 -01が 3620 ± 20 yrBP、SI-01床下土器埋設構造出土炭化物 OIE 炭化物 -02が 3660 ± 20 yrBP、SI-02覆土出土炭化物 OIE 炭化物 -03が 3620 ± 20 yrBP、SI-03 2層（貼床）出土炭化物 OIE 炭化物 -04が 2380 ± 20 yrBP、SI-04覆土出土炭化物 OIE 炭化物 -05が 910 ± 20 yrBP である。

SI-01に関する2点の試料を見ると、炉1のOIE 炭化物 -01が床下土器埋設構造のOIE 炭化物 -02よりも新しい値で、遺構の前後関係に整合する結果となった。両者は近接した年代値であり、いずれも縄文時代後期前葉頃に相当する。SI-02のOIE 炭化物 -03は縄文時代後期前葉頃、SI-03のOIE 炭化物 -04は縄文時代晩期末から弥生時代への移行期頃に当たる。SI-04のOIE 炭化物 -05は平安時代の年代値で、历年較正年代 (1σ) は11世紀中葉から12世紀中葉頃の範囲で示される。

炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり		
					$\delta^{13}\text{C}$ (%) (AMS)	Libby Age (yrBP)	
IAAA-92239	OIE炭化物-01	遺構:SI-01, 91 層位:4層, D-12	炭化物	AAA	-24.61 ± 0.24	3,620 ± 20	63.74 ± 0.15
IAAA-92240	OIE炭化物-02	遺構:SI-01, 床下土器埋設遺構 層位:覆土	炭化物	AAA	-25.24 ± 0.22	3,660 ± 20	63.44 ± 0.15
IAAA-92241	OIE炭化物-03	遺構:SI-02 層位:覆土, d-11	炭化物	AAA	-23.17 ± 0.17	3,620 ± 20	63.73 ± 0.15
IAAA-92242	OIE炭化物-04	遺構:SI-03 層位:2層(貼床), B-10	炭化物	AAA	-23.06 ± 0.21	2,380 ± 20	74.39 ± 0.17
IAAA-92243	OIE炭化物-05	遺構:SI-04 層位:覆土, C-1	炭化物	AAA	-24.79 ± 0.22	910 ± 20	89.28 ± 0.19

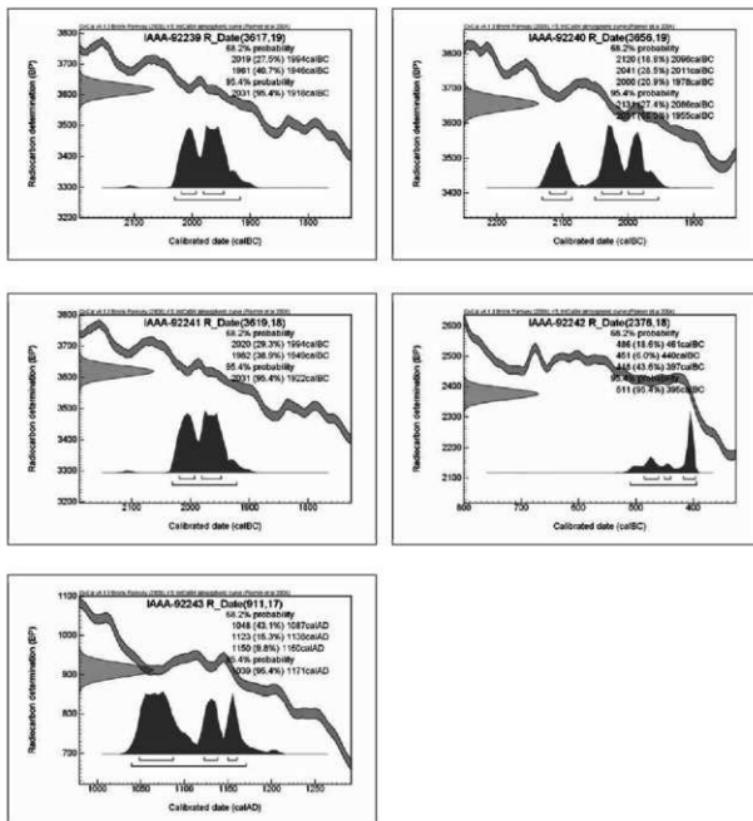
[#3356]

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		層年較正用(yrBP)	1σ 層年代範囲	2σ 層年代範囲
	Age(yrBP)	pMC(%)			
IAAA-92239	3,610 ± 20	63.79 ± 0.15	3,617 ± 19	2019BC - 1994BC (27.5%) 1981BC - 1946BC (40.7%)	2031BC - 1918BC (95.4%)
IAAA-92240	3,660 ± 20	63.41 ± 0.15	3,656 ± 19	2120BC - 2096BC (18.8%) 2041BC - 2011BC (28.5%) 2000BC - 1978BC (20.9%)	2131BC - 2086BC (27.4%) 2051BC - 1955BC (68.0%)
IAAA-92241	3,590 ± 20	63.97 ± 0.14	3,619 ± 18	2020BC - 1994BC (29.3%) 1982BC - 1949BC (38.9%)	2031BC - 1922BC (95.4%)
IAAA-92242	2,340 ± 20	74.69 ± 0.17	2,376 ± 18	486BC - 461BC (18.6%) 451BC - 440BC (6.0%) 418BC - 397BC (42.6%)	511BC - 395BC (95.4%)
IAAA-92243	910 ± 20	89.32 ± 0.19	911 ± 17	1048AD - 1087AD (43.1%) 1123AD - 1138AD (15.3%) 1150AD - 1160AD (9.8%)	1039AD - 1171AD (95.4%)

[参考値]

参考文献

- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3) , 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37 (2) , 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the radiocarbon calibration program, *Radiocarbon* 43(2A) . 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A) , 381-389
- Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46(3) , 1029-1058



[参考] 历年較正年代グラフ

大畠家ノ上遺跡における放射性炭素年代

(AMS 測定)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

大畠家ノ上遺跡は、青森県むつ市大畠町大字二枚橋字釣屋浜、字家ノ上（北緯41° 25' 1"、東經141° 9' 12"）に所在する。測定対象試料は、竪穴住居跡、土坑、焼土跡から出土した炭化物3点（IAAA-101052～101054）である（表1）。

2 測定の意義

住居跡が機能していた年代、フラスコ状土坑が埋没した年代、焼土跡が形成された年代を明らかにする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ビンセットを使い、根・土等の付着物を取り除き、必要量の試料を採取、乾燥させ、秤量する（付表「処理前試料量」）。
- (2) 酸 - アルカリ - 酸（AAA: Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させ、秤量する（付表「処理後試料量」）。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。
- (3) 必要量を採取、秤量（付表「燃焼量」）した試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO_2) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製、定量する。この二酸化炭素中の炭素相当量を算出する（付表「精製炭素量」）。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1 mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした ^{14}C -AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。測定回数と ^{14}C カウント数を付表に示す。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (%) で表した値である（表1）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比は付表に記載する。

- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として過る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が100以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal09データベース (Reimer et al. 2009) を用い、OxCalv4.1較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

6 測定結果

^{14}C 年代は、SI-01炉2出土の1が 3620 ± 20 yrBP、SK-05出土の2が 3800 ± 20 yrBP、SN-01出土の3が 960 ± 20 yrBP である。历年較正年代 (1σ) は、1が $2020 \sim 1950$ cal BC、2が $2281 \sim 2155$ cal BC、3が $1024 \sim 1148$ cal BC の間に各々複数の範囲で示される。1は縄文時代後期前半頃、2は縄文時代後期前葉頃、3は古代に相当する値となっている。

試料の炭素含有率はいずれも60%程度を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表1

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-101052	1	遺構: SI-01, 炉2 層位: 1層	炭化物	AAA	-27.65 \pm 0.23	3620 \pm 20	63.72 \pm 0.15
IAAA-101053	2	遺構: SK-05 層位: 犁土	炭化物	AAA	-29.95 \pm 0.27	3800 \pm 20	62.35 \pm 0.15
IAAA-101054	3	遺構: SN-01 層位: 2層	炭化物	AAA	-18.82 \pm 0.26	960 \pm 20	88.69 \pm 0.18

[#3741]

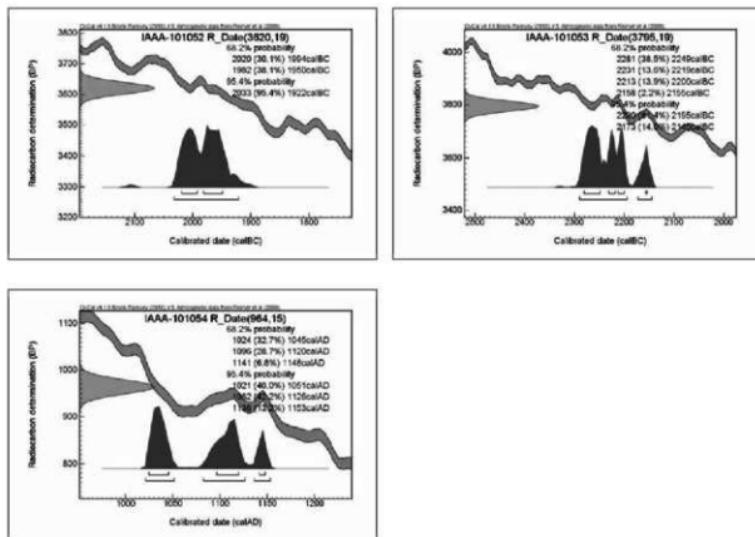
表2

測定番号	$\delta^{13}C$ 補正なし		曆年較正用 (yrBP)	1σ 曆年代範囲	2σ 曆年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-101052	3,660 ± 20	63.37 ± 0.15	3,620 ± 19	2020calBC - 1994calBC (30.1%) 1982calBC - 1950calBC (38.1%)	2033calBC - 1922calBC (95.4%)
IAAA-101053	3,880 ± 20	61.72 ± 0.15	3,795 ± 19	2281calBC - 2249calBC (38.5%) 2231calBC - 2219calBC (13.6%) 2213calBC - 2200calBC (13.9%) 2158calBC - 2155calBC (2.2%)	2290calBC - 2195calBC (81.4%) 2173calBC - 2145calBC (14.0%)
IAAA-101054	860 ± 20	89.82 ± 0.17	964 ± 15	1024calAD - 1045calAD (32.7%) 1096calAD - 1120calAD (28.7%) 1141calAD - 1148calAD (6.8%)	1021calAD - 1051calAD (40.0%) 1082calAD - 1126calAD (42.2%) 1136calAD - 1153calAD (13.2%)

〔参考値〕

文献

- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data. *Radiocarbon* 19(3), 355-363
 Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
 Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP. *Radiocarbon* 51(4), 1111-1150



〔参考〕曆年較正年代グラフ

第2節 大烟家ノ上遺跡出土の火山灰について

弘前大学大学院・理工学研究科
柴 正敏

むつ市大烟家ノ上遺跡より採集された火山灰サンプル2試料について、以下の観察を行った。

これら試料について、超音波洗浄器を用いて水洗し、粘土鉱物など数マイクロメーター以下の粒子を除去した後、偏光顕微鏡を用いて、火山ガラスの有無、火山ガラスが存在する場合にはその形態、構成鉱物の種類を観察・記載した。その結果を以下に示した。

・試料番号1

採取場所：調査区北部基本層序

層位：III

ガラス及び構成鉱物：火山ガラス（塊状、一部軽石型）、斜長石、斜方輝石、ホルンブレンド、
单斜輝石、石英（両錐型）、鉄鉱

その他：プラントオパールを含む

ガラスの帰属：不明

・試料番号2

採取場所：SX-09

ガラス及び構成鉱物：火山ガラス（軽石型及びバブルウォール型）、斜長石、斜方輝石、ホル
ンブレンド、单斜輝石、石英、鉄鉱

ガラスの帰属：洞爺テフラ(Toya)

注) 試料番号2のガラスを、ガラスの形態及び構成鉱物より、洞爺テフラに帰属させた。

より詳細に検討するためにはEPMAなどによってガラスの化学組成を決定する必要がある。

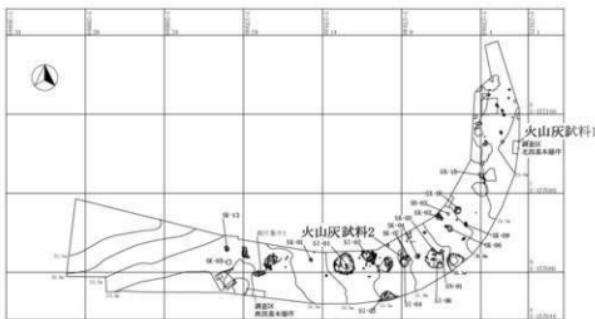
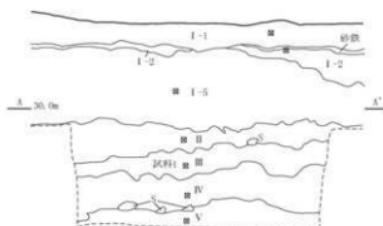


図37 火山灰サンプル採取地点

調査区北部基本層序

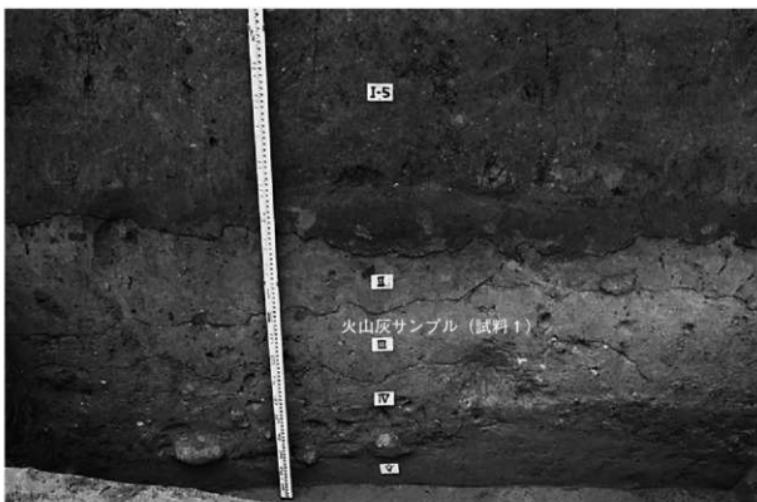
■ 上層サンプル採取位置



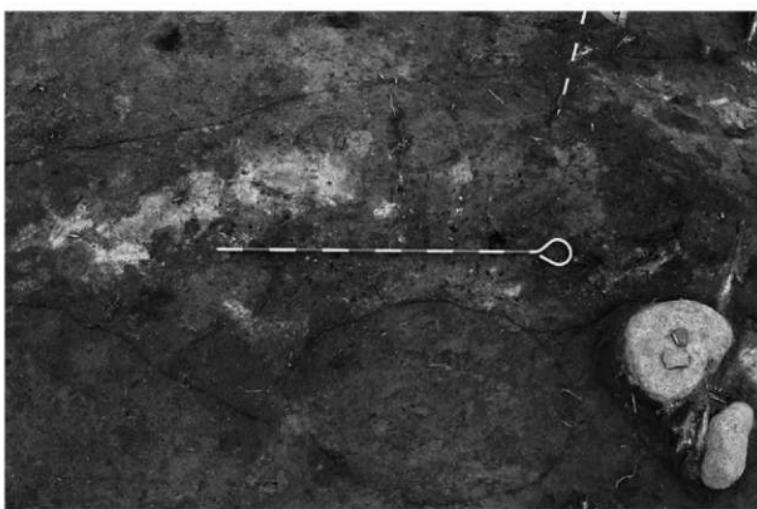
調査区北部基本層序

- I-1層 黒褐色～土褐色(0.1) 黒色ローム粒(0.004±0.0) ±1~5mm25%、上小さなちもろく本空洞の粒が多い。
 I-2層 黒褐色～土褐色(0.008±0.0) 中程度(1.00±2.0) 墓上部に混入、黒褐色上(0.01±0.2)10%、白色浮石±0.1~2mm2%、炭化物粒±1~5mm2%
 I-3層 黒褐色上(0.02±2.0) 黒色ローム(1.00±0.6)2%まろじに混入、炭化物粒±1~5mm2%
 I-4層 上部下部付近に青灰色色がかった周間に株分を含む堆積物堆積するところから原地性の自然堆積層と考えられる
 黑褐色ローム(1.00±0.6)と黒褐色土(1.00±0.1)の層介在、黒褐色上(0.01±0.2)3%、炭化物粒±1~2mm25%、白色浮石±1~2mm1%以下、黒混入
 黑褐色ローム(1.00±0.6) 黑褐色上(0.00±0.3)含、炭化物粒±1~2mm15%
 IV層 黑褐色ローム(1.00±0.6) 小角礫±10~30mm、角礫±100~250mm層全体に混入、炭化物(±1~10mm)15%
 -北側より6.大きめの礫が目立つ
 V層 黃褐色ローム(1.00±0.8) 炭化物±1mm以下1%以下 -薄や他の土壤がほとんど混じらない砂質に近いローム

図38 調査区北部基本層序



調査区北部基本層序 西→



性格不明遺構 9 (SX-09) 確認状況 西→

第3節 大烟家ノ上遺跡出土の炭化種実

佐々木由香・バンダリ スダルシャン（バレオ・ラボ）

1. はじめに

大烟家ノ上遺跡は青森県むつ市大烟町に位置し、津軽海峡に面した標高約29～33mの海岸段丘上に立地する、縄文時代後期前葉を主体とした集落遺跡である。ここでは後期前葉の堅穴住居跡から得られた炭化種実の同定を行い、利用植物について検討した。なお、炭化種実を用いて放射性炭素年代測定が行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

2. 試料と方法

試料は、E-11グリッドSI-02から出土した1試料である。時期は出土土器型式から縄文時代後期前葉十腰内1式期とされている。住居跡の覆土の2～3層中に面的に広がって炭化種実が散在していた。

試料は床面近くの炭化種実を多く含む土壤から土嚢袋で1/4程度の量を回収後、約1000gが水洗選別され、種実などが抽出済みの試料で、数100枚（重量43.9g）が一括してあった。試料の採取と、水洗、分類までの作業は青森県埋蔵文化財調査センターによって行われた。水洗は2.0mmと0.5mm目の篩を用いて行われた。

計数の方法は破片個体が多いため、完形個体の重量から重量換算個体数を求めた。試料は青森県埋蔵文化財調査センターに保管されている。

3. 結果

同定した結果、木本植物では広葉樹のクリ炭化果実と炭化子葉の1分類群が見いだされた（表1）。ほとんどは子葉の破片であり、乾燥重量で41.2gであった。完形個体は5個体含まれていた。このほかに状態が悪く科以下の同定が不能であった同定不能炭化種実と虫えいがわずかに得られた。炭化材片も少量含まれていたが、検討の対象外とした。

また、生のタニソバ果実が得られたが、本遺跡の立地では当時の生の種実は残存しないと判断されるため、後世のものとして検討の対象外とした。

以下に炭化種実の記載を行い、図版1に写真を示して同定の根拠とする。

(1) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. 炭化果実・炭化子葉 プナ科

果実は完形ならば側面は広卵形。表面は平滑で縦に細く浅い筋がみられる。殻斗着痕は果実幅と同じ程度の幅広になり、不規則で微細な丘状の突起が密にある。残存長4.0～6.0mm、残存幅2.8～3.8mm。子葉の側面は広卵形。表面全体に縦方向のしわ状の溝がある。しわ以外の面は平坦でやや光沢があり、硬質。長さ9.3～12.3（平均11.0）mm、幅10.8～13.2（平均11.8）mm、厚さ4.5～9.5（平均6.6）mm、重量0.43～0.44g。

表1 大烟家ノ上遺跡から出土した炭化種実（括弧は破片を示す）

分類群	部位 / グリッド	遺構	
		E-11	SI-02
クリ	炭化果実		(2)
	炭化子葉	94 個	41.2g
タニソバ	果実		(1)
同定不能	炭化種実		(3)
虫えい			(3)

※重量換算個体数

4. 考察

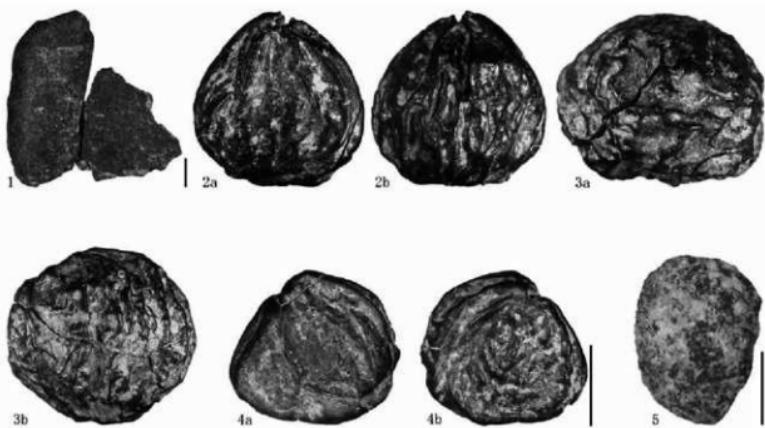
SI-02から出土した炭化種実を同定した結果、木本植物で生食可能なクリが重量換算個体数で94点得られた。同住居跡から出土した炭化物（IAA-92241）の放射性炭素年代測定結果によれば、 2σ の曆年代範囲で2031-1922 cal BC (95.4%) となり、縄文時代後期前葉を示した（放射性炭素年代測定の項参照）。

十和田市の明戸遺跡では、第1次調査の縄文時代中期初頭の円筒上層a式期の住居跡2棟からオニグルミ核とコナラ属の1種の子葉、炭化クリ子葉、トチノキ種子が同定されている（渡辺、1983）。渡辺は完形のクリ子葉557点の計測値が長さ0.8～1.8cm（平均1.27cm）、幅0.9～2.0cm（平均1.39cm）、1個体の平均重量が0.6gであると報告した。第3次調査では中期初頭の円筒上層a式期のフラスコ状土坑（第3号土坑）出土の種実を同定した結果、オニグルミ炭化核とクリ炭化果実・炭化子葉の2分類群が産出し、クリ子葉完形の大きさは長さ11.0mm、幅11.0mmであった（佐々木・パンダリ、2009）。県道戸来十和田線凍雪害防止事業に伴う明戸遺跡の調査では、中期初頭の円筒上層a式期のSK03から完形のクリ子葉が産出し、完形の大きさは長さ14.3mm、幅14.0mm、厚さ7.5mm、重量は0.61gで、第1次調査の平均値とほぼ同じであった（佐々木・パンダリ、2010）。今回は完形5点の平均値が長さ11.0mm、幅11.8mm、厚さ6.6mm、重量0.43～0.44gと、明戸遺跡の第3次調査に近く、小振りであった。

クリはほとんどが食用部位である子葉であったが、わずかに果実が含まれていた。果皮は炭化や水洗過程で外れやすいことから、本来は果実であった可能性がある。子葉の状態で炭化したのであれば、加工・調理過程での炭化、果実ならば、保管されていたものが何らかの要因で被熱し炭化した可能性がある。あるいは祭祀など非日常的な要因による炭化などの可能性もある。発掘調査の所見から、炭化種実は覆土の上層にも少量含まれていた。住居跡が焼失住居であったかは不明であるが、棚などに貯蔵されていたものが落下して炭化したか、あるいは住居跡の埋没段階で住居跡の外から炭化したクリが廃棄された可能性がある。通常、青森県内の中期以降の住居跡で大型の堅果類が産出する場合は、青森市三内丸山遺跡第683号住居跡（中期末葉）のようにクリとオニグルミ、トチノキなど複数の食用可能な種実が産出することが多いが（吉川、2005）、本住居跡からはクリのみであった。

引用文献

- 佐々木由香・パンダリ スダルシャン（2009）明戸遺跡3次発掘調査から出土した炭化種実、十和田市教育委員会生涯学習課編「明戸遺跡Ⅲ－県道戸来十和田線凍雪害防止工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」：49-51、十和田市教育委員会。
- 佐々木由香・パンダリ スダルシャン（2010）明戸遺跡出土の炭化種実、青森県埋蔵文化財調査センター編「明戸遺跡・高屋遺跡」：153-161、青森県教育委員会。
- 吉川純子（2005）三内丸山遺跡第683号住居跡より出土した炭化種実、青森県教育庁文化課編「三内丸山遺跡29」：195-199、青森県教育委員会。
- 渡辺 誠（1983）青森県十和田市明戸遺跡の植物遺体、十和田市教育委員会編「明戸遺跡発掘調査報告書」：87-90、十和田市教育委員会。



図版1 大畠家ノ上遺跡 SI-02から出土した炭化種実

1. クリ炭化果実、2-4. クリ炭化子葉、5. 虫えい

第4節 大烟家ノ上遺跡出土土器付着赤色顔料の蛍光X線分析

竹原弘展（パレオ・ラボ）

1. はじめに

大烟家ノ上遺跡より出土した土器に付着する赤色顔料について蛍光X線分析を行い、組成を検討した。

2. 試料と方法

分析対象資料は、縄文土器3点に付着する赤色顔料である。セロハンテープに資料の赤色部分を極少量採取して分析試料とした。試料採取位置を図版1左段写真に白丸印で示す。

分析装置はエネルギー分散型蛍光X線分析装置である（株）堀場製作所製分析顕微鏡 XGT-5000Type II を使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV・1mA のロジウムターゲット、X線ビーム径が $100\mu\text{m}$ または $10\mu\text{m}$ 、検出器は高純度 Si 検出器（Xerophy）である。検出可能元素はナトリウム～ウランであるが、ナトリウム、マグネシウムといった軽元素は蛍光X線分析装置の性質上、検出感度が悪いため、試料中に少量含む程度ではピークを検出し難く、検出できてもその定量値はかなり誤差が大きい。

本分析での測定条件は、50kV、0.50 ~ 0.94mA（自動設定による）、ビーム径 $100\mu\text{m}$ 、測定時間 500s に設定した。定量分析は、標準試料を用いないファンダメンタル・バラメータ法（FP 法）による半定量分析を装置付属ソフトで行った。そのため、定量値の誤差は大きい。

また、蛍光X線分析で作成した試料を観察試料として、生物顕微鏡で赤色顔料の粒子形状を確認した。

3. 結果

分析により得られたスペクトルおよび FP 法による半定量分析結果を図 1 に示す。

いずれの試料からも鉄（Fe）が高く検出された。他に、アルミニウム（Al）、ケイ素（Si）、リン（P）、硫黄（S）、カリウム（K）、カルシウム（Ca）、マンガン（Mn）などが検出された。

また、生物顕微鏡観察により得られた画像を図版1右段に示す。いずれの試料からも赤色パイプ状の粒子が観察された。

4. 考察

縄文時代に使用されていた赤色顔料としては、朱（水銀朱）とベンガラが挙げられる。水銀朱は硫化水銀（HgS）で、鉱物としては辰砂と呼ばれ、産出地はある程度限定される。ベンガラは狭義には三酸化二鉄（ Fe_2O_3 、鉱物名は赤鉄鉱）を指すが、広義には鉄（Ⅲ）の発色に伴う赤色顔料全般を指し（成瀬、2004）、広範な地域で採取可能である。また、ベンガラは直径約 $1\mu\text{m}$ のパイプ状の粒子形状からなるものが多く報告されている。このパイプ状の粒子形状は鉄バクテリアを起源とすることが判明しており（岡田、1997）、含水水酸化鉄を焼いて得た赤鉄鉱がこのような形状を示す（成瀬、1998）。

いずれの試料もケイ素など土中成分に由来すると考えられる元素は検出されたものの、水銀は検出

されなかった。鉄が高く検出されていることから、赤い発色は鉄によるものであると推定できる。すなわち、顔料としてはベンガラにあたる。さらに、全試料よりパイプ状の粒子が検出されたことから、鉄バクテリアを起源とする、いわゆるパイプ状ベンガラであったといえる。

5. おわりに

土器に付着する赤色顔料について分析した結果、いずれの試料からも鉄が多く検出され、鉄（Ⅲ）による発色と推定された。パイプ状の粒子が確認されており、いわゆるパイプ状ベンガラであると考えられる。

引用文献

成瀬正和(1998)縄文時代の赤色顔料 I - 赤彩土器 -. 考古学ジャーナル, №438, 10-14, ニュー・サイエンス社.

成瀬正和(2004)正倉院宝物に用いられた無機顔料. 正倉院紀要, 第26号, 13-61. 宮内庁正倉院事務所.

岡田文男(1997)パイプ状ベンガラ粒子の復元. 日本国文化財科学会第14回大会研究発表要旨集, 38-39.

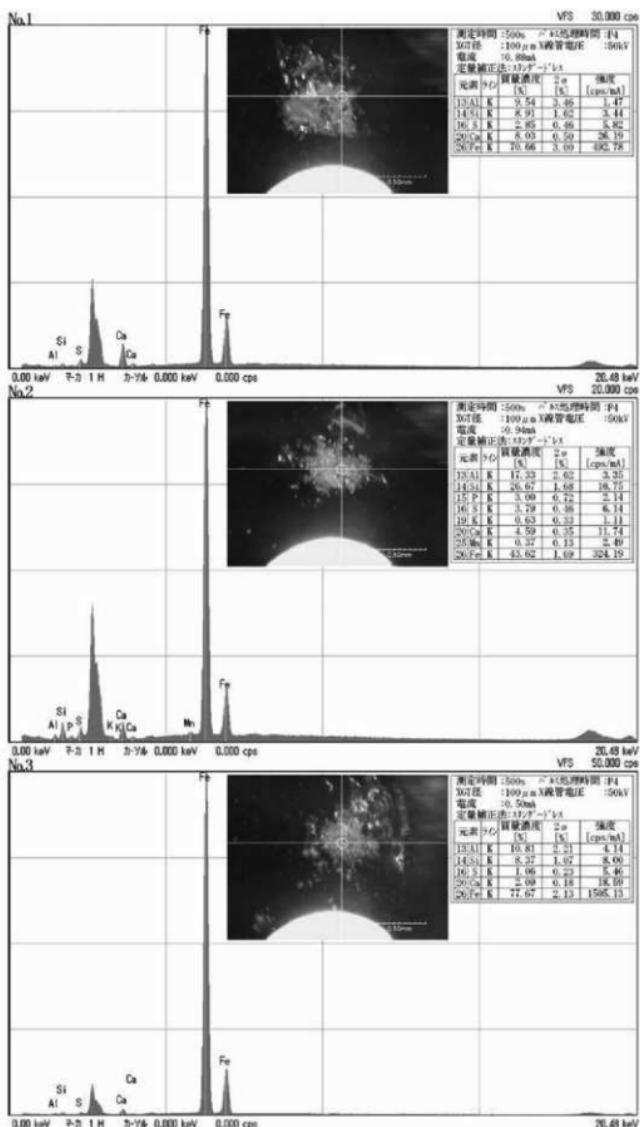
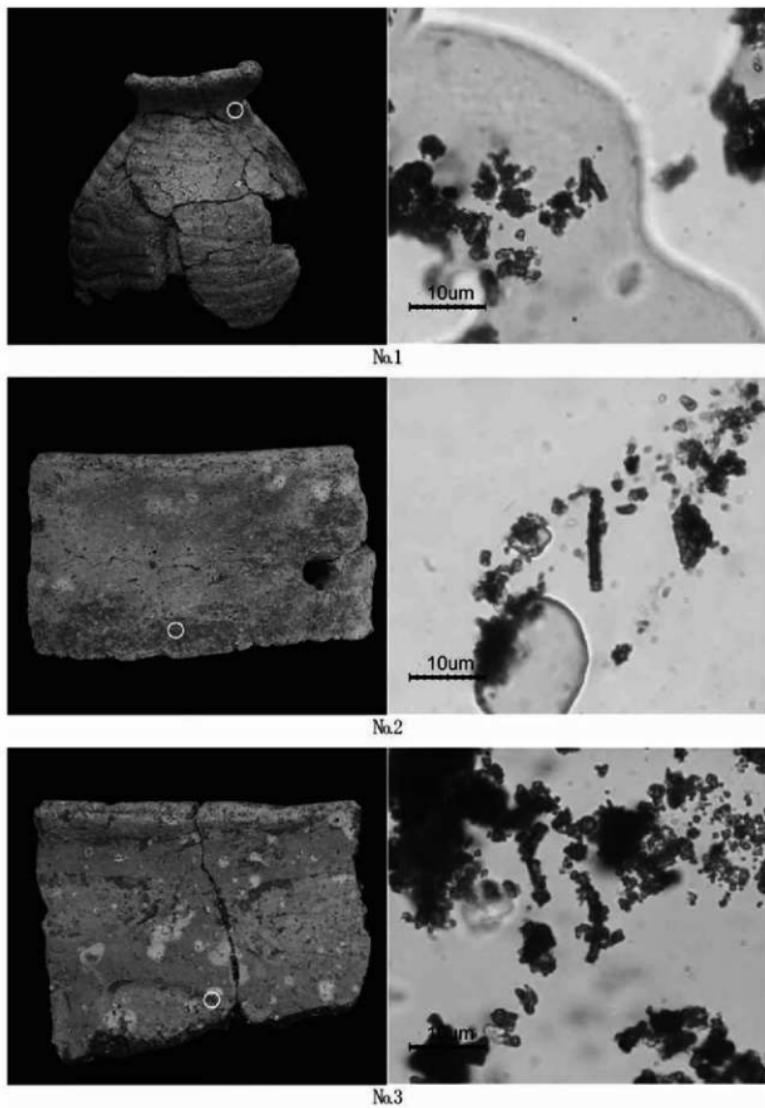


図 1 蛍光 X 線分析結果



図版 1 分析対象資料および生物顕微鏡写真

第5章 考察

第1節 下北地域における縄文時代後期初頭から前葉の土器の特徴

本州最北端に位置する下北地域は、津軽海峡を挟んで北海道と対面しており、縄文時代においても相互に文化的交わりの動向が窺われる。北日本の縄文文化の様態を解明する一助として、下北地域の縄文時代後期初頭から前葉期に位置づけられる土器について概観し、その特徴についてまとめる。

【後期初頭の土器】(図40・図41)

下北地域の縄文時代後期初頭に位置づけられる土器の特徴としては、東北北部の牛ヶ沢式、上村式などに相当する土器群、および弥栄平式、沖附式、馬立式、螢沢式などに相当する土器群が出土しており、東北北部における当該期の土器と比較し、器形・文様などの属性要素が概ね合致している。北海道との関連を挙げるとすれば、牛ヶ沢式に相当する土器群として捉えられてきたものの中に、縄文原体の側面圧痕文の要素が認められる土器が含まれている点である（青森県教委1984）。ただし、現在のところ多くは破片資料であり、全体像を把握できる資料に欠けている。

器種には深鉢形土器と壺形土器などがある。壺形土器には、大型の壺棺土器や焼成前に切断されているものなどがある。深鉢形土器の器形は、頸部が屈曲し、口縁部が内湾気味に開いているもの（図43深鉢A）、頸部がわずかにくびれ、口縁部が外反しているもの（図43深鉢D・E）、胴部が直線的で口縁部が外反あるいは内湾しているもの（図43深鉢B・C）などが認められる。口縁部の形状は、平口縁と小山形状の波状口縁とが認められ、折り返し状の肥厚口縁（図41-29・30・38）などもある。壺形土器は、胴部下半に最大径が認められるものが多い（図41-24・35・36）。

下北地域の牛ヶ沢式、上村式に相当する土器群（図40）は、最花貝塚、大湊近川遺跡、田ノ沢遺跡、高野川（3）遺跡などで出土している。口縁部に隆帯文および胴部に磨消縄文が認められるもの（1～30）と、口縁部に縄文原体の側面圧痕文および胴部に地文縄文が認められるもの（31～51）などがある。口縁部の文様帶は、口縁部や頸部に沿うかたちで隆帯文や縄文原体の側面圧痕文により横位に区画されており、区画内にはいくつかの単位文様が施文されている。隆帯文の口縁部文様には垂下文（図43）が認められ、直線的に垂下しているもの（1・9～12・20・21・24～27）や蛇行して垂下しているもの（2・30）がある。横位区画隆帯と垂下状の隆帯が交わる箇所や口縁部頂部下には、円環状（1～3・9・10）、ボタン状（21・27）、満巻状（29）、弧状（24）の隆帯が貼り付けられているものもある。隆帯上には、縄文原体の回転施文が認められるものが多いが、側面圧痕文が認められるもの（24～26）もある。縄文原体の側面圧痕文の口縁部文様には平行状（図43）の文様が認められ、横位に平行しているもの（33～38・40・43）や斜位に平行しているもの（31・39・44・47）などがある。胴部の文様は、細い沈線により波頭状（19・29）などの文様が施文されているようであるが、破片資料のため不明な部分が多い。今回の大烟家ノ上遺跡の調査では、口縁部に沿って縄文原体の側面圧痕文が3条認められる深鉢形土器片が出土している。

弥栄平式、沖附式、馬立式、螢沢式に相当する土器群（図41）は、尾野崎遺跡、家の上遺跡、外崎沢（1）遺跡、大湊近川遺跡、川代遺跡などで出土している。地文縄文に太い沈線で三角形文、波頭文などを

組み合わせた文様が施文されているものが多い。口縁部には、波頂部下などにボタン状の粘土の貼り付けによる装飾が認められるもの（27・29・32・33）や、口縁部に沿って刺突列が認められるもの（6）などがある。三角形区画文の内部に充填されている文様は、鈴木克彦氏による馬立式の文様解析（鈴木2001）の内、波頭文、巴文、蛇行文、弧状文などに相当するものと考えられる（図43）。一方、磨消繩文と方形文の文様要素が主体的に認められる土器（29～31・38）は、三角形区画文が認められる土器と比較し、まとまった資料が出土していないのが現状のようである。大型の壺形土器の胴部には、方形の区画隆帯の内部に渦巻状の文様が施文されている（35～37）。

【後期前葉の土器】（図42）

下北地域の縄文時代後期前葉に位置づけられる土器の特徴としては、東北北部の十腰内I式土器の属性要素と合致している点が多い。

器種には深鉢形土器、鉢形土器、浅鉢形土器、壺形土器などがある。深鉢形土器の器形は、頸部がわずかにくびれ、口縁部が外反しているもの（図43深鉢D・E）、胴部が直線的で口縁部が外反あるいはわずかに内湾しているもの（図43深鉢B・C）などが認められる。後期初頭にみられた頸部が屈曲し、口縁部が内湾気味に開いているもの（図43深鉢A）は、ほとんど認められない。口縁部の形状は、平口縁と波状口縁とが認められ、折り返し状の肥厚口縁（21）などもある。また、口唇部には8の字状の粘土紐の貼り付け（3）、刻目（31・32・35・36・40）などにより装飾が施されているものもある。壺形土器の器形は、平口縁で胴部中位から上半に最大径が認められるものが多いようである（33・41・44・46）。

十腰内I式の直前段階に位置づけがなされる薬師前式（鈴木2001）、小牧野3期（児玉1999、葛西2002）、前十腰内I式（成田2002）などに相当する土器群、および十腰内I式の古相に相当する土器群は、

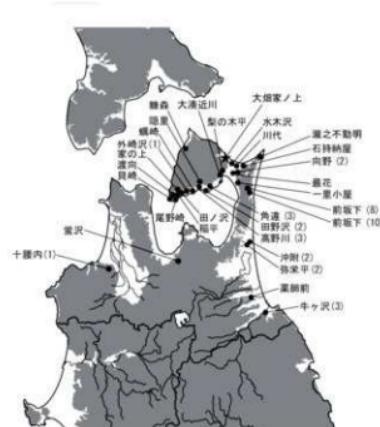
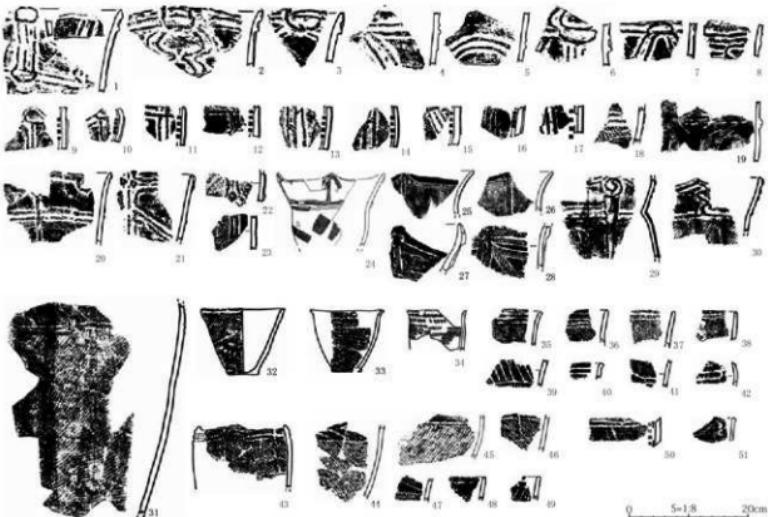


図39 関連遺跡位置図

下北地域においては破片資料がほとんどで、文様モチーフの全容が読み取れる資料が少ない。口縁部から頸部にかけての文様は、沈線や隆沈線により円形文、長楕円形文などが施文されているもの（1・3～5・9・17・19・21・23）や、口縁部に沿う数条の平行沈線間に弧状の沈線文が施文されているもの（15・30）などがある。胴部の文様は、2～3条単位の沈線により、S字状文、弧状文、入組波状文などの単位文様を組み合わせて施文されているものが多い（3・4・16・17・20・21・24）。その他、格子状の沈線文、網目状の撚糸压痕文が施文されているもの（8・15・23）や、地文繩文のみのものなども、各遺跡において出土している。また、鉢形土器あるいは浅鉢形土器の底部には、同心円状の沈線文が認められるものもあり、外崎沢（1）遺跡、隱里遺跡などで出土している。

十腰内I式の新相に相当する土器群は、糠森遺跡、外崎沢（1）遺跡、角違（3）遺跡、瀧之不動明遺跡などで出土している。深鉢形土器には、胴部上半が膨らみ、口縁部径よりも胴部径が大きいものも認められるようである。また、口縁部は無文で、胴部の文様帯は胴部中位から上半にかけて形成されているものが多いようである（葛西1979）（図43深鉢E）。胴部の文様は、沈線や櫛齒状の条線により、波状文（35・45・54・55）、三角形文（51・52・56）、花弁状文（31・32）、菱形文（26）、クランク状文（30・36・37）、鍵状文などの単位文様が施文されているものが多い。中でも、鍵状文は東北部においても僅かに散見されるようであるが、北海道の大津式を特徴づける単位文様の一つとして



1～8. 篠貝塚 9～17.50. 水木沢遺跡 18. 11～49. 菊田遺跡 19. 川代遺跡 20～23.33～42. 大池近川遺跡 24. 高野川（3）遺跡 25～28. 糠森遺跡
29～32. 三ノ沢遺跡 43. 尾野崎遺跡 51. 日崎遺跡

図40 下北地域出土土器（1）

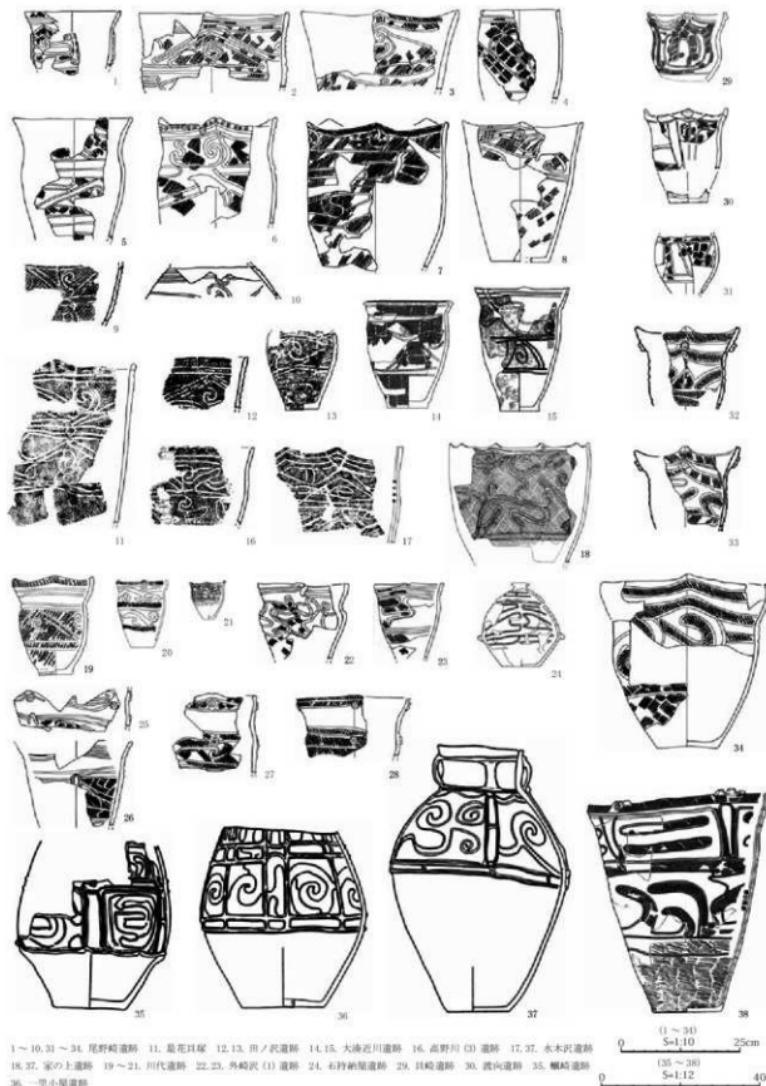


図41 下北地域出土土器（2）



1～8. 向野(2) 遺跡 9. 田野沢(2) 遺跡 10～15. 梶の木平遺跡 16. 32. 55. 犬之不動町遺跡 17～21. 25～34. 雜森遺跡
23. 前坂下(10) 遺跡 22. 35～44. 外崎沢(1) 遺跡 23. 46～49. 家の上遺跡 45. 西向遺跡 50. 51. 54. 稲平遺跡 53. 前坂下(8) 遺跡 56. 角鹿(3) 遺跡

図42 下北地域出土土器（3）

挙げられる。鍵状文の典型的な単位文様は、28・33の土器に認められるものであるが、平行沈線間に單線のクランク状の文様が認められるもの（29・41・47～49）とネガ・ポジの関係にあるようにも思われる。鍵状文が施文されている土器は、東北北部では津軽半島や下北地域において出土頻度が高いようである（脇野沢村1979）。図示していないが、隠里遺跡（川内町史2005寺田徳穂墓集遺物）などでも出土しているようである。

以上のように、下北地域の縄文時代後期初頭から前葉にかけての土器の特徴としては、概ね東北北部の当該時期に位置づけられてきた土器の範疇で捉えられそうである。ただし、後期初頭の土器については、口縁部に隆唇文および胴部に磨消繩文が認められる一群と、口縁部に縄文原体の側面圧痕文および胴部に地文繩文が認められる一群がある。東北北部においては、これらに加えて、口縁部に縄文原体の側面圧痕文および胴部に磨消繩文が認められるものや、縄文原体側面圧痕による鋸歯状の単位文様が施文されているものなどが多く出土しており、より多様な様相が窺える。また後期前葉の土器については、大津式に特徴的な鍵状文が施文されている土器が一定量認められる。今後、下北地域における当該時期の土器の特徴をより具体的に抽出するには、東北北部から北海道にかけての資料との比較検討が課題である。

(最上)

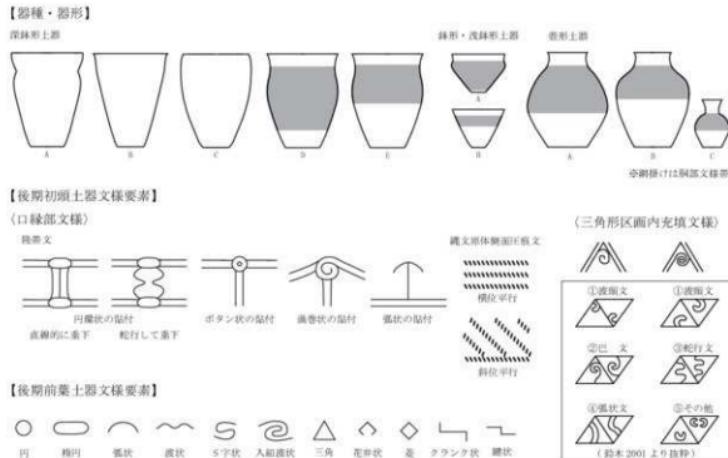


図43 下北地域出土土器の器形・文様模式図

第2節 大烟家ノ上遺跡出土礫器の特徴（図44・45）

遺跡を時間的・空間的な考古学的脈絡上に位置づけていく作業は、他遺跡との考古学的情報と比較し、類似点・相違点を見つけていくことである。その作業を行っていく上で、その遺跡だけに特徴的な遺物が存在する場合がある。そのような遺物は、遺跡の特徴をよく表しているものと思われる。

大烟家ノ上遺跡で出土している礫器としたものは、本遺跡の特徴を示す遺物であると推測される。剥離作業によって、川原石などの原石に整形を施したもので、原石の一部に刃部を作出するものとそうでないものがある。刃部以外は自然面を多く残すことも特徴である。

本遺跡で、このような礫器は8点出土している。以下、本遺跡で出土した礫器の特徴をとらえてみたい。

刃部には加撃によってつぶれたり、細かな剥離痕の観察される箇所がある。このような痕跡が残されるには、ある程度硬いものに打ち付けた可能性が高い。

石材は、図44-5がデイサイト製であるほかは、すべて花崗閃緑岩である。

1点を除き、すべて遺構外出土で、調査区内における出土位置にかたよりはみられない。

おもに片面に集中して剥離が行われ、刃部が作出されている。刃部はV字状に作出されており、刃部すべての縁辺部を使用しているわけではなく、V字状の端部を主に使用目的としているようである。よって、この礫器の使用方法は、加撃痕と刃部の形態から刃部の尖った部分を打ち付けるようなものであったことが推測される。

本遺跡では打製石斧と思われるものが1点しか出土していないことから、これら礫器が打製石斧の役割を補なっていた可能性も考えられる。

（岩田）



図 44 碓器 (1) (再掲)

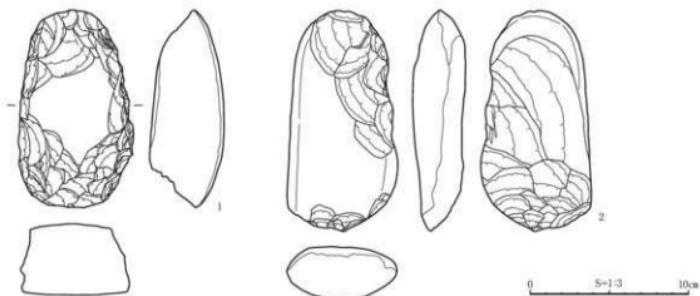


図45 碓器(2) (再掲)

第3節 土器埋設遺構について (図46～48)

大畑家ノ上遺跡、第1号住居跡からの硬化面下(床下)から縄文時代後期前葉の台付鉢と自然砾2点、敲磨器類1点が埋められた状態で発見された。この遺構の上には大きな石が置かれていたと思われる状況が確認されることや、硬化面下から出土したという状況から、意図的に埋められたものであることはほぼ疑いないため土器埋設遺構として報告した。しかし、石が置かれていたという状況は、報告書作成時図面作成の際に結果的に分かったことであるため、現場で実際に確認しているわけではない。

長径30cm、短径25cmの掘り込みに台付鉢が逆位に設置され、鉢の東側には土器に沿わせるように自然砾と敲磨器が2個置かれ、土器の下にはさらにもう1個の自然砾が置かれた状態で確認された。台付鉢内には土が残っていたが、炭化物などの混じりがほとんどない土であった。上述したように発見状況から、これらの遺物は意図的に埋められたことは確実であるため、さまざまな角度からこの遺構を検討してみたい。

大畑家ノ上遺跡で発見された土器埋設遺構は、住居が機能していた際に形成されたと思われる硬化面下から出土しているということから、この第1号住居跡が使用される前かその住居使用時に埋められたものという可能性が高い。また埋設遺構上には意図的に石が蓋のように置かれていることから、住居使用時にはその存在が認識されていた可能性が高いということが指摘できる。しかし、土器内には混じりのない土が詰まっており、収蔵された遺物は確認されなかった。もし、有機物であれば残存していなかつたということになる。土器内ではないが、土器下と脇には自然砾と敲磨器が設置してあった。この状況の具体的な意味を考察する術はないが、何らかの儀式的な遺構であることをうかがわせる。

埋設されていた土器は、十腰内I式の台付鉢である。二つの波頂部をもち、沈線で入組状の渦巻文様を4ヶ所に表している。沈線間にはL回転縄文を施している。4つの文様はそれぞれ微妙に表現を変えており、その下の文様もそれぞれが微妙に異なる。あたかも人間の男女を2人ずつ様式化し文様表現にしているようでもある。底部は欠損しているが、埋設する際に意識的に打ち欠いたものか、



図46 関連遺跡位置図

欠損した土器を埋設に使用したのか両方の可能性が指摘できる。

下と脇に設置されていた自然礫と敲磨器はすべて安山岩である。S-1は土器下に置いてあったもので白っぽくすべすべしているが、使用痕などは確認されない。S-2、S-3は土器の横に並んで設置してあったものである。S-2は灰色でざらざらしており、使用痕などは確認されない。S-3は黒っぽくざらざらしており、敲打痕が数カ所にみられる。

本遺構が位置する箇所は第1号住居跡の北西部である。北東部のPt31,32,33,34,35,36を入口の遺構と考えるならば、ちょうど入口から住居跡の長軸上に位置している。

このような縄文時代の住居内埋設遺構は、青森県においては成田滋彦氏によって集成・考察されている（図48）（成田 1998）。

縄文時代の住居内にある埋甕は、胞衣埋納（胎盤収納）や乳幼児・死産児埋葬と関連づけられて論じられることが多い。胞衣埋納遺構は、出産の後排出される胎兒を包む羊膜、卵膜、胎盤のことを指す「胞衣」を容器などに入れ、土中に埋めた痕跡のことという。乳幼児・死産児埋葬は、幼くして死んだ子供や死産した子供を埋葬するものである。

青森県において、住居内に設置された埋甕遺構を大烟家ノ上遺跡とほぼ同じ時期である十腰内Ⅰ式期の他遺跡の類例を集めてみた（図48）。埋甕のみられるものは3遺跡、5例であり、その数は少ないといつてよいだろう。土器内部から遺物が発見されることではなく、田面木平（1）遺跡で灰白色粘土が混入していたのみである。大烟家ノ上遺跡の場合も、混じりけのない褐色粘質土が発見されるのみであった。

土器の置き方では、大烟家ノ上遺跡は逆位で設置してあったが、他遺跡において明確に逆位で設置してあることが分かるのは上尾駆（2）遺跡のみである。また大烟家ノ上遺跡のように、礫石器類と一緒に埋められている例はない。

埋設されている土器の器種は、深鉢が4点で、壺形土器1点である。大烟家ノ上遺跡は台付鉢である。

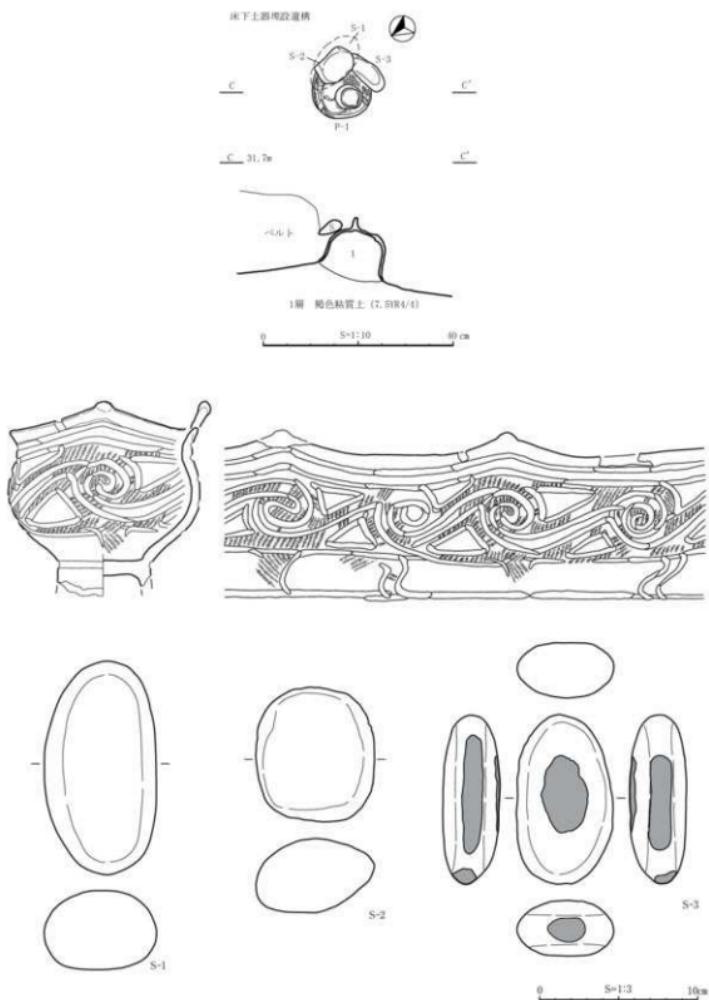


图47 第1号住居跡 床下土器埋設遺構（再掲）

埋設されている位置に関しても、その場所を具体的に確定できる上尾駿（2）遺跡では、出入口近くであるほかは出入口が分からぬいため、壁際が多いという傾向だけが指摘できる。大烟家ノ上遺跡の場合は、出入口部分が第1号住居跡の南東側にあることがピットの形態と配置から推測されているため、出入口とは反対の住居奥の壁際には位置している可能性が高い。

大烟家ノ上遺跡の埋設遺構のみが、埋設遺構上に石蓋のような川原石が設置されている。

今までみてきた住居内埋設遺構とは別に容器内に遺物の発見される遺構がある。埋納遺構（デボ）とされているもので、これらの遺構からは、磨製石斧や貝輪、黒曜石、アスファルト等が出土している。青森県で埋納遺構（デボ）とされているものは、現在までに2遺跡で確認されている。八戸市篠子（4）遺跡と三沢市小田内沼遺跡である。いずれも十腰内I式期であり、大烟家ノ上遺跡と同時期の遺跡である。

篠子（4）遺跡では、十腰内I式土器の中に緑色凝灰岩製の定角式磨製石斧が3点入れられた状態で発見されている。小田内沼遺跡では、石器を入れた掘りこみは確認されていないが、定角式磨製石斧7点を中心とする搔器や凹刃削器、石範等が折り重なって発見されている。

大烟家ノ上遺跡で発見された土器埋設遺構では、土器内部には土のみ確認され、埋納遺構に共通してみられる価値があると思われる遺物の出土は確認されなかった。土器の外側にあった敲磨器や自然礫は、他の礫石器と比較しても特別なものとは思われない。よって大烟家ノ上遺跡の土器埋設遺構は、埋納遺構に類したものではないと推測される。また一方で埋甕に類似したものかといえば、積極的に支持する根拠はない。

第1号住居跡で発見された埋設遺構についてみてきたが、土器内から何も出土しないことから、何の用途で設置されたものであるのかは確定しがたい。しかし、消極的な根拠ではあるが、出土位置や出土状況から、従来いわれているように乳幼児・死産児埋葬、胞衣埋納などと推測することは可能であろう。大烟家ノ上遺跡の埋設遺構は、土器下や土器の側に礫石器類があったことや上部に石蓋のようなものがあったことから、何かを封じ込めようとしている意図があったのではないかという推測も成り立つ。逆位に台付鉢が置かれているのも、一種の封じ込めの意味合いが込められているものかもしれない。

（岩田）

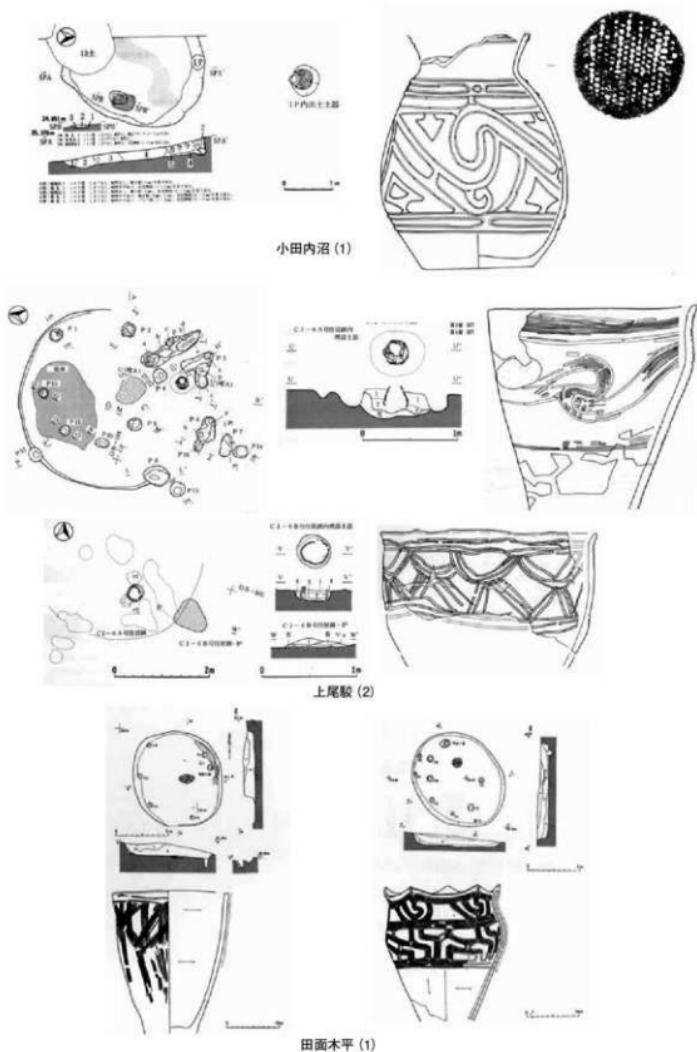


図48 青森県における住居内埋設土器

第6章 まとめ

大畠家ノ上遺跡には、出土遺物の様相から縄文時代後期前葉ごろに集落跡が形成されていたことが推定される。また覆土から、縄文時代中期末葉の深鉢を出土するフ拉斯コ状土坑が発見されていることから、当該時期にも本遺跡において人間が活動していたことが分かる。

(出土遺物)

土器は、縄文時代中期末葉から後期前葉に位置づけられるものが出土したが、主体は後期前葉の十腰内I式である。石器は、剥片石器では不定形石器が多くを占め、定型的な石匙等の出土は少なかつた。礫石器では、タタキやスリの痕跡がみられる敲磨器類が最も多いが、礫器が一定量確認されている。

(住居形態)

本遺跡は黒色土が発達していなかったために、調査時における遺構の確認作業や精査に手間取り、住居跡の認定が困難なものもあった。比較可能な数ではないと思われるが、本遺跡での住居跡の特徴を以下にまとめてみる。

第4号住居跡を除いた他の4軒の住居跡は柱穴が壁際を巡る特徴がないだされる。また、そのプランは整った円形を呈しておらず、第1号、第2号、第6号住居跡などは、数ヶ所に角をもつ構造を示すことを指摘できそうである。第4号住居跡は他の住居跡に比して深く、長方形プランを呈しているため、集落内での住居跡に付された用途が異なっていた可能性がある。

本遺跡南東には大畠川を挟んで、後期後葉に位置づけられる水木沢遺跡が存在する。水木沢遺跡の住居形態は、主柱穴が台形配置になる住居跡が多く発見されている。本遺跡より少し後の時期に位置づけられるため、住居形態の変容を考える上で興味深い比較が可能であると思われる。

(土器埋設遺構)

第1号住居跡の床下からは、土器と礫石器類が出土した。土器は逆位で口縁部下に礫がひとつ置かれ、他の2個の敲磨器類と自然礫は、土器の胴部にもたれかけさせるように配置されていた。土器は十腰内I式の台付鉢である。台部は打ち欠かれて大部分が欠損している。土器内には土が存在したが、土以外は何も発見されなかった。詳細は第5章第3節を参照されたい。

(岩田・最上)

参考文献

- 青森県教育委員会1976「木本沢遺跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財調査報告書第34集
- 青森県教育委員会1982「下北地点原子力発電所建設予定地内埋蔵文化財試掘調査報告書」青森県埋蔵文化財調査報告書第71集
- 青森県教育委員会1983「下北地点原子力発電所建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財調査報告書第75集
- 青森県教育委員会1983「青森県の中世城館」青森県文化財調査報告書
- 青森県教育委員会1984「弥栄平遺跡（2）発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財調査報告書第81集
- 青森県教育委員会1984「牛ヶ沢（3）遺跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財調査報告書第86集
- 青森県教育委員会1986「沖附（2）遺跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財調査報告書第101集
- 青森県教育委員会1987「大湊近川遺跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財調査報告書第104集
- 青森県教育委員会2008「水上遺跡Ⅱ」青森県埋蔵文化財調査報告書第452集
- 青森県教育委員会2009「青森県遺跡地図」
- 青森県立郷土館1988「むつ市角道（3）遺跡発掘調査」「青森県立郷土館調査研究年報」第12号
- 青森市教育委員会1979「蟹沢遺跡発掘調査報告書」
- 青森市教育委員会1996「小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅰ」
- 大沼忠春1981「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」「考古学雑誌」66-4: 71-79
- 大畑町教育委員会1977「涌館遺跡試掘調査報告書」大畑町埋蔵文化財調査報告第1集
- 大畑町教育委員会1991「大安寺遺跡（経塚）発掘調査報告書」大畑町文化財調査報告書第7集
- 大畑町教育委員会1996「大畑町の文化財マップ」大畑町文化財調査報告書第10集
- 小此木良子「埋納土器についての考察」
- 葛西 勲1979「十腰内I式土器の編年の細分」「北奥古代文化」第11号
- 葛西 勲2002「再葬土器棺墓の研究－縄文時代の洗骨葬－」
- 金子昭彦1995「十腰内I式と大湯式における型式としての諸問題－細分、組成、併行型式の問題－」「岩手考古学」第7号: 1-30
- 金子昭彦1998「十腰内I式土器の文様－文様の系列化」「岩手考古学」第10号: 9-30
- 川内町教育委員会1981「川代・邪馬尻遺跡発掘調査報告書」
- 川内町教育委員会1994「田野沢（2）遺跡・戸沢川代遺跡・戸沢（1）遺跡・鞍越遺跡」
- 木下 忠1970「戸口に胎盤を埋める呪術」「考古学ジャーナル」42: 12-18
- 桐原 健1995「埋甕」「縄文文化の研究9」「雄山閣: 249-258
- 小島朋夏2005「縄文時代における軽石模造品について」「北奥の考古学」葛西勲先生還暦記念論文集刊行会
- 見玉大成1999「小牧野遺跡における環状列石の構築時期」「青森県考古学」11: 15-32
- 佐井村教育委員会2004「糠森遺跡」
- 佐藤絃子2007「明治大学記念館前遺跡の胞衣埋納遺構」「明治大学博物館研究報告」: 89-101
- 佐原 真1995「ヨーロッパ先史考古学における埋納（デボ）の概念」「国立歴史民俗博物館研究報告」

第7集：523-573

鈴木克彦2001「北日本の縄文後期土器編年研究」雄山閣

鈴木克彦2000「岩手、秋田県北部の後期初葉土器の編年－湯舟沢A式の設定と提唱－」『岩手考古学』第12号：1-22

石器技術研究会編2004『石器づくりの実験考古学』学生社

田中英司1992「縄文草創期の墓－器物の配置と散布－」『考古学研究』39-1：29-57

田中英司1995「日本先史時代のデボ」『考古学雑誌』80-2：1-71

田中英司2007「デボと交易」『縄文時代の考古学6 ものづくり』同成社：287-296

成田滋彦1981「後期の土器－青森県の土器」『縄文文化の研究4』雄山閣：123-132

成田滋彦1989「入江・十勝内式土器様式」『縄文土器大観4』小学館：277-280

成田滋彦1998「屋内埋設土器考－青森県の事例を中心に－」『史跡三内丸山遺跡年報』2：26-39

東通村教育委員会1985「石持納屋遺跡発掘調査報告書」

東通村教育委員会2003「瀧之不動明遺跡・岩屋近世貝塚発掘調査報告書」

東通村史編集委員会1999「向野2遺跡発掘調査報告書」「東通村史－遺跡発掘調査報告書編」

本間 宏1988「縄文時代後期初頭土器群の研究（2）」「よねしろ考古」第4号：71-84

むつ市教育委員会1980「最花貝塚第2次調査報告」むつ市文化財調査報告第6集

むつ市教育委員会1981「上道遺跡発掘調査報告」むつ市文化財調査報告第7集

むつ市教育委員会1986「最花貝塚第4次調査報告」

むつ市教育委員会1986「梨ノ木平遺跡発掘調査報告」むつ市文化財調査報告第12集

むつ市教育委員会1988「梨ノ木平遺跡第2次発掘調査報告」むつ市文化財調査報告第14集

むつ市教育委員会1990「梨ノ木平遺跡第3次発掘調査報告」むつ市文化財調査報告第16集

むつ市教育委員会2010「むつ市文化財調査報告」第38集

脇野沢村教育委員会1979「家の上・外崎沢（1）遺跡」脇野沢村文化財報告書第1集

脇野沢村教育委員会1984「貝崎遺跡発掘調査報告書」脇野沢村文化財調査報告第3集

脇野沢村教育委員会1991「稲平遺跡発掘調査報告書」脇野沢村文化財調査報告第4集

脇野沢村農林畜産課1998「渡向（2）遺跡 尾野崎遺跡」第1分冊

脇野沢村農林畜産課1998「稲平遺跡」第3分冊

脇野沢村農林畜産課1998「田ノ沢遺跡 外崎沢（1）・（2）遺跡」第4分冊

渡辺 誠1970「縄文時代における埋甕風習」『考古学ジャーナル』40：9-17

土器觀察表

土器觀察表

國版番号	地名 番号	出土上場号	出土遺物	出土位置	出土層位	器種	部位	口径 (cm)	高さ (cm)	厚さ (cm)	文様などの特徴			時期	備考	
											内縁	外縁	内縁			
国版- 4	066	遺構外	C-13	灰瓦	深鉢	GJ縁部	(-)	(-)	(9.4)		平口縁、口縁面高さ1.5cm、身の内側に両面施文（草葉模様等5種類）				十世紀内	模状化物
国版- 5	112	遺構外	D-10	瓦	深鉢	口縁部	(-)	(-)	(4.0)		口縁面高さ1.5cm、身の内側に両面施文（草葉模様等5種類）				古墳時代	瓦ハジケ
国版- 6	069	遺構外	D-11	瓦	深鉢	口縁部	(-)	(-)	(4.0)		口縁面高さ1.5cm、身の内側に両面施文（草葉模様等5種類）				古墳時代	模状化物
国版- 7	096	遺構外	G-4	瓦	深鉢	口縁部	(-)	(-)	(10.9)		口縁面高さ1.5cm、身の内側に両面施文（草葉模様等5種類）				古墳時代	瓦ハジケ
国版- 8	071	遺構外	D-12	瓦	深鉢	口縁部	(-)	(-)	(7.2)		口縁面高さ1.5cm、身の内側に両面施文（草葉模様等5種類）				古墳時代	模状化物
国版- 9	028	遺構外	D-16	瓦	深鉢	口縁部	(-)	(-)	(6.4)		口縁面高さ1.5cm、身の内側に両面施文（草葉模様等5種類）				古墳時代	瓦ハジケ
国版- 10	075	遺構外	D-12	瓦	深鉢	口縁部	(-)	(-)	(2.0)		口縁面高さ1.5cm、身の内側に両面施文（草葉模様等5種類）				古墳時代	瓦ハジケ
国版- 11	068	遺構外	D-12	瓦	深鉢	口縁部	(-)	(-)	(2.0)		口縁面高さ1.5cm、身の内側に両面施文（草葉模様等5種類）				古墳時代	瓦ハジケ
国版- 12	092	遺構外	F-5	瓦	深鉢	口縁部	(-)	(-)	(5.1)		口縁面高さ1.5cm、身の内側に両面施文（草葉模様等5種類）				古墳時代	瓦ハジケ
国版- 13	110	P-10	遺構外	D-17	1-2鉢	底部	(-)	10.1	(2.7)		直口縁、口縁面高さ1.5cm、身の内側に両面施文（草葉模様等5種類）				中世後半～近世	模状化物
国版- 14	079	遺構外	D-12	瓦	深鉢	腰帯・一部	(-)	5.9	0.0		腰帯、口縁面高さ1.5cm、身の内側に両面施文（草葉模様等5種類）				古墳時代	模状化物
国版- 15	062	遺構外	E-7	瓦	深鉢	口縁部	(-)	(-)	(7.6)		腰帯、口縁面高さ1.5cm、身の内側に両面施文（草葉模様等5種類）				古墳時代	模状化物
国版- 16	055	遺構外	1-4	灰土		底部	(-)	(-)	(9.6)	(2.3)	底部断面丸形（一輪織え一舟溝り一舟溝り一舟溝り）				中世後半～近世	模状化物

石器觀察表

國版番号	整理番号	取上番号	出土遺物	出土位置	出土層位	種類	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ(g)	石質	備考	
国版- 7	9	01	SI-01	D-12	覆土	石盤	石盤	2.59	1.6	0.7	25	珪質白石		
国版- 10	05	S-13	SI-01	C-12	覆土	石盤	石盤	5.8	30	0.66	103	珪質白石		
国版- 7	11	20	S-5	SI-01	D-12	覆土	台石・石盤	24.8	17.8	5.8	3978	安山岩		
国版- 7	12	17	SI-01	D-12	覆土	礫器	礫器	8.8	7.0	3.25	261.9	花崗閃长岩		
国版- 8	19	S-1	SI-01	D-12	覆土	自然理		13.5	7.1	3.0	7541	安山岩	使用痕なし	
国版- 8	82	S-2	SI-01	D-12	覆土	自然理		8.6	7.5	4.8	3585	安山岩		
国版- 8	83	S-3	SI-01	D-12	覆土	磨擦器	スリ	10.8	6.2	3.6	3462	安山岩		
国版- 1	03	S-36	SI-02	不明	覆土	石盤	石盤	2.45	1.25	0.25	0.9	珪質白石		
国版- 2	48	S-14	SI-02	E-10	覆土	石盤	石盤	2.72	1.45	0.5	12	珪質白石		
国版- 3	02	S-11	SI-02	D-10	覆土	石盤	石盤	3.85	1.35	0.85	27	珪質白石		
国版- 4	08	S-22	SI-02	E-10	床面	不定形石器		2.8	5.0	0.9	58	珪質白石		
国版- 5	01	S-9	SI-02	E-11	覆土	磨擦器	タタキ	15.4	8.2	6.3	9062	ダイサイト		
国版- 6	06	S-8	SI-02	E-11	覆土	磨擦器	スリ	13.85	8.4	8.0	9099	ダイサイト		
国版- 3	49	SI-03	B-10	P-1 内襷土		石盤		1.8	1.15	0.25	0.4	瑪瑙		
国版- 4	07	SI-03	B-9	覆土		磨擦器	タタキ	12.0	8.65	4.6	726.0	花崗閃長岩	アスマルト付着	
国版- 5	21	S-4	SI-03	B-10	覆土	石盤	石盤	45.3	21.3	8.2	14240.0	ダイサイト		
国版- 13	10	S-21	SI-06	D-6	覆土	小形石石器		3.25	1.0	0.9	4.8	珪質白石		
国版- 17	09	S-13	SI-06	D-7	2	小形石石器		6.9	4.9	1.9	58.0	珪質白石		
国版- 15	42	S-19	SI-06	D-6	1	石核		1.0	5.75	2.9	110.0	珪質白石		
国版- 16	11	S-4	SI-06	D-7	2	磨擦器	タタキ	9.1	7.9	5.55	424.7	ダイサイト		
国版- 17	56	S-29	SI-06	D-7	2	磨擦器	タタキ	9.0	6.5	3.75	375.0	珪質白石		
国版- 17	18	I-14	SI-06	D-6	覆土	磨擦器	タタキ	6.6	3.45	1.0	209.7	チャート		
国版- 18	1	02	S-100	S-1	66	磨擦器	タタキ	16.8	10.0	7.8	1885.0	花崗閃長岩		
国版- 18	-2	22	S-8	S-1	66	磨擦器	タタキ	17.85	16.25	6.8	2460.1	ダイサイト		
国版- 18	3	24	S-113	S-1	66	磨擦器	タタキ	22.2	11.9	8.0	2663.2	ダイサイト		
国版- 18	4	23	S-28	S-1	66	磨擦器	タタキ	28.8	18.85	8.6	5340.0	ダイサイト		
国版- 18	5	3	S-1	S-1	66	磨擦器	タタキ	26.6	17.3	9.3	4448.5	滑流凝灰岩		
国版- 6	84	S-4	SI-06	D-7	1	磨擦石斧		12.5	6.1	4.2	431.0	ダイサイト		
国版- 21	2	S-1	SK-01	D-14	覆土	刮片		5.7	1.75	0.7	6.9	珪質白石		
国版- 21	3	04	S-9	SK-03	E-7	覆土	石盤	3.05	1.25	0.65	2.0	珪質白石	縫合	
国版- 21	4	08	S-6	SK-03	E-7	覆土	磨擦器	FFH-23	13.6	7.9	5.5	521.8	ダイサイト	
国版- 21	7	46	S-1	SK-04	D-7	覆土	石盤	2.85	1.5	0.6	1.6	珪質白石		
国版- 21	8	85	S-2	SK-04	D-7	覆土	磨擦石斧	8.2	1.6	1.1	238.0	綠色凝灰岩		
国版- 21	12	27	S-8	SK-05	D-19	床面	柱状塊	59.7	10.6	10.1	10200.0	ダイサイト		
国版- 21	6	1		刮片集中-I	C-17	覆土	石盤	5.7	2.55	0.9	9.1	珪質白石	使用痕なし	
国版- 26	3	61		刮片集中-I	C-17	覆土	微小刮削痕のある刮片	4.9	4.5	1.4	187.0	珪質白石	S-62-63-64と接合	
国版- 26	4	62		刮片集中-I	C-17	覆土	微小刮削痕のある刮片	4.5	4.8	1	123.0	珪質白石	S-61-63-64と接合	
国版- 26	5	63		刮片集中-I	C-17	覆土	微小刮削痕のある刮片	5.7	3.9	1	194.0	珪質白石	S-61-63-64と接合	
国版- 26	7	64		刮片集中-I	C-17	覆土	微小刮削痕のある刮片	5.18	6.15	1.4	330.0	珪質白石	S-61-62-63と接合	
国版- 26	8	69		刮片集中-I	C-17	覆土	微小刮削痕のある刮片	3.95	4.5	1.1	17.2	珪質白石	S-70と接合	
国版- 26	9	70		刮片集中-I	C-17	覆土	微小刮削痕のある刮片	5.4	6.3	1.4	39.5	珪質白石	S-69と接合	
国版- 29	1	45	S-9	E-9	II	石盤		3.3	1.75	0.38	2.2	珪質白石		
国版- 29	2	47	S-16	H-3	II	石盤		3.3	1.2	0.6	2.0	珪質白石		
国版- 29	3	50	S-2	B-16	II	石盤		7.0	3.5	1.8	34.4	珪質白石		
国版- 29	4	52		G-6	II	石核		9.3	3.25	1.15	25.5	珪質白石		
国版- 29	5	51	S-1	B-3	II	石核		6.6	4.3	0.8	20.2	珪質白石		
国版- 29	6	67		刮片外	F-7	II	石盤	385	5.6	1.5	17.9	珪質白石		
国版- 29	7	66		刮片外	D-12	II	石盤	385	2.4	0.7	5.9	珪質白石		
国版- 29	8	29	S-2	B-15	II	石盤		3.7	4.7	1.7	19.3	珪質白石		
国版- 29	9	21		刮片外	D-12	II	不定形石器(縫合)	3.5	4.55	1.1	10.6	珪質白石		
国版- 29	10	53		刮片外	C-17	II	不定形石器	10.3	5.2	1.23	32.8	珪質白石		
国版- 29	11	54		刮片外	C-18	II	不定形石器	8.55	3.2	2.3	48.5	珪質白石		

石器観察表

国版番号	整理番号	取上番号	出土遺構	出土位置	出土層位	種類	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備考	
国30-1	32	S-15	遺構外	E-26	盛土	両側面削痕のある砾石		4.75	4.4	1.75	31.5	珪質白岩		
国30-2	39		遺構外	E-6	I	両側面削痕のある砾石		3.65	3.4	1.5	18.9	珪質白岩		
国30-3	19		遺構外	D-5	I	不定形石器		3.68	2.13	1.0	7.9	珪質白岩		
国30-4	40		遺構外	C-13	I	不定形石器		3.2	3.4	1.4	16.2	珪質白岩		
国30-5	15		遺構外	B-16	I	不定形石器		6.6	4.6	1.6	36.5	珪質白岩		
国30-6	12		遺構外	E-14	II	不定形石器		6.3	4.5	1.6	45.2	珪質白岩		
国30-7	14		遺構外	E-6	I	不定形石器		7.0	2.6	0.7	10.4	珪質白岩		
国30-8	11		遺構外	E-9	I	不定形石器		5.6	2.5	1.5	15.4	珪質白岩		
国30-9	44		遺構外	D-9	I	石核		8.45	7.4	2.9	163.3	珪質白岩		
国30-10	47		遺構外	C-19	I	石核		4.2	7.25	3.2	56.3	珪質白岩		
国30-11	17		遺構外	D-5	I	不定形石器		3.15	2.95	1.2	16.9	珪質白岩	黒鋼研	
国30-12	24		遺構外	G-5	II	不定形石器		5.3	2.95	1.4	18.9	珪質白岩		
国31-1	87		遺構外	D-12	II	磨製石斧		7.7	3.6	2.45	92.9	麻灰岩		
国31-2	88	S-1	遺構外	H-12	II	磨製石斧		10.6	2.6	1.9	128.5	月光石		
国31-3	90		遺構外	F-6	I	磨製石斧		13.0	4.8	3.0	287.4	花崗閃長岩		
国31-4	92	S-1	遺構外	B-16	II	打製石斧		10.5	4.3	2.5	143.4	花崗閃長岩		
国31-5	18		遺構外	J-3	II	磨器		12.5	7.3	4.7	604.1	花崗閃長岩		
国31-6	67		遺構外	E-7	I	磨器		8.6	8.3	2.45	274.1	花崗閃長岩		
国31-7	62		遺構外	C-8	I	磨器?		7.8	7.4	4.5	312.7	花崗閃長岩		
国31-8	66		遺構外	F-5	I	磨器		13.9	7.0	3.3	363.7	花崗閃長岩		
国31-9	64		遺構外	D-6	I	磨器		10.6	11.0	3.85	506.7	花崗閃長岩		
国32-1	65		遺構外	F-5	I	磨器		9.9	9.7	4.2	399.4	花崗閃長岩		
国32-2	70		遺構外	H-4	II	磨器		13.6	14.3	5.1	1058.5	デザイド		
国32-3	44		遺構外	G-4	I	磨器	スリ	11.3	9.4	4.7	764.0	デザイド		
国32-4	61	S-11	遺構外	B-16	II	敲撃器	タタキ	7.75	5.2	5.2	323.3	チャート		
国32-5	68		遺構外	E-17	II	直削 鍛造面	埋器	30.5	11.1	3.95	564.9	花崗閃長岩	両刃	
国32-6	59		遺構外	F-6	I	敲撃器	タタキ	7.8	7.6	4.6	303.3	チャート		
国32-7	16	S-5	遺構外	B-16	II	敲撃器	タタキ	8.0	8.7	5.3	410.5	チャート		
国32-8	37		遺構外	F-5	I	敲撃器	タタキ	16.8	9.3	5.3	1131.9	花崗閃長岩		
国33-1	10	S-5	遺構外	D-17	1-2	敲撃器	タタキ	11.5	8.95	5.6	862.5	デザイド		
国33-2	09	S-7	遺構外	E-14	II	敲撃器	スリ	9.7	7.55	2.2	264.1	花崗閃長岩		
国33-3	51		遺構外	B-16	I	敲撃器	タタキ	6.5	4.3	4.0	190.1	花崗閃長岩		
国33-4	04	S-8	遺構外	E-14	II	敲撃器	タタキ	10.35	7.15	2.5	221.3	デザイド		
国33-5	12	S-2	遺構外	D-17	5	敲撃器	凹み	11.8	7.4	4.3	507.4	デザイド		
国33-6	39		遺構外	F-5	I	敲撃器	タタキ	9.7	6.4	3.15	226.9	安山岩		
国33-7	05		遺構外	G-5	II	敲撃器	タタキ	9.4	7.1	3.4	235.1	デザイド		
国33-8	28		遺構外	D-6	I	敲撃器	タタキ	8.6	5.25	4.0	202.8	麻灰岩		
国33-9	47		遺構外	F-5	I	敲撃器	タタキ	10.6	7.4	3.95	497.3	花崗閃長岩		
国33-10	46		遺構外	G-4	I	敲撃器	スリ	14.0	7.2	6.1	750.5	デザイド		
国34-1	49		遺構外	D-12	II	敲撃器	凹み	10.7	9.8	3.35	393.5	デザイド		
国34-2	36		遺構外	E-15	I	敲撃器	タタキ	10.3	7.75	4.7	511.6	デザイド		
国34-3	53		遺構外	D-11	II	敲撃器	タタキ	9.5	7.3	5.1	421.0	麻灰岩		
国34-4	54		遺構外	D-17	II	直削 鍛造面	敲撃器	タタキ	7.4	6.7	5.25	347.5	珪質白岩	
国34-5	58		遺構外	F-5	I	敲撃器	タタキ	9.6	5.7	5.0	357.4	デザイド		
国34-6	35		遺構外	E-5	II	敲撃器	タタキ	9.3	5.2	4.5	290.1	花崗閃長岩		
国34-7	34		遺構外	D-18	II	直削	敲撃器	タタキ	18.8	6.9	5.6	1278.0	デザイド	
国34-8	29		遺構外	D-6	I	敲撃器	タタキ	8.3	4.8	3.3	134.0	月光石		
国35-1	60		遺構外	F-6	I	敲撃器	タタキ	9.0	9.1	5.8	587.0	麻灰岩		
国35-2	52		遺構外	D-8	II	敲撃器	タタキ	7.7	5.9	5.0	222.8	チャート		
国35-3	57		遺構外	F-5	I	敲撃器	タタキ	7.7	7.2	6.1	439.5	チャート		
国35-4	50	S-7	遺構外	B-10	II	敲撃器	タタキ	9.6	6.8	4.1	276.4	チャート		
国35-5	15	S-6	遺構外	E-14	II	敲撃器	タタキ	10.5	6.2	4.4	400.2	チャート		
国35-6	56		遺構外	E-8	II	敲撃器	タタキ	5.4	4.7	2.6	75.0	チャート		
国35-7	73		遺構外	E-6	I	台石、石皿		16.7	15.0	6.6	1993.1	デザイド		

土製品観察表

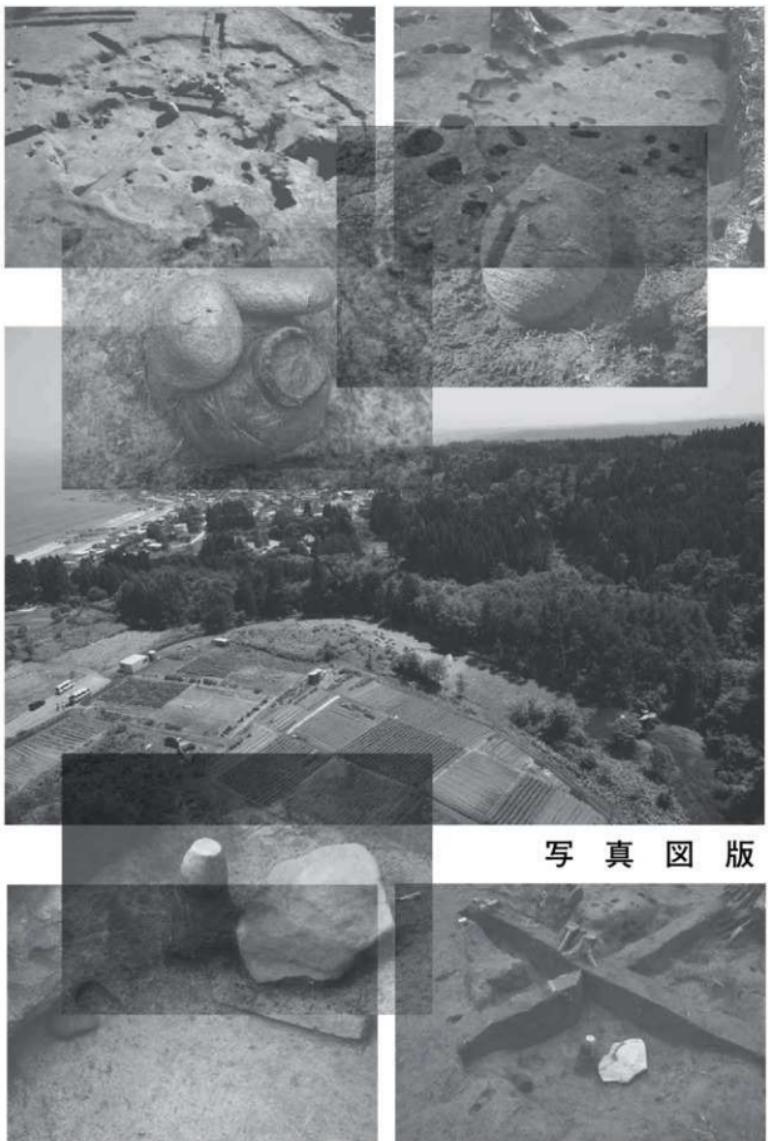
国版番号	使用番号	取上番号	出土遺構	出土位置	出土層位	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	文様などの特徴	時期	備考
国28-17	02		遺構外	H-4	II	土製品	3.3	3.35	0.68	沈羅文	十箇内 I	土製品部片を円板状に加工
国28-18	01		遺構外	E-9	II	土製品	2.63	2.9	0.65	沈羅文(2-3条単位)	十箇内 I	土製品部片を円板状に加工

石製品観察表

国版番号	整理番号	取上番号	出土遺構	出土位置	出土層位	種類	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備考
国18-7	3	S-1	SI-06	D-7	II	磨石	磨石製品	(5.65)	(6.35)	2.6	29.2	軽石	
国18-8	4	S-2	SI-06	D-7	II	磨石	磨石製品	(4.75)	(6.7)	2.8	37.8	軽石	
国18-9	1		遺構外	B-19	I	石棒		5.75	4.9	4.85	22.6	安山岩	
国18-10	2		遺構外	E-7	I	石製品		5.7	3.6	1.5	34.0	麻灰岩	

陶磁器・ガラス製品観察表

調査番号	整理番号	出土施設	出土位置	出土層位	種類	型種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	時期	参考
国36- 1	01	造橋外	G-4	I	陶器部	鉢	(47)	(-)	(365)	江戸	
国36- 2	02	造橋外	I-2	II	陶器部	鉢	(20)	(-)	(29)	江戸	
国36- 3	12	造橋外	D-6	I	陶器部	紅皿	4.5	1.2	1.35	江戸	
国36- 4	04	造橋外	D-6 F-7	I	陶器部	皿	15.9	7.8	4.0	明治	
国36- 5	05	造橋外	F-7	I	陶器部	皿	11.65	5.8	2.1	戦中～現代	戦時被制品、残386
国36- 6	06	造橋外	G-4	I	陶器部	小砾	5.0	1.8	2.8	戦中～現代	戦時被制品、残203
国36- 7	11	造橋外	F-6	I	陶器部	瓶	4.2	(-)	(9.4)	戦中～現代	
国36- 8	07	造橋外	C-19	I	陶器部	急須	(31)	(-)	(35)	戦中～現代	
国36- 9	09	造橋外	D-8	I	ガラス製品	おはじき	長さ 2.31	幅 2.25	厚さ 0.8	戦中～現代	
国36- 10	10	造橋外	E-13	I	ガラス製品	おはじき	長さ 1.7	幅 1.55	厚さ 0.35	戦中～現代	
国36- 11	14	造橋外	F-7	I	ガラス製品	点眼器	長さ 1.7	幅 0.35	厚さ 0.5	戦中～現代	
国36- 12	08	造橋外	F-6	I	ガラス製品	ビール瓶	2.3	6.0	23.35	戦中～現代	
国36- 13	13	造橋外	D-6	I	陶器部	蓋	9.9	4.2	3.2	戦中～現代	



写 真 図 版

写真図版 1 調査区全景



調査区全景 東→



調査区全景 西→

写真図版2 巨礫部分・第6号住居跡 炉跡



調査区西部巨礫部分 北→



第6号住居跡 炉1確認状況 南西→

写真図版3 住居跡（1）



第1号住居跡 完掘 西→



第1号住居跡 遺物出土状況 北→



第1号住居跡 遺物出土状況 北→



第1号住居跡 床下埋設遺構 出土状況 西→



第1号住居跡 床下埋設遺構 出土状況 西→



第1号住居跡 炉1・2出土状況 西→



第1号住居跡 炉1 出土状況 西→



第1号住居跡 床面下 土層 南西→

写真図版4 住居跡（2）



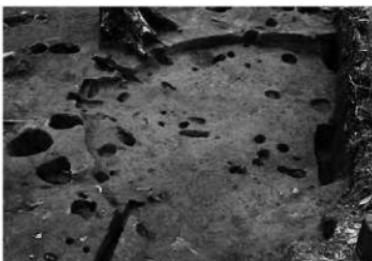
第1号住居跡 ピット28 完掘 南→



第1号住居跡 ピット28 土層 南→



第2号住居跡 完掘 南→



第2号住居跡 床面焼土範囲出土状況 東→



第2号住居跡 遺物出土状況 南西→



第2号住居跡 遺物出土状況 南西→

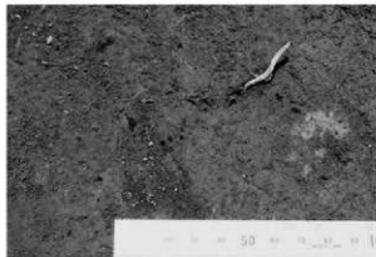


第2号住居跡 断面土層 南→

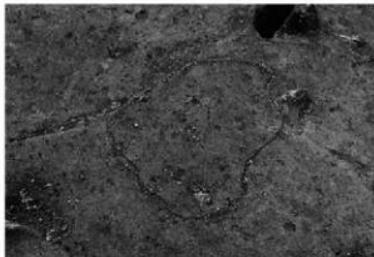


第2号住居跡 炭化種実・灰出土状況 南東→

写真図版5 住居跡（3）



第2号住居跡 炭化種実・灰出土状況 南西→



第2号住居跡 床面焼土出土状況 南西→



第2号住居跡 床面焼土 断面土層 西→



第2号住居跡 全掘 南→



第3号住居跡 断面土層 西→



第3号住居跡 遺物出土状況 北→



第3号住居跡 完掘 北東→



第3号住居跡 爐 完掘 北東→

写真図版6 住居跡（4）



第3号住居跡 炉 断面土層 北東→



第3号住居跡 全掘 北東→



第4号住居跡 完掘 北西→



第4号住居跡 全掘 北→



第4号住居跡 遺物土出土状況 南→



第4号住居跡 遺物土出土状況 南→



第4号住居跡 東西断面土層 南→



第4号住居跡 東西断面土層 南西→

写真図版7 住居跡（5）



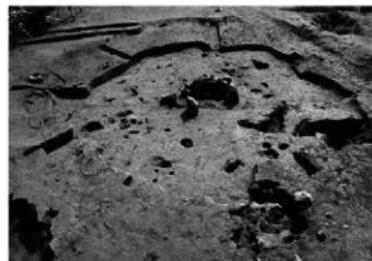
第4号住居跡 南北断面土層 北西→



第4号住居跡 床下 断面土層 西→



第6号住居跡 完掘 東→



第6号住居跡 全掘 東→



第6号住居跡 断面土層 南→



第6号住居跡 床下断面土層 南→



第6号住居跡 遺物出土状況 西→



第6号住居跡 遺物出土状況 南→

写真図版8 住居跡（6）・土坑（1）



第6号住居跡 遺物出土状況 南西→



第6号住居跡 遺物出土状況 南→



第6号住居跡 遺物出土状況 南→



第6号住居跡 遺物出土状況 南→



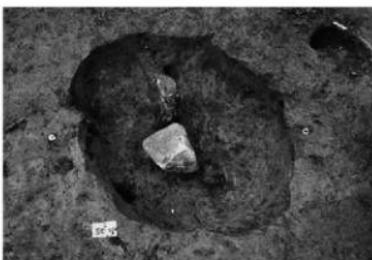
第6号住居跡 遺物出土状況 南→



第6号住居跡 炉1確認状況 南西→



第6号住居跡 炉1断面土層 北東→



第1号土坑 完掘 南→

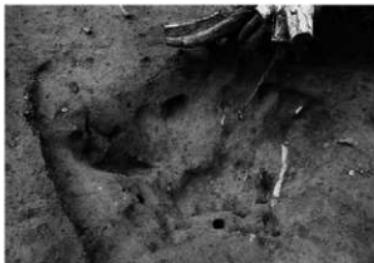
写真図版9 土坑（2）



第2号土坑 完掘 南東→



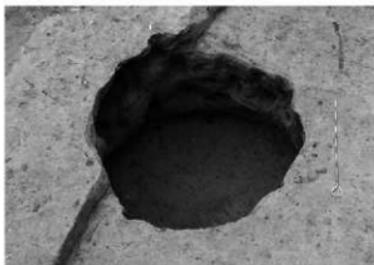
第2号土坑 確認状況・断面土層 南東→



第4号土坑 完掘 南→



第4号土坑 断面土層 南→



第5号土坑 完掘 西→



第5号土坑 断面土層 西→



第5号土坑 遺物出土状況 西→



第5号土坑 遺物出土状況 南→

写真図版10 土坑（3）



第5号土坑 遺物出土状況 南西→



第5号土坑 底面遺物出土状況 西→



第6号土坑 完掘 東→



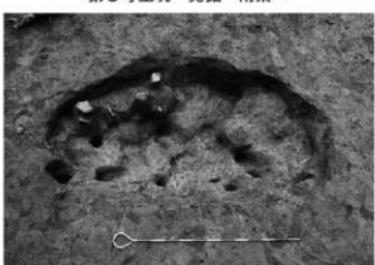
第6号土坑 断面土層 東→



第8号土坑 完掘 南東→



第8号土坑 断面土層 北西→

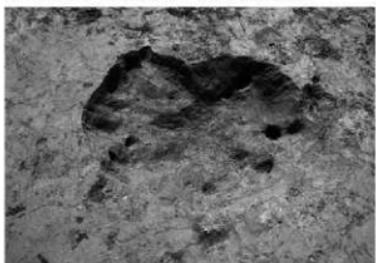


第9号土坑 完掘 東→



第9号土坑 断面土層 東→

写真図版11 土坑（4）・焼土遺構（1）



第13号土坑 完掘 西→



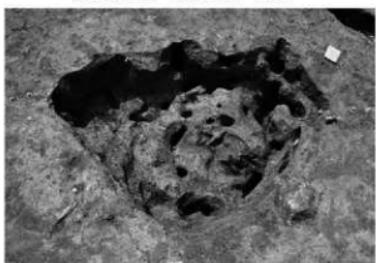
第13号土坑 断面土層 北西→



第15号土坑 断面土層 南西→



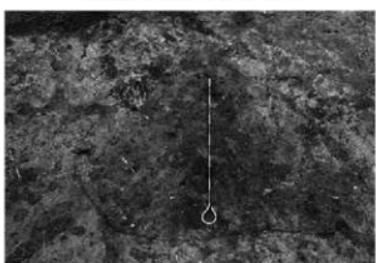
第15号土坑 完掘 南西→



第1号焼土遺構 完掘 北→



第1号焼土遺構 断面土層 南→



第1号焼土遺構 確認状況 南→



第2号焼土遺構 完掘 北→

写真図版12 焼土遺構（2）・ピット・基本層序等



第2号焼土遺構 断面土層 北→



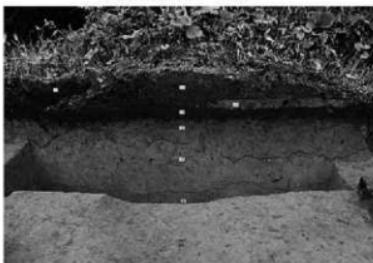
第2号焼土遺構 確認状況 北→



巨礫確認状況 南東→



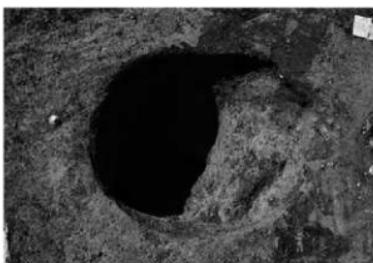
巨礫周辺作業状況 西→



調査区西部基本層序 北→



調査区北部基本層序 西→



ピット11 完掘 南東→



ピット11 土層 北西→

写真図版13 ピット



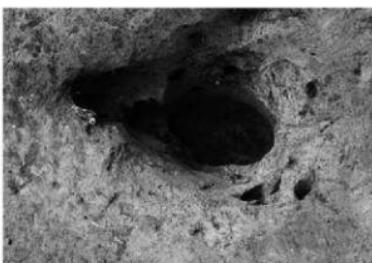
ピット12 土層 北→



ピット19 土層 東→



ピット23・24 土層 東→



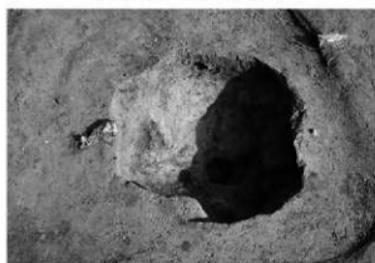
ピット61 完掘 南東→



ピット61 土層 南東→



ピット62 土層 北東→



ピット64 完掘 北→



ピット64 土層 北→

写真図版14 防空壕？・作業風景等



防空壕？ 北→



防空壕？ 北→



作業風景 東→



作業風景 西→



作業風景 南→



遺跡南を流れる下狄川 西→



下狄川河口 西→



調査区近くの神社 南→

写真図版15 住居跡出土遺物（1）



図7-1

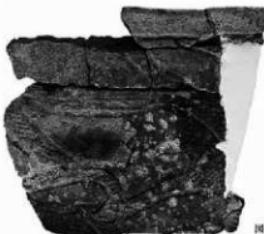


図7-3



図7-4



図7-5



図7-2



図7-6



図7-7



図7-8



図7-9



図7-10



図7-12

第1号住居跡



図8-1



図8-2



図8-3



図8-4

第1号住居跡 床下土器埋設遺構

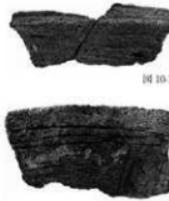


図10-1



図10-3



図11-1

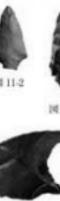


図11-2



図11-3



図11-5



図11-6

第2号住居跡

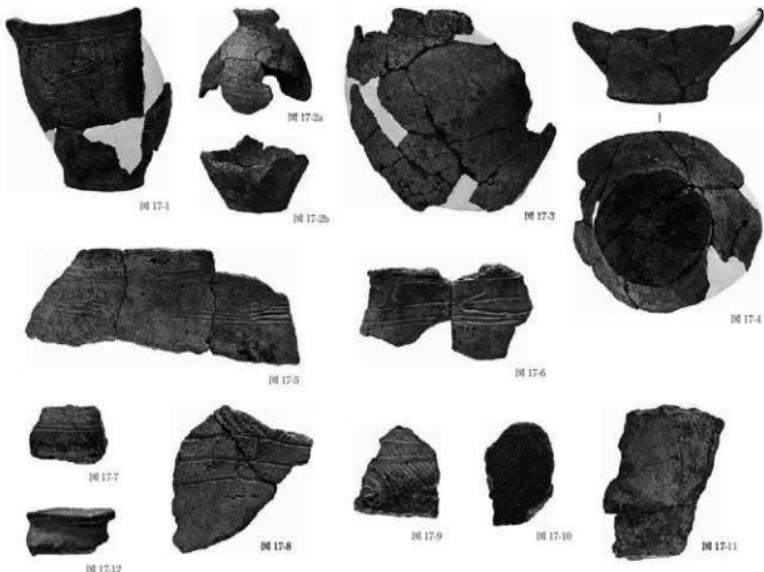
写真図版16 住居跡出土遺物（2）



第3号住居跡



第4号住居跡



第6号住居跡

写真図版17 住居跡出土遺物（3）・土坑出土遺物



写真図版18 遺構外出土遺物（1）



図27-1

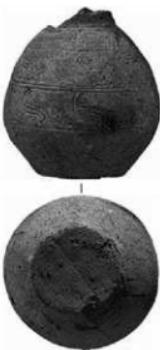


図27-2



図27-3



図27-4



図27-5



図27-6



図27-7



図27-8



図27-9a



図27-9b



図27-9c



図27-10



図27-11



図27-12



図27-13



図27-14



図27-15



図27-16



図27-17



図27-18



図27-19

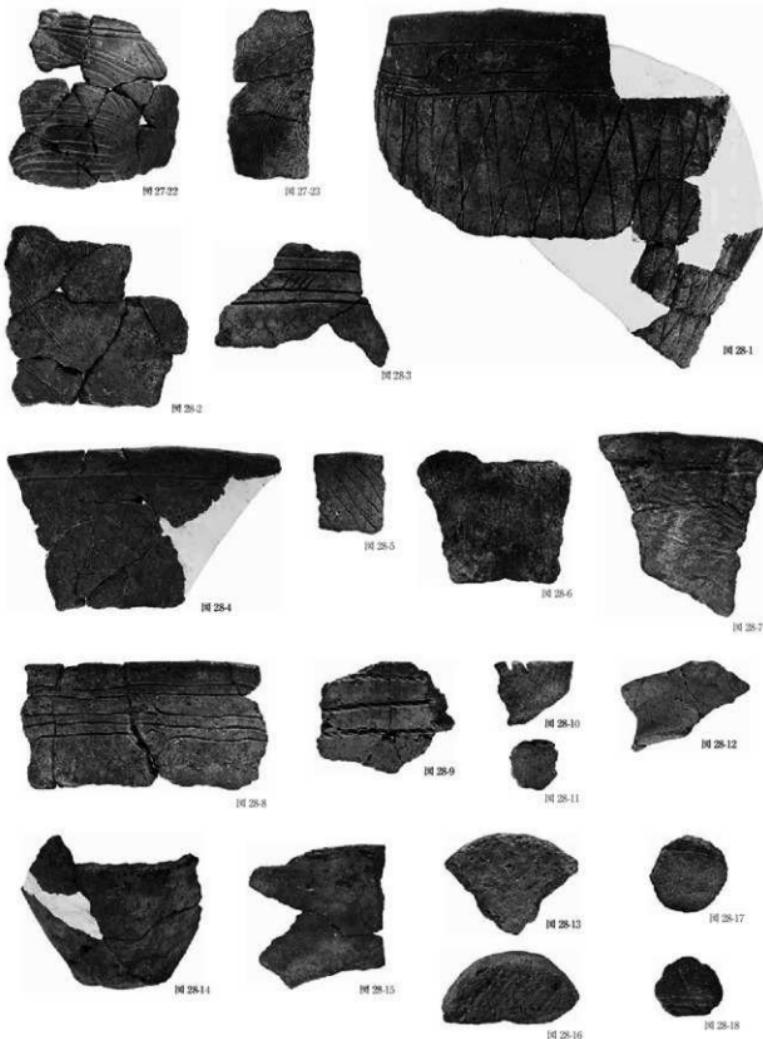


図27-20

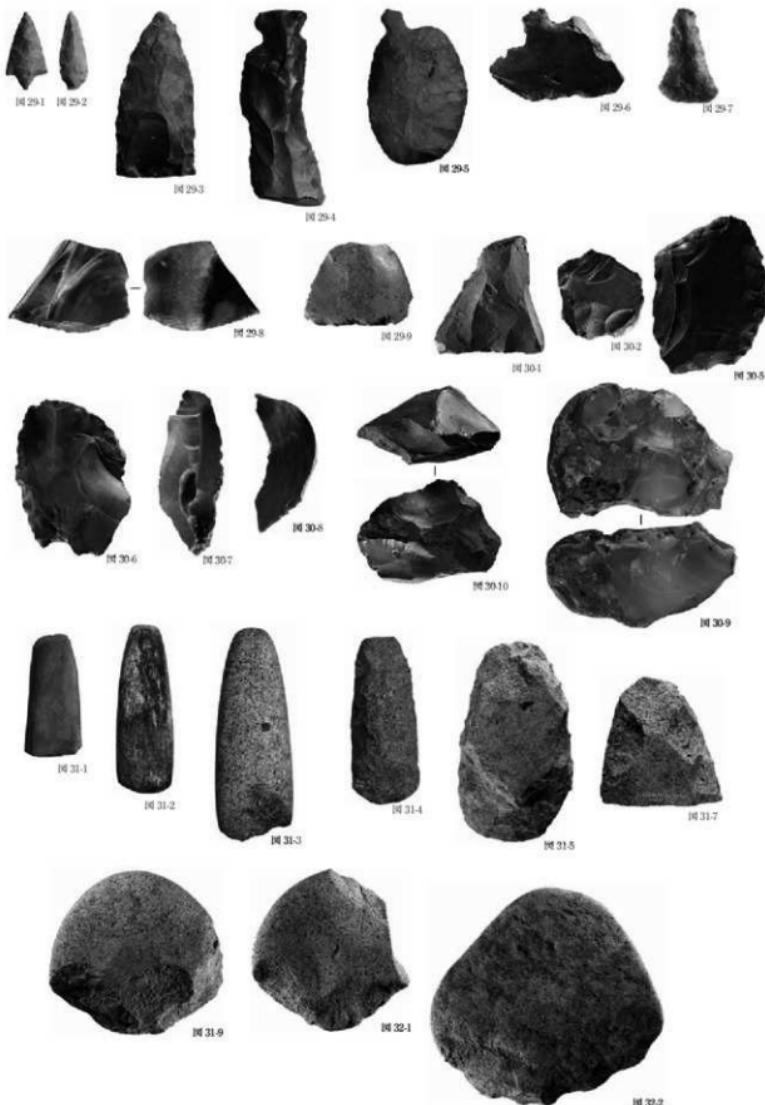


図27-21

写真図版19 遺構外出土遺物（2）



写真図版20 遺構外出土遺物（3）



写真図版21 遺構外出土遺物 (4)



報告書抄録

ふりがな 書名	おおはたいえのうえいせき 大烟家ノ上遺跡						
副書名	国道279号二枚橋バイパス道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告						
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第504集						
編著者名	岩田 安之 最上 法聖						
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター						
所在地	〒038-0042 青森県青森市新城字天田内152-15 TEL 017-788-5701						
発行機関	青森県教育委員会						
発行年月日	西暦2011年4月28日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
大烟家ノ上遺跡	青森県もつ古 大烟町大字二 枚橋約1km 字家ノ上地内	市町村 02208	遺跡番号 208152	日本測地系 (Tokyo Datum) 41° 24' 50" 141° 9' 23" 世界測地系 (JGD2000) 41° 25' 01" 140° 9' 12"	4月27日 7月7日	2,060m ²	国道279号二枚橋 バイパス道路改 築事業に伴う事 前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
大烟家ノ上遺跡	集落跡	縄文時代	住居跡 土坑 ピット 焼土遺構 剥片集中	5軒 11基 60基 2基 1ヶ所	縄文土器 (中期末葉～後期前葉) 円板状土製品 (後期前葉) 石器・石棒・輕石製品		
要約	大烟家ノ上遺跡は、下北半島の津軽海峡を望む海岸段丘上に位置する。縄文時代後期前葉に属すると推測される集落跡が発見された。出土遺物は主に十腰内1式に比定される土器と、同時期と推測される石器が出土している。また、フラスコ状土坑からは中期末葉の深鉢が出土した。						

青森県埋蔵文化財調査報告書 第504集

大畠家ノ上遺跡

-国道279号二枚橋バイパス道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告-

発行年月日 2011年4月28日

発 行 青森県教育委員会

編 集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038-0042 青森市大字新城字天田内152-15

TEL 017-788-5701

印 刷 長尾印刷株式会社

〒030-0931青森市平新田字森越17-1

TEL 017-726-7121



活彩あおもり